
Angel Beats! ?The second life-

clow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n g e l B e a t s ! ? T h e s e c o n d l i f e -

【Nコード】

N 4 8 6 5 U

【作者名】

c l o w

【あらすじ】

主人公は、その胸に守れなかった約束を抱いて、死後の世界に訪れる。彼は何を守り、彼の剣は何を斬るのか……。再び約束を果たすため、第二の人生のため、彼は歩みだす。

技と名前の一部をるる剣から拝借します。多少チート気味です。また、もう一つの小説と同時進行のため、こちらは更新が遅れます。その点をご了承下さい。

P r o r o g u e a n d F i r s t e p i s o d e (前書き)

こんにちは、作者です。初めての方は始めまして、c l o wと申すものです。駄文をつらつら書いております。もしよければ、最後までお付き合い下さい。

Prologue and First episode

— Prologue —

ダン！ダン！ダン！

「ぐうつ・・・おらぁ！」

ザシュッ！

ぎゃああああ・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・くそ」

段々、意識が遠のいていく

ちくしょう・・・約束、守れなかった・・・

くそつたれ・・・

Side 主人公

「・・・あ？」

ここは・・・どこだ？あれ・・・俺って死んだはずじゃないのか？
何だこの服、見たことも無い服だな。見たところ何かの制服のよう
だが・・・ん？

~~~~~♪

「音楽・・・」

似ている・・・彼女の声に。

「・・・行って見よう。まずは、ここがどんな場所なのか知りた  
い」

音楽が流れているなら、歌っている奴や、それを聞いている奴が居  
るはずだ・・・にしても広いな、ここは。

—体育館—

~~~~~

~~~~~♪

「凄い人ばかりだな・・・」

みんな、俺と同じ服を着てるな。だけど、このテンションには付いていけねえ・・・でも

~~~~~♪~~~~~

「上手いな」

率直に言つて上手いの一言だ。ずっと聞いていたくなるような、そんな歌声だ。それに・・・本当に、彼女の声に良く似ている。みんなが盛り上がるのも良く解るけど・・・なんか、俺と違うような気がするのには気のせいかな？

「止める！」

ん？誰だ？大人かな？

「ふざけたまねをしおって！これまでは大目に見ていてやっただけだ！！」

「つたく、人が気持ちよく聞いていたのを邪魔しやがって」

生憎今の俺の心は、前世(?)のおかげで荒れに荒れまくっている。

恨むんなら自分の不運を恨め。

S i d e 岩沢

くそっ・・・もうっただけ歌わせてくれよ！

「あっ」

「これはもう、いららないな？」

触るな・・・

「触るな・・・それにつ」

「おい」

「?!」

「うん？何だお前は？」

「人が気分良く歌聞いてんだ、邪魔すんじゃないやねえよ」
「お前！教師に対して、何だその口の・・・」

ドコッ

「うるせえよ」

「うつ・・・お前・・・」

バタッ

凄い・・・あの力自慢の体育教師が、一瞬でのされた。

「ほら」

「え？あ・・・」

あたしのギター・・・取り返してくれたんだ。

「よかったら、もう少し歌ってくれ」

「うん、いいけど・・・」

あたしも歌えるものなら、もう少し歌いたいし・・・でも、みんな先生や生徒会のメンバーに取り押さえられてる・・・それに、何よりもこの子。絶対に人間だ。戦線に連れて行かないと。

「ちよつと君！」

「なんだ？お前もやられたいのか？」

「うっ・・・」

うわ、あたしを抑えてた教師が、睨まれただけで逃げちゃった・・・

「・・・」

コツコツコツ・・・

まずい、天使が！いくらこの子でも天使にはかなわない。

「ごめん！取り敢えず今は逃げよう！」

「え？あ、おい！」

「こっち！」

何とか校長室まで行かないと・・・

「何処に向かつてるんだ？」

「そこを・・・でこんどは・・・に校長室があるから」

「うむ、わかった。失礼」

「え？」

ふわっ

「ちょ、ちよつと!？」

「様子から察するに、急いだほうがいいんだろ？なら任せろ」

いくらあたしが女の子で軽いからって、抱えたまま走れる・・・訳・
・・・

タタタタタッ

「速い・・・」

「もつと早く走れるが?」
「いや止めて、何か酔いそう・・・」

―校長室―

Side主人公

校長室・・・か。どうやらここは『学校』らしいな。来てる奴らが随分大きかったけど。

「なあ」

とりあえず、連れてきた歌の上手い女子に聞いてみよう。

「なに?」

「・・・ここは、何処なんだ?」

「そっか・・・良く考えたら来たばかりなんだよな。オーケー、先ず自己紹介を・・・」

「――も――も――も無し!」

おう? 誰か来たな、さっきの奴か? あの銀髪の子。あいつだけ、何か周りと違ってたから良く覚えている。

ガチャ

「あら岩沢さん、無事だったの？」

「うん？だれだそいつ？おお、まさか新人か！」

「こんなところで女子の部屋を漁る様なことになるとは・・・」

「貴様！いつまでもうじうじと五月蠅いぞ！」

「No problem！」

「そんなことを気にしては、この先生きていけませんよ」

「あさはかなり」

「だからクライストと・・・」

「岩沢さん！おいて行くななんてひどいですよ」

「そういうなって。天使が向かってきた時点で、逃げ切れたのは岩沢とその子ぐらいだし」

「そうですねーしおりん。だから岩沢さん、気にしないで下さい」

・・・いきなり賑やかになったな。正直いつて、こんな状況には慣れてないから、かなり居心地が悪い。

「みんな！静かに！今から勧誘に入るから、余計なお喋りはしない事！」

こいつがリーダー格か。

「それで・・・唐突だけど、あなた入隊してくれない？」

「は？」

「だから、我が『死んだ世界戦線』通称『SSS』に入隊してって言ってるの・・・と言うより、何さつきからそわそわしてるの？」
「いや・・・あまり人が多い状況には慣れてないもんで」

本当はもう一つあるんだが・・・ここでそれを言っても、どうにもならないだろう。

「その『SSS』とやらは置いて、先ずはこの世界について教えてくれ。ここは何処だ？」

「さつきも言っただでしょ？ここは死んだ後の世界。だから、ここで死ぬ事はないわ」

「正確に言つと、死ぬときの痛みは有るけど、時間がたてばまた生き返るんだ」

青髪が横からいう。何か嫌なシステムだな、痛みだけ味わうなんて。

「戦線の存在意義は？」

「あなたもそうだと思うけど、私たちの生きてきた世界で『死』は理不尽に与えられるもので、抗うすべは無かったわ。でもこの世界では違う！抗えるのよ！あたし達の最終目標は、天使を消し去り、この世界を手に入れること」

「この世界では死ねないんじゃないのか？」

「確かに、この世界では死ねません。ですが、かわりに消えるんです」

背の高いほうの眼鏡が言った。

「消える？」

「ええ。天使に従い、真面目に学校生活を送ると消えてしまうんです、文字通り。また、これは推測なのですが・・・この生活に満足感を覚えてしまっても消えてしまうようです」

「つまり、天使に抗ってさえいれば、この世界で生きていけるの」

次から次へと意味の解らん言葉が出てくるな・・・

「さつきから言ってる天使ってのは？」

「あなた、ライブ会場に居たからみてるんじゃないの？長い銀髪の女の子で、ここの生徒会長やってるわ」

ああ、あの銀髪か。天使が生徒会長とは・・・つか、何で天使？

「何で『天使』なんだ？」

「私たちは生前、理不尽な人生を送ってここに来たわ。そんな人生認めたくないじゃない？だから、あたし達はそんな理不尽を押し付けた『神』に抗うことにしたのよ。だけど、あの子は何回も私たちの邪魔をした。中にはあの子のいうことを聞いて、消された奴だつて何人も居るわ」

「で『神に繋がってる』天使』ってわけか」

「そういうこと」

「もう一度言うわ、『SSS』に入隊してくれない？」

神に抗う、か・・・

「いいだろう。その申し出、乗った」

「貴様！ ゆりっぺに対しゴフツ?!・・・」

なんかハルバード持った男が突っかかってきたと思ったら、次の瞬間地面に沈んでた。

「さあ、そうと決まったら馬鹿はおいといて、自己紹介に移るわよ！」

「あたしの名前は仲村ゆり、この戦線のリーダーを務めてるわ」
「よろしく」

差し出された手を取りながら、各メンバーの紹介を聞く。

「そこにいる青い髪の子が日向君。アホだけど、やるときはたまにやる男よ」

「だからそれフォローになってねえって！」

「その隣の大柄なのが松下君。生前は柔道五段だったらしいから、みんなは敬意をこめて松下五段って呼んでるわ」

「松下だ」

「おう、よろしく」

「あの窓際に立っていちいち眼鏡を上げてるのが高松君。知的に見えるけど本当はただのアホよ」

「高松です、よろしくお願いします」

「で、あの影で『あさはかなり』って呟いてるのが椎名さん」

「あさはかなり・・・」

「そのとなりが大山君、特徴が無いのが特徴よ」

「よろしく」

「後は順番に・・・」

（以下、割愛）

「それで、最後に彼が音無君。彼、記憶が無いらしいから、そのところ宜しくね」

「そうなのか？」

「ああ・・・ま、そのうち思い出すだろ」

「それじゃ、こっちの制服に着替えて。これが、一般生徒と私たちを区別する証でもあるわ。この制服を着てる子は、例外なくSSSのメンバーよ。他にもたくさん居るから、あつたら適当に挨拶でもしておいて」

「さて、今日はこの辺りで解散としましょう」

「なあ・・・一つ頼みたい事がある」

「なにかしら？」

「武器を手に入れるにはどうしたら良い？出来れば自分で作りたい」「ここで物を作るのは、やり方は簡単だけど難しいわよ。材料は土と記憶。土を持ったら、頭の中に強く作りたいものを思い描いて。」

そうすれば出来るはずよ。言うのは簡単だけど、実際にやってみるとかなり難しいわ」

「わかった」

「そう言えば、まだ名前を聞いて無かったわね」

「ああ。俺の名前は緋村光だ。もう一度言うが、宜しくな」

「では、改めて・・・ようこそ！我が『死んだ世界戦線』へ！」

P r o r o g u e a n d F i r s t e p i s o d e (後 書 き)

感想・ご意見等など常に待ってます

Episode 2

―運動場―

Side 主人公

「ここか」

ここになら土くれぐらい、いくらでもあるだろう。

「さて・・・早速相棒を呼び出すか」

適当に土を掘ってその穴に手を突っ込み、土の感触を感じながら前世を思い出す。父から受け継いだ誇り、最後まで貫けなかった誇りを。

「ん」

手に何か硬いものが当たる。ゆっくりと、尚も強くイメージしながら引き抜いたそれは・・・

「よう・・・久しぶりだな」

刃が逆に付いた日本刀『逆刃刀』だ。二、三度振ってみて、感触がまったく変わらない事を確認すると、満足した俺は教えられた寮へと行き、眠りについた。

翌日

Side主人公

朝六時に起床した俺は、七時まで適当に時間を潰して校長室に向かった。

「神も仏も天使も無し」

これは昨日教えられた合言葉である。なんでも、対天使用即死トラップらしい。

「おはよー」

「あら、意外に早いじゃない。もっと遅く来るもんだと思ってたわ」

既にゆりが、校長の椅子に座っていた。

「早起きは前世で慣れてるんでな」

「そう・・・よかつたら、話してくれない？生きていたときの事」

「ふ、大した事はない・・・そうだな、『大切な人を守りきれなかった』——この一言かな」

そう・・・俺は約束を、彼女を守れなかった。

「・・・そう。詳しくは・・・話せないのよね」

「察してくれてありがたい」

随分悲壮な顔をしていたんだろうな、俺は。

「あなた・・・変わった武器を作ったのね。生前は剣道でもやってたの？」

「いや・・・ま、信じられんとは思うが、俺はある王家のSPの家に生まれた。家は『飛天御剣流』という流派の本家で、この剣で常に主を守ってきた」

「凄いわね・・・何処の国、と言うよりあなた外人？」

「いや日本人だ。大抵の人間が知らない小さな島国で、そこには日本人と現地人が混在して住んでいる・・・ぶっちゃけると、俺は世間で言う小学校までしか知らないんだ。島にはその学校しかなかったし、学校を卒業したらSPになるための訓練が待ってたしな」

「ますます凄いわね、いろんな意味で・・・」

「因みに、この刀を見てみる」

「なにそれ！？刃が逆向きについてるじゃない」

「我が飛天御剣流の極意は『不殺』（こころをころさず）なんだ。だから、普通に振るっても人を殺す事はない。元々は一撃必殺の殺人剣だったらしいんだけど、一番最初の祖先がこの極意を打ち立ててからは、この『逆刃

刀』と共にこの極意が受け継がれてきた」

「でも、全力でやったら逆刃刀でも人は殺せる。それだけの威力を持った刀なのさ」

ふうん、と頷いて黙り込んだゆり。とそこへ

「うーす、おはよー!」

「おはよう」

「Good morning! And let's dancing!」

「ゆりっぺ? ギターの弦の在庫が無いんだけど」

「なんだ緋村、その刀は俺のパクリか?」

「藤巻君、いきなりそんなこと言っちゃ駄目だよ」

「おはようございます」

「あさはかなり」

「今日の修行は何にしようか・・・」

一気にまあ、賑やかになるもんだ。

「そういえば緋村君、あなたの配置を伝えて無かったわね。あなたには戦闘班に就いて貰うわ。役目は昨日誰かが伝えてると思うけど、オペレーション時に直接天使と戦ってもらうわ」

「えー」

「何よ、その顔は」

「生前に戦いまくってたから、ここでは平穩に行きたいなーと」

ドン！

「貴様！ゆりっ……」

カチッ ブウン！ ドゴォ！

「ぎゃああああ……」

「……あれがトラップか」

「アホだ、また自分の仕掛けたトラップに引っかかってやがる」

「俺のときもだったな。学習能力が無いのか、あいつは」

それにしても……あの巨大なハンマー、一体どういう仕組みだ？

「それでゆり、俺できたら陽動班が良いんだけど」

「ゆりっぺ？」

「何、岩沢さん」

「今のガルデモに、ちょっと男手が欲しいなって考えてたところなんだ。機材を運ぶのは、あたし達だけじゃつらいし」

「それなら、護衛班の人たちに任せれば？」

後で聞いたのだが、この護衛班とは、この学校で熱狂的な人気を誇るガルデモを、ライブ前などに警護したり、ファンの規制などを行う班の事らしい。所謂警備員だ。

「それにこの前みたいなことになった時、緋村が居るだけでも時間稼ぎとかになるし」

「そこまで言うのなら仕方ないわね、緋村君は陽動班に回すわ」

「緋村君、今回は特別よ。だから、ガルデモのメンバーの一切の警護はあなたに任せるわ。もし戦闘になったとしても、彼女たちのかすり傷一つ許さないわよ？」

「了解した」

ゆりの言葉に答えつつ、ソファアに座ってギターを弄っている岩沢に礼を言う。

「悪いな」

「良いつて、昨日のお礼」

「ギターの事か？」

「ああ・・・あのギター、あたしにとっては特別な物なんだ。だから、あたしのところに戻ってきたとき、凄く嬉しかった」

「・・・・・・」

「どうした？急に暗い顔して」

「いや・・・やっぱりお前の声は？あの人？に良く似てるな」と思っ
つてさ」

本当に良く似ている・・・・・・目を閉じれば、彼女の顔しか浮かんでこない。

「生きてた頃の恋人？」

「いや——それ以上だけど、それ以下の存在だよ」

俺にとって彼女は生きる理由だったと言っても良い。

「・・・ごめん、軽はずみな事言って」

「それこそ気にすんなって。それじゃ、これからお前が俺の新しい護衛対象だな。宜しく頼むぜ」

「他のみんなの事も頼むよ」

「あいあい、解ってるって」

こうして、ここから俺の新しい生活が始まっていく。

Episode 3

「なので、今日から緋村があたしたちの護衛を行う事になった」

「そゆこと、宜しくな」

「ねえねえ！その飛天御剣流つてのを見せてくれない？」

金髪の子が言った。たしか関根だったか？

「そうだな、緋村の実力って奴を見ておきたいし」

こいつはひさ子か。

「そ、そうですね。気になります・・・」

「何か、試し斬りにいいものを、ゆりっぺさんにもらってきましようか」

で、入江と遊佐。試し斬りね・・・この部屋でやろうものなら、下手したら楽器を壊しかねんしな・・・

「あつと、この近くに森あるか？」

「うん、あるよ。たまに戦線のみんなで野草調達に行ったりする」

「よし、そこに行こう」

と、言う訳で・・・

―外周の森―

「やってきました大自然」

「お前・・・誰に話してるんだ？」

「気にはしていない、その時点で負けだ」

なんて、岩沢と馬鹿話をしながら手頃な木を探す。

「よし・・・この木で良いか」

ざっと見、樹齢五、六十年つてとこかな。

「俺の後ろから5mぐらい下がれ、それ以上前に居たら巻き込みかねん」

「いざ・・・参る」

腰の逆刃刀を抜いて構え、静かに呼吸を整える。木との距離は7m程。

「飛天御剣流……九頭竜閃！」

ズババツ

「うわぁ……」

「……もう少し力を強めても良かったか、両断するつもりでやったんだがな」

「と言うか……今の一瞬で九回も斬ったのかよ」

軽く力をこめて放った技は、大木に九つの大きな傷を穿った。これは『九頭竜閃』。突進しながら斬撃の基本である九つの形で、瞬時に相手を九回斬り付ける技だ。破壊力はかなり高いほうに入る。

「すごいです……」

「あと、これは御剣流じゃないが……」

再び木から距離をとり、刀を水平に構える

「牙突・弐式！」

ヒュッ！　ズドン！！

メキメキメキ……

「凄まじい威力ですね」

「「「……」」」

水平に構えた剣を、勢い良く突き出す刺突の究極形『牙突』だ。

「ま、こんな所か。もちつと威力の高いのがあるが、あれは疲れるから駄目だ」

「いや、もう良いよ・・・」

「そうか。なら、今度はお前らの番だよな」

「え！？まさ、ま、まさか緋村さん！？」

「落ちて置いてみゆきち！大丈夫、みゆきちは私が守る！」

「あのなあ・・・ただ歌を聞かせてくれるだけで良いって」

ま、こんなのを見せられた上に刀を担いで笑ったら、どんな笑い方だろうが誤解されても仕方ないわな。

「それじゃ、戻って練習しよ！」

――空き教室――

くくくくくくく

「ホント、いい声だ・・・」

別に変な意味では言ってないぞ。純粹にこの声がすきなんだ。この

声を聞くと、心が落ち着く……

――緋村！――

――楽しいね、緋村！――

――もう少し……一緒に居たかったかな――

――あの……ね……わ、私……あな・た……が――

「緋村！」

「何だ！？」

ジャキッ！

「待って、待って！あたし！岩沢だよ！」

「うん？……ああ、すまない」

どうやら俺は、いつの間にか眠っていたらしいな……。顔に手を当てて先程の夢を思い出す。

「びつくりした……」

「すまん」

「まったく、もしこれで岩沢の顔に傷がついてたら、ゆりっぺに殺されてるぜ？」

ゆりつぺが殺らなくてもあたしが殺るけどね、と笑うひさ子に軽い恐怖を覚える。ふと、窓から空を見上げると、既に空は茜色に染まっていた。

「腹減ったな、何か食いにいこうぜ？」

「オーケイ、それじゃ今日の練習はこれで終わり」

「はい」

「わかった」

「みゆきち、今日は何食べる？」

「飯は何処で食うんだ？」

「一階の食堂だよ。奨学金貰ったと思うから、それですきな食券買つて食べて」

「うーす」

—食堂—

さて、何を買おうか

・・・「麻婆豆腐」 「ラーメン」 「うどん」…………

「ラーメンでも・・・」

ピ

「あつ、てめ！おい関根！」

「あははは、ジョークですよジョーク！」

「俺のラーメンが・・・」

「それよりもそれ・・・」

恐る恐ると言つた風に入江が指し示す食券には、『麻婆豆腐』と書いてある。

「この麻婆豆腐は辛すぎて、学園の誰一人手を出さないと云う激辛マーボーなんです・・・ご愁傷様です」

「・・・甘すぎるのよりはましだな」

「ポジティブと言うか、悪足掻きと言うか・・・」

「誰の所為だ誰の」

「えへへ・・・」

「良かったらあたしの使う？何枚が残ってるけど」

なんでも、ライブチケットの変わりにと、一般生徒が度々くれるらしい。

「まあいい、辛いものは好きなほうだ」

「過去何人のSSSメンバーが、そう言っただ倒れていった事が・・・」

「確率で表すなら九十%以上です」

「なん、だと！？・・・俺オワタ＼（＾o＾）／」

「まあ、そう気を落とすなよ」

そして出てきた曰く付きのマーボー……すごく……紅いで
す。

もうね、赤・紅・紅蓮^{あか}。殺意すら感じるよ。

「どうしたんですかあ？辛いのは得意なんですよねえ？」

「関根……オボエテロヨ？」

「怖い！眼がつ！眼が逝っちゃってるう！」

だが、今更関根を恨んだところで何も変わらない。俺は意を決して、
一口掬って口に含むと……

「なんだ、意外といけるううううう！？」

「おおお？！辛い！？いや、これはもう痛いと感じねえ！！し、
舌がああ！」

「なんと……」

「正に七転八倒ですね」

ぐおおお……こんな事なら意地張って、水なんかいらねえ、なん
ていわなきゃ良かった……

「だが……旨い！」

そう、この辛さ（と痛み）の後からなんともいえない旨さがこみ上げてくるのである。

パク

「辛ええ！けど旨え！」

その後、何とか俺は水無しで全てを腹に収めた。が・・・

「うわぁ・・・本当に全部食べちゃったよ」

「おによれふえき根・・・」

「大丈夫か緋村？」

「・・・無念」

バタツ・・・

「あ、おい！」

ひさ子と岩沢が駆け寄ってきて、入江が慌てて、関根が笑いをこらえているのを見ながら、俺は意識を手放した。

Episode 4

—女子寮—

「うつうつ・・・」

ああ・・・舌がヒリヒリする・・・ん？俺は寝ているのか？
・・・えらく柔らかい枕だ。

「うぬう・・・」

ペチペチ

「おい、緋村？緋村！」

「あ・・・え？」

何度か瞬きを繰り返す。うん、にせもの幻覚じゃない、ほんもの実物だ。
どうしたって？なんと俺の顔を、至近距離で岩沢が覗き込んでいる
のだよ。そこから導きだされた結論は・・・

「今俺って・・・膝枕されてたり？」

「そうだけど・・・何か問題でも？」

「（あるわけ無いじゃないか！）いや、べつに」

膝枕が幼少からの夢だったなんて、口が裂けてもいえない。俺の幼少期は・・・ね。色々あったんだよ。

「よいしょっと・・・」

「なんか飲む？と言っても、水しかないけど」

「じゃ、それを頼む」

「はい」

「サンキュー」

ごくごくごく・・・

「ふう・・・ひどい目にあった」

コンコン

「岩沢ー？あ、緋村起きたんだ」

「すまなかつたな、ここまで運んでもらったようで」

「岩沢と二人掛りでな。途中、天使に見つかからないかとひやひやしたよ」

「だったら、俺の部屋まで運んでくれればよかったのに」

「女子も男子もお互いの寮には入れないんだけど、男子寮前には管理人が掃除してて、入れそうに無かつたからこっちに運んだ」

「そうか・・・手間かけさせたな。それじゃ、俺はここらでお暇するわ」

「まあ、そんなに慌てるなって。丁度酒貰ってきたんだ」

「ひさ子、確か飲酒は二十歳からじゃなかったか？」

「そんな怖い顔すんなって、緋村。ここでは病気になるから、そんな事は気にしない」

「ま、それもそうか」

「それより、何処で手に入れたんだ？」

「ゆりつぺたちの提案で、なんか嗜好品も作れないかって事でメンバーにアンケートとったら、1位が酒、次はなんだったかな・・・」

「中年の親父かよ・・・」

「で、チャー達が試しに作ったのを貰ってきた」

「種類は何だ？」

「日本酒と泡盛」

「中々しぶいな。よし、俺は日本酒をいただく」

「あいよー」

と言う具合で、急遽酒盛りが始まった。

「緋村？お前、生きてたころ何やってたの？」

（結構酔ってきたな岩沢こいづつ）

「そうそう、少しぐらい教えろよ」

「ゆりから聞いてないのか？誰も知らないような島国の王族の側近、およびSPだよ。その国には日本人と現地人が混在していた」

いかん、俺も結構きてるみたいだな。側近とか答えちまった。

「もし良かったら、教えてくれない？」

「・・・岩沢は悪酔いするタイプのようだな」

「・・・みたいだな」

「教えろ」

「何をだよ」

「ここに来た理由わけ」

「ん？どうしよっかな？」

うう、人の事いつてられんな。俺も随分酔った。この日本酒度数いくらだよ。

「緋村、きつかったら言わなくていいぜ？岩沢も酔ってるからこんな調子なだけで、無理やり聞こうとは思ってないと思うし」

「いや・・・なんだろうな、俺も酔ったらしい」

「まずは・・・この目について話しておくか」

そう言って俺は、カラーコンタクトをはずす。

「瞳が・・・」

「赤い・・・」

「『悪魔の眼』・・・だとさ。笑えるね」

生きていた頃、俺はこの目の所為で捨てられた。両親の事は恨んでいない。何故かって？最初は俺の親も、周りの迫害に耐えて俺を育

ててくれてたからな。捨てられたのはそうだな・・・七歳の時か。
遂に村人総出で俺を殺そうとしたんだ——　　一昔前の中世みたいな話だろ？大泣きしてたよ、二人は。

それから三年経った。天性の勘とでも言うのか、俺はサバイバルセンスをフルに発揮してここまで生き延びた。たまに町へ盗みに行ったこともあったな。

そんな時だよ、『あの人』に出会ったのは。

俺は様々な場所を転々としながら、野草・小動物を狩って過ごしていた。それで気付かないうちに、王族の領地に入っていたんだ。

「遠くまで見える・・・原っぱ・・・か」

「うん？」

「あはははっ！」

「・・・誰？」

タタタタ・・・

「あれ？あなた、だあれ？」

「・・・」

「姫君！あまり遠くへ行つては・・・む！？貴様何奴？！」

今思えば近衛兵って奴だったのかもな。

「無断で王族の領地に侵入するとは許せん！おい、捕らえて城まで連行するぞ！」

「！？ 何する！やめろ！」

「う！？こいつ目が？！」

「気味の悪い・・・とにかく城へ」

「離せ！」

「ねえ、なんであの子を捕まえるの？何も悪い事してないよ？」

「姫様がそんな事を心配する必要はありません。ささ、こちらへ」
「うん・・・」

そして城に連行された俺は、隠し持っていたナイフで縄を切り、脱走したんだ。だが、所詮大人と子供。すぐに捕まって処刑されかけた。

「待つて！」

「姫様！」

「何で殺しちゃうの！？何もしてないって言ったじゃない！」

「しかし・・・」

「何事だ」

「王！それが~~~~~というだけで・・・」

「ふむ、確かに違法侵入となるな。だが、姫に危害を加えたわけでもないのにいきなり捕縛、処刑はいささか大袈裟過ぎる・・・よも

や、その瞳の色が関わっているのではあるまいな？」

「い、いえ！そのような事は・・・」

「そうか、ならよい」

「少年よ、親はどうした？」

「目の所為で・・・村の奴に苛められた。だから、俺捨てた」

「なんと・・・」

「父さんと母さん、泣いてた。けど俺頑張った。頑張って生きた」

「！？　そうかそうか・・・緋村？緋村はいないか」

「ここです」

「確か、お前には子がいなかったな」

「ええ・・・この子、私が預かりましょう」

「すまないな」

「いえ、私もこの子の眼が気に入りました・・・瞳の奥に輝く、この強い光を」

それから俺は新しい家で、新しい名前と家族を手に入れた。そして、緋村家の役割と飛天御剣流を受け継いだ。直接、姫の警護に当たり始めたのは十五のときからだな。姫は十二だった。

「姫、今日から警護に当たらせていただく、緋村光です」

「あ！あなた、五年前の！」

「覚えておられましたか」

「うん！同じ年頃の人にあったのは、あれが始めてだもん」

俺だって、一日たりとも忘れた頃は無かった。何しろ、あの出会いが無ければここに俺はいなかったのだ。だから、緋村家の役割を聞

いたとき俺は心に誓った。どんな危険からも、彼女を守りぬくと。

「それでさ、一つお願いがあるんだ」

「何でしょう」

「敬語、やめてくれない？」

「・・・お言葉ですが」

「じゃ、命令！」

「・・・時と場合によるぞ？」

俺が普通に話しかけたときの、彼女の顔といったら。

「ありがとう！」

でもな

「神様って奴は、とんだ性悪だぜ」

「どうしたの？」

「彼女の護衛を勤めて二年・・・まず彼女の父親、王が死んだ。表向きは病死だった」

「表向きは？」

「ああ・・・おれは王が死ぬ前日、王の部屋に呼び出されたんだ。そして遺言と、警告を受け取った」

『娘を頼むぞ・・・あの子は母親を早くに亡くし、そして私も・・・』

『あのこの幸せを、第一に考えてやってくれ』

『もちろんです』

『それから・・・大臣に気をつける。あいつは野心家だ。もしかするとこの病も・・・ごふつごふつ』

「・・・・・・・・」

「王が死に、さらに二年・・・俺は十九、彼女は十六になった。自分で言うのもなんだが、その頃から彼女にとって俺は、ただの護衛隊長ではなくなっていた。だが、俺にとって彼女は、この身を投げ出してでも守るべき対象で・・・おこがましいが、妹のように想っていた。だから、彼女のそれも兄に対する愛情だと思っていた」

馬鹿だよな、俺って。でも、彼女には悪かったが、恋愛感情を持つ事は無かったと思う。

「だが、このことを快く想わないやつがいた。」

「まさか・・・」

「そう、大臣だ。あいつは彼女の事を政略結婚の道具としか見ていなかった。だが、俺がいる限りそんな事はさせないし、彼女も俺に対する感情があるから、大臣の話をことごとく蹴っていた。そんな俺を遠ざける事ができれば、幾らでも『時期国王候補』を連れてくる事ができるし、姫の俺に対する気持ちを消す事もできる。一石二鳥という奴さ。まずは金、次に実力行使・・・でも、俺の御剣流は過去最強と謳われた初代のそれに匹敵していたから、ことごとく返り討ちにしてやった」

「凄いじゃん！」

「ああ・・・」

凄すぎたんだよ。俺の力は、強すぎた。

『緋村！』

『何だ大臣、まさか決着を付けようなんて言いだすんじゃないだろうな』

ギリッ

『ふん・・・そう強がっていられるのも今のうちだ。これが、何かわかるか』

『なんだ？随分毒々しい色の健康ドリンクじゃないか』

『前王を死に追いやった病原菌だ』

『なんだと！？』

『これを一滴、今晚の姫の食事に混ぜた。この病の抗体を持っているのは私だけだ・・・言っている意味が解るか？』

『・・・思い通りにならない駒などいらぬ、と？』

『その通り・・・さて、姫の前から消えてくれるかな？』
『外道め・・・』

『待つて！』

『おい！勝手に城を抜け出すんじゃない！』
『何処に行くの？』

『・・・遠いところだ』

『なんで・・・あつ 危ない！』

ドンツ バーン・・・

『な・・・』

彼女のお陰で、銃の弾は？俺には？当たらなかった・・・嫌に長い銃声だったよ。

『うう・・・』

『おい！？しつかりしろ！？』

『あは・・・あたし、死んじゃうよね・・・もう少し・・・一緒に居たかったな・・・』

『馬鹿いうな！』

『あのね・・・あたしね、あ・・・あなたの事が・・・光の事が・・・好きだったよ・・・だから、最後に・・・き・・・すして？』

「夢中だったね。そうすれば、彼女が生き延びるとでも考えていたんだろうか」

自嘲気味の笑みを浮かべる。

『あり・・・が——』

『おい・・・？おい！？』

『くそつたれええええ！！！！！！』

「そっからは簡単だ。大臣の家に外向いて、全力でもって全てを肅清した。完璧に叩き潰した。大昔、それこそ初代の時代では、俺たちの事を『陸の黒船』と呼んだらしい。周りを見渡して、改めてその言葉の意味を理解したよ」

「そして、そのときの傷が原因で俺は死んだ」
「・・・ごめん」

酔いが醒めたか。随分静かになったな。ま、俺は話してる間中飲んでたけど。だってそうだろ？こんな事、素面で話せるわけねえじゃねえか。

「ふう、こんな所だ。さて、今度こそ俺は帰る。眠いからな」

「そうか、じゃ送ってくよ」

「良いって岩沢。さっきのことなら気にするな。酒に酔って血迷っただけだ」

「いや、送ってく。だってあんたフラフラじゃん」

「・・・そうか」

確かに・・・いかんぞ、平衡感覚が・・・

クラッ

「おうふ」

「ほら！じゃ、行ってくる。先に寝てて良いよひさ子」

「わかった。緋村、幾ら酔ってるからって岩沢に変な事すんなよ？」

重い空気を吹き飛ばすようにひさ子が言う。

「へいへーい」

―男子寮―

「うぐ」

あははは、歩いた所為で酔いが回ったみたいだ。あははは。やっ
ふう

「ちょっと、緋村？もう少ししっかりしてくれ・・・」
「・・・あいあい」

むう・・・危ない危ない、なんかやばい方向に向かっていったようだ。

「あ、ここだわ」
「一人部屋か」
「ああ・・・」

いかん・・・リアルに眠い・・・

コクッ
「こら緋村！」
「おう？」

え〜とベッドベッド・・・

「面倒だな・・・」

「えっ？　ちよっ！？」

ドサ

「ひ、緋村？！」

「おやすみ〜」

スウスウ・・・

S i d e 岩沢

― 男子寮 ―

緋村には・・・悪い事したな。幾ら酔ってたからって、簡単に話せる内容じゃないのに。にしても・・・

（重い・・・さすがに）

「うぐ〜」

「ちよつと緋村？もう少ししっかりしてくれ・・・」

「・・・あいあい」

もうそろそろかな？

「あ、ここだわ」

「一人部屋か」

「ああ・・・」

珍しいな、一人部屋なんて

コクッ

「こら緋村！」

「おう？」

月明かりでかろうじて見えるベッドまでは、もう少しあるのに・・・

「面倒だな・・・」

「え？」

なんか言っ！？

「ちよっ！？」

いきなり緋村が二、三步踏み出したかと思うと、あたしを抱えたままベッドに倒れこんだのだ！っておい！！

「ひ、緋村?!」
「おやすみ」

恥ずかしい。いくらあたしが音楽一筋で女の子っぽくないとはいえ、この状況はまずい。目の前に緋村の顔がある・・・かなり恥ずかしい。

「緋村!」

うつ、中々腕が解けない・・・でも

「緋村なら・・・いいか」

なんでだろう、恥ずかしいけど嫌じゃない。そんな風に感じた。そつと寝顔に触れて、優しくなでてみる。

「うつうつ・・・」

「緋村・・・?」

随分・・・苦しそう。生きていた頃の悪夢でも見ているのかな。

「そうだ」

あたしもたまに、生きていた頃の夢を見る。そうやって苦しんでいるとき、ひさ子にこうしてもらった事を思い出した。

「ごそごそ

」よいしょっ・・・と」

ぎゅっ

こうやって手を握ってもらって、不思議と落ち着いたのを覚えてい
る。見てみると、先程より幾分かましになったようだ。

しばらくして、そのままあたしも眠ってしまった。

設定（前書き）

岩沢のキャラ崩壊がやばい気がする・・・

設定

主人公の紹介

緋村光―ひむら こう―

主人公、前世では『飛天御剣流』最後にして最強の使い手として、その筋の世界では有名だった。約束を果たせぬまま、未練を抱え死後の世界を訪れる。瞳の色は灰色↓赤。髪は黒。

飛天御剣流は『るろうに剣心 - 明治剣客浪漫譚 -』に登場する、架空の剣術の流派。飛天御剣流は「剣の速さ」「身のこなしの速さ」「相手の動きの先を読む速さ」という3つの速さを最大限に生かして、最小の動きで複数の相手を一瞬で仕留めることを極意とする、一対多数の戦いを得意とする実戦本位の殺人剣の事――以上、Wikipediaから抜粋

技紹介

九頭龍閃・・・神速を最大に発動させて、剣術の基本である9つの斬撃を同時に繰り出す乱撃術にして突進術の技。逆刃刀であっても、その殺傷力は高いため、光は滅多に使わない。
その内容は

- ・壹：唐竹、もしくは切落
- ・貳：袈裟斬り
- ・参：右薙、もしくは胴

- ・肆し：右斬上みぎきりあげ
- ・伍ご：逆風さかかせ
- ・陸ろく：左斬上ひだりきりあげ
- ・漆しち：左薙ひだりなき、もしくは逆胴さかへんどう
- ・捌はち：逆袈裟さかげさ
- ・玖く：刺突つき

と、なっている。

龍巢閃りゅうそうせん・咬がらみ・・・全身にある急所のうち、一部分だけを連続集中攻撃する。

牙突・・・刺突の究極型、刃を地面に水平な状態で相手突き、避けられても横薙ぎに派生出来る平刺突ひらつうきを、絶対の必殺技にまで昇華させたもの。零々参式まで存在するが、光が使用するのは式式と零式のみ。使用するときには鞘をつけたまま行うが、全力のときは鞘から抜いて使う。

平刺突自体は実際に存在します。考案者は土方歳三。片手平刺突からの横薙ぎの戦術は新撰組隊士に伝えられています。

牙突がとつ・壹式いつしき・・・いわゆる通常の牙突。平刺突なのは変わらないので突きを避けられても横薙ぎへの派生が可能。また剣が無くても素手で応用できる。突進力に関しては九頭龍閃に匹敵するという。

牙突がとつ・式式ししき・・・上方から突き降ろす上段型の牙突。式式こそが真の牙突で、壹式に比べて刀を斜め上から突き下ろすように構える。

強力だが、壱式よりも長い間合いを必要とする。また、間合いの長さから避けられることが多いが、光の命中精度は80%を超える。

牙突・参式がとつ さんしき・・・対空迎撃用の牙突。上空にいる相手に向かって、下から突き上げる。

牙突・零式がとつ ぜろしき・・・間合いの無い密着状態から上半身のバネのみで繰り出す強力な牙突。手加減抜きでまともに決まれば相手の上半身がちぎれて吹き飛ぶほどの凄まじい威力を誇る。いわゆる奥の手。

これら以外にも、ただ単に居合い斬りや普通の斬撃も扱う。また、独自に考案した歩法『陰陽歩法』も扱う。

Episode 5 (前書き)

どうも、このところの湿気で庭先に、正体不明のキノコが生えた作者です。GE書けよ！って方、すいません・・・ちよつと行き詰っております。明日には上げられると思いますので、はい・・・

Episode 5

翌日

Side主人公

「ふああああ．．．あつつ．．．」

ぬう．．．朝か．．．昨日はよく飲んだ．．．

「頭．．．痛え．．．二日酔いだな、こりゃ」

水でも飲むか．．．いや、まずは顔を洗おう。そう思った俺は、隣で寝ている岩沢の手を解いて洗面所に向かう。

ん？

ちよつと待て

今俺何て言った？

頭が痛え．．．違う戻りすぎだ。

洗面所に向かう．．．いや、いきすぎたぞ。

隣で寝ている岩沢の手を．．．

．．．．．

これだ！

「え！？あ！？な、なんと！？」

え！？何！？何で俺のベッドに岩沢が！？新手的ドッキリですか！？
落ち着け！落ち着くんだ俺！！そうだ！冷静になれ、クールに・・・
つてなれるか！！

「あれか！？酒！酒の所為か！？やっちゃまったのか俺は！？」

いかん、いかんぞ・・・記憶があやふやではつきりと思い出せない。
・・・頭も痛いし・・・

「・・・唯一つ、確定している事実がある」

そう、俺は大変な事に気付いてしまった。もし、この状況をSSS
メンバーに見つかったら・・・

「粛清されちまう・・・」

しかもかなりおぞましい方法で・・・くそ！何とかこの状況を打開
しなくては・・・

「うぬう・・・！　そ、そうだ！三つ隣の部屋にあの音無とかって
奴が・・・」

コンコン

「・・・」

ま、まさか・・・

「や、やあ。早いな、ひさ子・・・」

「（小声）緋村？岩沢知らね？」

「・・・どうしたんだ？」

「結局あの後帰ってこなかったんだ。まさか・・・お前、なんかしてないだろうな？」

「何を言い出すんだいきなり。俺がそんなことする奴に見えるのか？」

「冗談だって、それより岩沢は？」

眼が怖いですぞひさ子殿、確実に俺を疑っていたでしょう・・・
あながち間違っではないけれど。

「・・・」

どうする、俺・・・

「緋村？」

「ううよく寝た」

「!？」

「（ビクッ）」

南無三つ！岩沢が起きちまった！頼む・・・もう少し静かにして
てくれ・・・

「緋村・・・ちよおつとそこを退いてもらおうか？」

「いや・・・今部屋が汚れてるから・・・」

「あれ？緋村ー？どこだー？」

「・・・アハハハ、キョウモイイテンキダナ」

「緋村てめえ!!」

「それでも俺はやつてない!!」

「黙れこのド変態!!」

神よおおお!!我に救いをおお!!

S i d e 岩沢

z z z

ござござ

・ ・ ・ ? あ、そつか ・ ・ ・ 緋村起きたんだ ・ ・ ・ でも、まだ、ねむ ・ ・ ・

—— ! ? ——— ! ? ——— ! ?

んゝうるさいなあ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・ ・

z z z z

そろそろ ・ ・ ・ 起きるか ・ ・ ・

「うゝよく寝た」

あれ？きよろきよろと辺りを見渡してみるのが、緋村の影が見えない。
どこにいったんだろう？

「あれ？緋村ー？どこだー？」

！
！
！

・・・なんだろう、ひさ子の怒鳴り声と緋村の断末魔が聞こえる。

ま、いつか。

「さて、今日も練習練習」

――校長室前――

朝七時半、少しずつ生徒達が登校を始めだした。SSSメンバーも例外ではない。大抵、八時までには主要メンバーの全員が揃う。彼、音無結弦もまた、SSSあさのミーティングに出席するために校長室前まで来ていたのだが

「おーす、音無」

「日向？それにみんな、どうして中に入らないんだ？」

「ただいま、ゆりっぺさんの命による特別審議会が開かれているのです」

「何でも、緋村君が何かやらかしちゃったみたいだよ」

「でも、何で俺たちが中に入れないんだ？」

「そこ見てみ」

そついわれて、音無が校長室の扉を見てみると

『男子禁制』

「あいつ・・・なにやっただよ」

「Uhゝ I'm dancingゝ」

「野田がいないようだが・・・」

その問いに藤巻が答える。

「ああ、あいつなら、さつき無理やり入ろうとして新手のトラップに吹っ飛ばされていったぜ」

「Fly away!」

「飛んだのか!?!」

「その床が思いつきり跳ね上がってな。綺麗に飛んでいったぜ」
「・・・アホだ」

さて、表の男性陣はさておき、中の様子はと言つと・・・

―校長室―

ゆりの前に、椅子に縛り付けられた緋村が置いてあった。

「まずは・・・被告人の弁解を聞こうかしら？」

「ゆりっぺさん、満面の笑みで銃を構えないで下さい。悪役のようですよ」

「弁解なんて聞く必要ないって」

「そうですね、私たちの岩沢さんに手を出したんですからね」

「おおお、珍しくみゆきちが黒い・・・」

「だから、俺は何もしてないってば・・・」

「今更言い逃れしようなんて、往生際が悪いわよ緋村君」

「あさはかなり・・・」

「岩沢！お前からもなんか言ってやってくれ！このままじゃマジで殺されるっ！」

「~~~~」

「岩沢ああ！」

「さあ・・・どこがいいの？好きなところから撃ってあげるわ」

「Oh my God!!」

と、緋村がTK張りのシャウトをかましたところで、やっと救いの手が入った。

「みんな、緋村とは一緒に寝ただけで、何もしてないから。そろそろ放してやったら？」

いや、ある意味死刑宣告だったかもしれない。

「頼む！俺に！俺にもう一度挽回のチャンスをつ！」

岩沢の一言で撃鉄を引いたゆりに、緋村が必死で命乞いをする。

「そうね・・・いいわ、チャンスをあげる」

「ゆりっぺ！！いいのかよ！」

その後、笑顔全開でこう言った。

「一人で天使と戦ってきなさい」

「・・・」

「「ああ・・・その手があったか」」

「勝たなければ・・・」

「もちろん、天使にすたすたにされた後で、もう一度あたし達がすたすたにしてあげるわ」

「おうふ」

「あさはかなり」

「がんばってね、緋村」

Episode 5 (後書き)

感想、ご意見、質問など待ってます。

Episode 6 (前書き)

なんか最近こっちばっか更新してる・・・やばい・・・

Episode 6

―食堂―

Side 日向

~~~~~♪~~~~~

現在、オペレーション・トルネード中。だけど、俺たち戦闘班は珍しく、ガルデモのライブに参加している。何故かって？ 緋村が何かしらやつちまって、ゆりつぺを怒らせちまったからさ。結果、あいつ一人で天使と戦う事になって、俺たちは楽が出来てるけどな。

「しっかし緋村も大変だなー。何をやらかしたかは知らんが、たった一人で天使とやりあう羽目になるとは」

「そのことなだけでよ、お前ら何も聞いてないのか？」

「ああ、藤巻か。なんか、音無が心当たりがあるっぽいこと言うてたぜ」

「な、音無」

「うん？ ああ・・・いや、でも・・・」

「こいつ、さつきからこんな調子でさっぱり教えてくれねえんだよ」

「音無さん、そんなに言いにくいことなのですか？」

「ああ・・・まあな」

「ふうむ・・・」

様子からして、何か見ちまったみたいけどな。

「あ・・・もしかして、緋村がガルデモといちゃついていたのでも見たのか？」

「ぶっ！？」

「お、音無？！」

音無が飲んでたk e yコーヒー噴出しやがった！まさか凶星か！？

「見たのか！？お前！」

嘘から出た真つて奴か？！

「いや・・・正確に言えば、随分酔っ払った風の緋村あいつを、岩沢が連れてきたところを見たんだ」

簡単に説明すると、眠れなかった音無がボーっとしていたら、廊下のほうで話し声がしたらしい。そこで、扉を開けて覗いたら緋村と岩沢が居た、と・・・

「あやしいな・・・というより、それが原因だろ」

「まさか・・・まさか、あの緋村君が？！」

「人は見かけに依らないと言いますしね」

「くっ・・・これはかなりやばい事態だぜ」

あいつめ……抜け駆けとは断固許すまじ！

「俺たちからも、なんか制裁かけようぜ？」

「まて、まだそうと決まったわけではないだろう」

「そうですね、情報不足の中でうかつに動くのはどうかと」

「なんだよ」松下五段も高松も、ノリ悪いぜ？」

ま、酒が入ってたみたいだから、不慮の事故って奴かもしれないねえけどな。

―食堂前―

Side主人公

「はあ……」

何で俺がこんな目に……いや、あそこまで酔っ払った俺も悪いけどよ。

ツツ―

『緋村さん 天使、現れました』  
「早速か・・・了解」

チャキ・・・ブーン！

一振りして地面に一直線の割れ目を作る。

『相変わらず凄い力ですね それでは、健闘をお祈りいたします』  
ツ

「はあ・・・」

「お？来たか・・・」

長い銀髪を揺らしながら、真っ直ぐこちらに向かって歩いてくる天使。俺は地面の割れ目から2mほど距離をとって待つ。しばらくして、天使が線の5m程前まで来た。やはり警戒しているのだろう。一旦そこでとまって、辺りを見渡す。

「この傷をつけたのはあなた？」

「ああ」

「じゃあ、後で反省文と補修作業をしてもらおうわ」

「あ・・・はい」

「それじゃ」

「ちよつと待て」

「何かしら？」

「・・・あいつらを止めに行くのか？」

「そうよ、時間外のクラブ活動は禁止されてるわ」

「そうですかい・・・でも、ここで食い止めないと、後でゆり達に・・・

「悪いけど、行かせられねえな。その線を越えたら、斬ってでもお前を止める」

「・・・そう」

「ガードスキル ハンドソニック」

「・・・はあ、それが『ガードスキル』か」

ゆりに一応聞いてはいたが、今回初めて見るな。

「敵意はまだ感じない。このまま通らせてくれるなら、私は何もしない」

「待て・・・他にもそんな力が有るのか？」  
コクッ

銃弾弾いたりしてくるってのは本当だったのか。それじゃ、まずは作戦一。

「それじゃ・・・こうしないか？俺は前世で散々戦ったんだ。だからなるべく戦いたくない。そこでだ、俺と鬼ごっこしよう」

「鬼ごっこ？」

「ルールは簡単、ただ俺を捕まえるだけで良い。ガードスキルだろうと何だろうと何でもありだ」

「私があなを捕まえたら？」

「その時はここを通って良い」

「・・・御免なさい、無理やり通るわ」

「やっぱり？」

「ええ、彼女たちを止めるのが生徒会長である私の役目」

「そうかい・・・それじゃ、全力でその邪魔をさせてもらっぜ、天使」

「私は天使じゃないわ」

「え？名前があるのか？」

「奏、立華奏」

「それじゃ立華、悪いがここは通せない。だから・・・」

俺は腰の刀に手を沿え、軽く殺気をこめる。

「その線を越えたら・・・斬る」

「・・・」

コツコツコツ・・・

おいおい・・・少しは怖がる素振りを見せたらどうだ？

コツ・・・

「超えたな？」

ヒュッ・・・

「!？」

(速い・・・)

「斬！」

ガキーン！ ビシビシ・・・

「なっ!？」

だっ、と飛んで距離を取るが・・・嘘だろ？そんな華奢な体の何処に、俺の刀を受けるだけの力が有るんだよ。その剣の耐久力以前に、お前の力に驚くぜ。剣のほうも、俺の一撃に・・・

ピシッ ポロ・・・

「・・・剣はなんとか封じたな」

「・・・」

「ハンドソニック・Ver2」

「・・・なんてこつたい」

第二弾だと・・・

「ガードスキル・デイレイ」

「新しい能力も追加ちからかよ」

「なら・・・」

一旦鞘に刀を収め、地面に対して水平に構える。言わずもがな、牙

突の構えだ。

「・・・牙突・弑式！」

ドッ ヒュウウ・・・

「・・・」

ブウン

「おおっ!？」

避けた!？俺の牙突を!？かといって相手を見れば、剣を振り上げ俺に止めをさす準備は万端だ。だが

「まだだ!」

(牙突、繋ぎの形・・・)

「横薙ぎ・鎌鼬!」  
かまいたち

ドゴッ!

「くっ・・・」

ドサ・・・

危ねえ危ねえ・・・一瞬地獄が見えたぜ。天使・・・じゃねえ、立華は気絶したようだな。

「遊佐?聞こえつか？」

ツッー

『はい、こちら遊佐です 無事天使を倒したんですね』

「まあな、ちよつとやばかったけど・・・」

『それで、どのようなご用件ですか？』

「まずはゆりたちに任務成功の報告を。俺はたちば・・・天使を保健室まで連れて行ってくる。このまま放置つてのも気が引けるしな」

『了解しました では』

ツー

さて、と。天使改め立華を、保健室に置いてくるか。・・・誰か、見てるな。ゆり達か？まあいいや。

S i d e ?

「あの天使すら上回る戦闘力・・・彼を手に入れば、今後の展開は格段に有利になる」

さて・・・どうやって手駒に引き込もうか？

ああ、いい考えを見つけた。あいつはあのバンド、特に岩沢まさみと仲が良いという情報が届いた。そこを利用してやれば良い。

「なに、もしもの時にはこれを使えば問題ない」

もう少しだ。この僕が、神になるまでの障害は一つしか残っていない。生徒会長・立華奏の失脚。まあこれは、あの愚民どもが勝手にやってくれるだろう。もう少しの間待てば良い。

「次に会うときを楽しみにしているぞ、緋村光……」

## Episode 7 (前書き)

交互更新に切り替えようかな・・・片方書いたらもう片方書かない  
と、なんか上手くまとまらない

## Episode 7

―空き教室―

Side主人公

「球技大会？」

「そ、各自チームを組んで出場しろって」

「出るからには一位とってこいって、ゆりっぺさんが言っていましたよ」

先程の発言は、本人の希望でガルデモに新規参入した、ユイと言う女子の発言だ。

「つつても、スポーツの経験なんてほぼ0だぞ？」

「緋村さんだったら、どの種目でもやれるんじゃないですか？」

「そうですね。今までのデータから予想して、極端な話、緋村さん一人でも勝てると思われます」

「規格外だからね、あんたは」

「そうそう、天使すら一人で倒しちゃうんだから」

「こらこら、人を人外みたいに言うんじゃない」

『陸の黒船』なんて言われてた時点で、かなり化け物扱いされてるみたいだけどな。

「中途半端な結果残したら、死よりも恐ろしい罰ゲームだって」

「ふむ・・・」

ゆりの罰ゲームか・・・ある意味、一番怖いな。

「で、何に出るんだ？」

「大体は野球に出るみたい」

「ふうん・・・」

野球って・・・あれだろ？棒で球ぶっ飛ばす奴・・・ええそうですよ、生きてた頃にやってたのはサッカーぐらいなもので、野球なんてやったこと無いんですよ。

「お前ら、チームは決まってるのか？」

「あたしは高松のチーム」

「私たちはまだです」

「私はゆりっぺさんに戦況の報告をしなければなりませんので、今回は参加しません」

「あたしもまだ、かな」

「私は野球チームのどこかに入れてもらう予定ですから」

「ふむ・・・」

「何か、別の種目は無いのか？」

「ドッチボールとか？」

「おお、楽そうなのがあるではないか」

「チームはどうするの？」

「まずはお前らだろ、あとは・・・大山とか？あいつなら残ってる

「気がするが」

「ドツチなら、最低限6人は必要です」

「どうせゲリラ参加だろ？ハンデ代わりで5人でやってやるよ」

「了解しました」

「でも、あたし達なんか入れたって、戦力になるかどうか・・・」

「散々人を秘密兵器みたいに言ってたのは何処の誰だよ」

「それもそうか」

「という訳で・・・」

― A棟 渡り廊下 ―

「大山、俺らのチームでドツチに参加しないか？」

「うーん・・・」

「大丈夫だって、全部俺が倒せば良いだけの話だから、な？」

「・・・うん、わかったよ！できるだけ迷惑かけない様に頑張る！」

「うっし。それじゃ早速、行くとするか」

「オーケー、もうすぐ試合は始まるはずだから、適当なところで乱入しよ」

― 体育館 ―

「ほづら・・・よ、っと！」

「うわっ！」

「きゃっ！」

「よし！ダブルアウト！」

「凄いよね、緋村君」

「実質あいつだけで勝ってるからな」

「これで私たちも罰ゲームは無しですね」

「早く終わらせて、練習したいんだけどな」

そんなこんなで早くも決勝・・・なのだが。

「・・・・・・・・」

「・・・あいつらの部活は？」

「全員ドッチ部・・・だね」

「そんなマイナーな部活まであるのかよ」

「球技大会の種目は、部活の中から大半が選ばれてるからね・・・  
これじゃ幾ら緋村君でも、きついよね・・・」

天使率いる生徒会チームが乱入してきたのだ。えげつない。全員ド  
ッチ部とか・・・

「あなた達のチームは出場登録していなかったはずよ」

「・・・それもそうな訳だが」

「生徒副会長の直井です。生徒会として、無断出場のあなた達を放つて置く事は出来ません。他の種目同様、正当な手段で排除させてもらいます」

「そうですかい」

「それじゃ直井君、私は野球のほうを見てくるわ」

「わかりました。こちらはお任せ下さい」

「余裕綽々だな」

「どうする？」

「ま、やるだけやって見るっきゃないでしょ」

「うう・・・勝てる気がしないよ・・・」

「大山、男つてのは負けるとわかってても戦わなきゃいけないときがあるんだ・・・ここで逃げたら、ゆりの罰ゲームが待ってるんだぞ？」

「・・・」(ゴクッ)

「私たちも精一杯やってみます！」

「しおりんが頑張るなら、私も・・・」

「当たって砕けろ、だ」

結果、惨敗！

ジャンプボールを先にとったのだが、三人ぐらい当てたところで一気に形勢逆転された。パス、パス、パス・・・俺は何とかついていけたが、他の奴らは速攻アウト。最後まで粘った俺も、フェイントやら何やら使われてアウト・・・一方的過ぎるわ！

「はあ・・・最後の最後で負けちゃったな」

「まあ、わかってた結果だけだね」

「遊佐？聞こえたか？」

以前から貸し与えられている無線で遊佐に連絡を取ってみる。

ツツー

『遊佐です 負けてしまったみたいですね』

「ああ、さすがに生徒会チームは強すぎたぜ」

『それで、用件はなんでしょう』

「野球のほうはどうだった？」

『全滅です、こちらも日向チームを除き、生徒会チームが圧勝しました』

「了解、ありがとうございます」

「そっか、野球も駄目だったんだ」

「さ、かえって練習しようぜ」

「いつでもそれだな、お前は」

と、帰ろうとしたところで、効きなれぬ声に呼び止められた。

「緋村光さん」

「あ？確かお前は・・・直井？」

「初対面で呼び捨てとは・・・まあいいでしょう。今回の騒動について、リーダーであるあなたには反省文が課せられました。今から

案内しますので、ついて来て下さい」

「・・・解った」

「緋村君、逃げようよ」

「そうだよ、今までだって散々やってきたし、どうせ相手はNPCだよ？」

「いや・・・たまにはいいかなー、なんちゃって」

「緋村・・・？」

「わりい、先帰っといてくれや」

「こちらです」

―反省室―

Side Unknown

ここは反省室。校則に違反した生徒などが、ここで反省文を書いたりする場所だ。その机に向かい合って二人が座っている。

「わざわざご足労してもらってすいません」

「いい加減、その下手<sup>したて</sup>に出る態度は止めたらどうだ。お前も人間なんだろ？」

「見抜かれてましたか」

「よろしい。で、僕が君をここに呼んだ理由についてだが・・・僕は君のその力が欲しい。いずれ神になる、この僕の下につけ」

「・・・神だと？お前が？」

「そうだ。愚かな奴らだ、ここが神を選ぶ場所だと、誰も気付いてはいない。生前の記憶に苦しむ僕らこそが、神になる資格があると

いうのに」

「神になって、何をする気だ？」

「神が決まれば、ほかの迷える魂はもういない。この僕が、安らぎを与え、彼らを成仏させよう」

「ふざけた奴だ。従え？笑わせるな。仲間になれ、ぐらいなら少しは考えてやったかも・・・いや、どの道お前みたいな思い上がった馬鹿の仲間になるつもりは無い。他をあたるんだな」

そう言つて、緋村は席を立ち出口へと向かう。

「仕方ない、無理やり従ってもらうとしよう」

「なに？」

サアアア・・・

「従え、この偉大なる僕に。神である僕に」

「・・・ふん、それで終わりか？」

「催眠術が効かない・・・？」

「前世でその手の耐性をつけてきたからな、じゃあな」

「さて、こうなればこちら奥の手を使おう。岩沢まさみ達がいづも練習に使っている開き教室がわかるな。そこに・・・爆弾が仕掛けてあるとしたら？」

「なにっ?!」

にやり・・・

（ハツタリか！？いや、この馬鹿ならやりかねん。しかし・・・）

「動揺したな？」

「しまっ・・・」

「眠れ、眠るんだ。終わりになき悪夢の中を彷徨うが良い」

「う．．．っ!？」

「眠れ、さあ！」

「くそ．．．たれ．．．」

バタ．．．

「ふん、梃子搦らせてくれる。おい」

直井が呼ぶと、うつろな表情のNPC達がゾロゾロと入ってきた。

「こいつをあの部屋に運んでおけ」

「後は時を待つのみ．．．さあ、上手くやってくれ」SSS『」

## Episode 7 (後書き)

直井の悪役っぽさがやばい気がする。やりすぎかな・・・

7/11 追記 今更ながら？？月？？日に第？？話投稿という意味解らん奇跡が起きている事に気付きました。・・・実質第八部なんですがね；

## Episode 8 (前書き)

ちょっとさささささになってますが・・・そこは「愛嬌」といってさ  
( ^ ^ ... )

## Episode 8

二日後――

――空き教室――

Side 岩沢

あれから、緋村の姿を見たメンバーは一人も居なかった。なぜか、忽然と消えてしまったんだ。

「緋村・・・何処に行ったんだろ？」

「本当だよね、何処ほつき歩いてんだか」

「さすがに気になります・・・」

「もしかして、天使に捕まっていたりして？」

「そんな訳あるか」

「今までそんな罰を与えられたメンバーは一人も居ません」

何処に行ったんだよ・・・あいつは。練習の最中に、戻ってくるんじゃないかって度々そっちに目を向けるけど、扉が開く事は遂になかった。

――お前は、お前らは俺が必ず守る。何があっても、どんな物からもな――

練習が終わり、片付けも終わって寮に帰る段階になって、そんな緋村の言葉を思い出した。あれは確か、陽動班にあいつの配属が決ま

って最初の日。実際にあいつの強さを見た帰り道に、あいつが誰に言う事も無く、そう呟いたんだ。いやに真剣な顔をしていたから、よく覚えている。

「緋村・・・」

「そんな気にすんなって岩沢、どうせそのうち帰って来るさ」

「そうですよ岩沢さん、緋村先輩ならきつと大丈夫です!」

「ああ・・・そうだな」

翌日、天使失脚を狙った作戦会議にもあいつは現れなかった。

― 暗い部屋 ―

日の光が届かない、暗い部屋の中心。そこに、鎖で椅子に縛り付けられた緋村が居た。眠っているようだが、その顔色と言い、時折漏れる呻き声と言い、お世辞にも夢見が良いとはいえなさそうだ。実際彼が見ている夢は、長く見続けることが出来る内容では無かった。

― 夢の中 ―

Side 主人公

どこだ・・・ここは・・・

ああ・・・この問いを何度繰り返しただろう・・・いや・・・

よく解らない・・・同じ問いを繰り返しているのか、初めて発した問いなのか

解らない

俺は誰だ？ここは何処だ？

「緋村よ」

「お・・・王！？」

馬鹿な・・・貴方は死んだはずだ！

「何故、私との約束を守ってくれなかった？何故、あの娘まで死ななければならなかった？」

「それは・・・」

「お前の所為だ。お前の」

俺の・・・所為・・・

「お前がもっと強ければ、お前がもっと・・・」

やめて・・・くれ・・・

「光」

「父さん・・・なんで・・・」

「何故殺した？我が飛天御剣流は不殺の剣、人殺しの剣を教えた覚えはない」

「それ、は・・・」

「誇りを穢したな」

「父さん！」

「お前はもはや、私の息子ではない。消えろ」

そんな、俺は・・・

「緋村！！」

「大臣・・・」

「何故貴様は姫のそばに居た！？お前さえ居なければ、もっと穩便に進んでいたはずなのに！！」

「だが殺したのはお前の・・・」

「そんな事になったのは、お前がそばに居たからだ！お前さえ居なければ、お前を遠ざける手間さえなければ、姫が城を抜け出し、銃弾に貫かれる事は無かった！！」

「殺したのはお前だ！緋村！」

「うつ・・・うつあ・・・」

「うわあああああ・・・！！！！」

やめろ・・・やめろやめろやめろやめろ・・・もう、やめてくれ・

・・・

どれだけ俺は後悔すれば良い！？どれだけ俺は恨まれれば良い！？  
どれだけ俺は・・・俺はこの闇の中で、責め続けられれば良いんだ・  
・・・

「助けてやろう」

「誰、だ・・・？」

「その苦しみから救い出してやる」

「本当、か？」

「僕に従えば、すべての苦しみを忘れさせてやる。さあ、この手をとれ」

「ああ・・・」

これで・・・俺は・・・

そうして、相手の手をとったときだった。

「・・・光」

「お前は・・・」

お前は・・・お前・・・

「お前、誰だ？」

「駄目だよ、光・・・ねえ、笑って？」  
「笑う？」

笑うって・・・笑う・・・？

「どうやって・・・笑えば、いいんだ・・・？」

そして再び、俺の意識は闇へと堕ちた。

## Side 岩沢

緋村が消えて、一週間と二日が経った。その間に、ゆりつぺたちの作戦が成功(?)して天使は生徒会長を辞めさせられてしまった。二日前に、様子見て一回トルネードをやったんだけど、天使は手を出さず、緋村も現れなかった。

変わった事と言えば、高松が何かと脱ぎたがるようになった事と、たまに椅子で空を飛んでいくメンバーが居る事と・・・NPCであり現生徒会長代理の直井文人が、活発に活動し始めた事。今までNPCが、あたしたちに校則違反の罰を押し付けてくる事なんてなかったんだけどね。ゆりつぺからはこれまた様子見という事で、今日一日自由に過ごして相手がどう出てくるかを確認する事になった。

あたし？あたしは屋上で新曲の作成。ここで歌つてると、よくあいつが聞きに来たから、またきてくれるんじゃないかと思ってね。自分でも良くわからないけど、あいつの事が凄く気になる。本当に、何処に行っちまったんだろ・・・

くくくくくくくくくくく

「来ない、か・・・」

S i d e 主人公

「ん・・・」

今・・・何か聞こえたような・・・

「どうした緋村、何か見つけたのか？」  
「いや、なんでもない。それより直井、これからどう動くんだ？」  
「そうだな・・・ん？この声、岩沢まさみか。授業を抜け出しているようだな。ではまず彼女から・・・」

ジャキッ

あれ！？勝手に体が・・・

「すまない、直井」

「・・・いや、問題ない」

（岩沢まさみはこいつのトリガーのようだな。扱いには気をつけねば・・・）

お？向こうから生徒会メンバーが一人、走ってこっちに来た。

「直井さん」

「どうした？・・・ふむ、A棟の○教室か。わかった、行こう」

「SSSか？」

「そのようだ・・・お前は生徒会室に残れ。元メンバーだったお前が行っては、要らん騒ぎがおきかねん」

「ああ、わかった」

タッタッタッタ・・・

・・・~~~~~♪

あの声・・・まだ聞こえるな。

「屋上からか・・・」

どうせ暇なら、行っても構わないだろう。

―生徒会室に残れ―

「ぐっ……そうだ、俺は生徒会室に戻らないと」

だが……

―A棟、○教室―

今、戦線メンバーは独自に直井攪乱のために動いている。例を挙げるとすれば

「通れば、追いリー！」

「残念！リーチ、チー取り、ドラドラ親満！」

「Outch！ Oh……you mysterious……」

「ひさ子の一人勝ちかよ……」

「ぬう……女相手に、何たる体たらく！」

「その一画、もう少し静かに……」

「ああ、すいません」

麻雀組、大抵ひさ子の独壇場となってしまう。本人に自覚はないようだが、かなりの強運の持ち主である。

「Z Z Z Z . . .」

野田、居眠り。あまりに堂々過ぎて、すでに居眠りの域を超えてしまっているが。

「ふん！ふん！ふん！ふん！. . .」

高松、筋トレ。これは眼鏡マッチョですか？いいえ、ただの変なげふんげふん。

（お菓子. . . お菓子食べちゃった！）

大山、お菓子の隠れ食い。彼にしてみれば、これはかなり大胆な行為なのだ. . .！

「先生！トイレ！」

「またお前か. . .」

「あいつは何やってるんだ？」

「一分おきにトイレに行く生徒だとさ。アホだな」

「俺たちはどうする？」

「このまま駄弁ってればいいんじゃないの？」

自由組、約一名アホ

「にしても異様だな」

「ん、ああ」

「……………」

椎名、集中力を高める。若干アホ。そして戻ってきたユイが、再びトイレ宣言をして教室を出ようとしたとき

「そこまでだ、貴様ら」

「うわああ!？」

「来たぜ、直井文人様」

「やっべ!ずらかるぞ!」

「その窓!」

「わかった!」

「I'll be back!」

気付けば高松も椎名も居ない。一人堂々と眠っているのは野田ぐらいなものだ。

「ふん……」

「貴様、どう言っつもりだ?……聞こえていないのか?いいだろ

う、このまま反省室へ運べ」

「何を反省しろというのだ!!」

ジャキ!

「ひいい!」

「あ?」

「アホだな、あいつ」

「ああ。だけどこのままほっといたらやばくね?」

「授業中に堂々と眠り、あまつさえ罪無き一般生徒を恫喝しておいて、良くそんな台詞が吐けますね」

「なんだとお!!?」

「いかん!音無、足持て!おれが体持つ!」

「おう」

ガシ!ガシ! ダダダダッ!

「ぬわあ!待て!逃げるのか!?離せ!こら貴様、かかってこい!」

――屋上――

・・・・」

「・・・緋村」

「岩沢！」

「！ ひさ子か」

「あいつじゃなくて悪かったな。それよりも、遂に直井が動き出したぜ。一旦逃げよう」

「ああ、わかった」

タツタツタツタツ・・・

「はぁ・・・うぐつ。頭、痛えな。ああ・・・やっぱ、誰もいねえか・・・」

ひさ子達が去って数分後、緋村がそこに顔を出した。そこには誰もおらず、ただ風が吹き抜けるだけだった。

「・・・？ギターのピックか」

無意識に彼がそれを拾ったところで、ポケットの無線が鳴った。

『緋村、何処にいる？』

「ちよつと屋上に」

『戻って来い。お前に用がある』

「わかった、うぐう・・・」

フラフラとした足取りで、屋上から去っていく。それを双眼鏡で見ている人物がいた。

「ゆりっぺさん、こちら遊佐です。緋村さんを発見しました」

『本当？何処にいたの？』

「A棟の屋上です。様子が少し変でした」

『どういう風に？』

「随分つらそうでした。あと・・・」

『どうしたの？』

「直感のようなものですが、普段の緋村さんではないように思えました。何かあったのかもしれませんが。出くわしたら気をつけてください」

『わかったわ』

「では」

— B棟 特別反省フロア —

「お前にはここで見張りをしておいて貰う。相手は天使だ。この先の牢獄に捕らえてある。もし抜け出すようなら、斬って構わん」

「ああ、わかった」

「ここは任せるぞ。僕はSSSのほうに行く」

「ああ」

そして去っていく直井達。緋村は一人、薄暗い通路に立ち塞がっていた。それから一時間半ほど、突然、外部から戦闘音が聞こえてきた。

「誰かが戦っているのか」

さらに数分が経つと、奥のほうから轟音と、音無の声が聞こえてきた。

S i d e 音無

「よし、これで外に出られるぞ！」

早くゆりたちに会いに行かないと・・・それにしても直井が人間だったなんて・・・

「急ぐっ！」

俺は立華の手をとって走り出す。

「・・・待つて」

「どうした？」

「誰がいる」

「え？」

言われて前のほうを良く見ると、確かに誰かが立っているのが見えた。腰に差した長い得物、それほど長くはないすっきりした黒髪。間違いない、緋村だ。

「緋村！お前何処に行つてたんだよ！？皆心配してたんだぞ？」

「・・・」

「・・・様子がおかしい」

「緋村・・・？」

「抜け出そうとすれば、斬つてよいと直井に命じられた。戻ればよし、戻らずこのまま逃げようとするなら斬る」

何だつて？緋村・・・お前、俺たちを裏切つたのか？

「そんな・・・どうしちゃったんだよ、緋村！」

「猶予は三秒、3・2・・・1」

ダッ

「ハンドソニック Ver2」

ガキン！

「……………」

「くっ」

緋村が後ろに下がった。しかし速いな……あいつ。

「おかしい」

「え？何がだ？」

「前戦ったときは、ハンドソニックを折られた。けど、今の彼の攻撃には、それほど力が無い」

「どういう……」

「おしゃべりをする暇は無いぞ？」

スッ

な！？飛んだ！？

「ガードスキル デイレイ」

「龍墜……」

ブォン ドゴォ！

「うおおお!？」

「・・・昇閃！」

カキン!!

「マジかよ・・・」

立華が、ハンドソニックを弾かれてよろめいた。今まで天使であった立華が、力で押されているところなんて見たことが無い。

「終わりだ」

「待て、緋村！」

「緋村!!」

「・・・」

とつさに飛び込んだ俺の目の前で、緋村の切っ先は止まった。そして現れたのは・・・

「お前、緋村・・・こんなところで何してるんだよ！」

「緋村先輩・・・」

「緋村さん・・・」

「・・・緋村」

ガルデモの皆だった。

S i d e 岩沢

何でNPCが！？これも直井が仕組んだの？でもどうやって・・・

「みんな！こつち！」

「ひさ子！？何処行くの？」

「直感で進めば何とかなるって！」

パン！パンパン！

「ひさ子先輩いい！？逆に増えてません！？」

「きやああああ！？」

訳もわからず走って逃げているうちに、あまり見たことの無い場所に迷い込んでしまった。かわりに、生徒会NPCからは逃げ切れたけど。

「ここ・・・何処でしょう？」

「やばそうな場所に出ちまったな・・・」

「そういうひさ子先輩が連れてきたんじゃないですか！」

「・・・何か、聞こえない？」

「え？」

「そういえばどこから声が聞こえるような・・・」

「ま、ま、まさか幽霊！？」

「いや・・・この声・・・」

間違いない、緋村だ！あいつこんな所にいたのか・・・でも、なんのために？

「あっちからだ」

「取り敢えず行ってみよう」

そしてあたし達が見たのは、正に今、天使に止めを刺そうとしている所だった。

「緋村！！」

音無の寸前で、緋村の剣は止まった。

「お前、緋村・・・こんなところで何してるんだよ！」

「緋村先輩・・・」

「緋村さん・・・」

上手く事態が飲み込めない。何で音無と天使に、緋村が剣を向けているのか。何で緋村がこんな所にいるのか・・・なんであいつはそんなに冷たい目をしているのか。

「・・・緋村」

違う、あいつはこんな奴じゃなかった。確かに強かった。けど、暖かさ少し淋しさの混じった強さだったのに。

「どうしちまつたんだよ・・・」

「岩、沢？ぐっ・・・」

S i d e 主人公

痛い・・・頭が、痛い・・・なんだ、この感覚は。あの女たちが来てからだ。何かを忘れたような、何かを失くしてしまった様な気がしてならない。

「岩、沢？ぐっ・・・」

「おい！緋村？！」

——緋村！——

――・・・光――

「くっ・・・ううう・・・」

何なんだよ・・・これはっ!!

「そうだ！早くグラウンドに行かないと！行こう、立華！」  
「うん」

「・・・待て」

「緋村！もう止めなよ！どうかしちまったのかよ!？」

「ひ、ひさ子・・・」

「緋村さん・・・?」

「緋村先輩、どうしたんですか・・・!？」

「わからない・・・もしかしたらこれも直井の・・・」

「お前らが・・・」

「え？」

「お前らが来てからだ・・・邪魔なんだよ・・・」

ジャキ

「消えろおお!!」

牙突！

「っ!?!岩沢っ!!」

「  
・  
・  
・  
・  
」

ザ  
シ  
ユ  
ウ  
・  
・  
ポ  
タ  
・  
・  
ポ  
タ  
ポ  
タ  
・  
・  
・

## Episode 9 (前書き)

だんだんキャラ崩壊の香りが・・・特に岩沢・・・

## Episode 9

「緋村！お前・・・！！」

「待ってひさ子！あたしは怪我してないから」

「え！？岩沢さん！？」

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・」

そこには、岩沢の代わりに左手を血みどろにした緋村がいた。

「ひ、緋村先輩・・・」

「突き出す前に、左手で刃を掴んで逸らしてくれた。だから当たってないよ」

「・・・すまなかったな、お前ら・・・悪い夢でも見ていたようだ」

壁にもたれかかるようにして崩れ落ちる。

「大丈夫かよ・・・」

「・・・ああ。それより、ゆり達のところへ行つてやれ。音無は・・・グラウンドとか言ってたな。やばい事になってる気がする。俺は・・・寮で、休ませて貰おう・・・」

「その前に、少しここで休んだら？」

「・・・」

「歩けないでしょ」

「ああ・・・」

「じゃあ岩沢、緋村は任せたよ」

「うん」

―グラウンド―

一方、音無たちが向かったグラウンド。土砂降りの雨が降りしきる中、立っているのは・・・生徒会メンバーのNPCと、直井だけだった。SSSは全員が凶弾に倒れ、微かに息があるものも順次止めを刺されていた。

「なんだ・・・これ・・・」  
ドゴッ

「ぐっ・・・」

「っ！？日向っ！」

直井が蹴りつけた相手は日向だった。まだ息はあるようだ。

「大丈夫か、日向？！」

「真っ先に俺に駆け寄ってくるなんて・・・コレなのか？」

「冗談言ってる場合かよ！」

「ほう・・・あそこからどうやって出てきた？」

「扉を壊した」

「はぁ・・・誰めがけて作ったと思ってるんだ。生徒会長代理とし

て命じる、おとなしく戻れ」

「立華・・・この惨状だ、その命令が間違ってる事ぐらいはわかるよな？」

「うん。ハンドソニック」

「神に逆らう気か？」

「えっ？」

「僕が神だ」

「馬鹿かこいつ・・・」

「こんなにまでしておいて！」

そして語る直井。前世の記憶に苦しむ自分たちこそが、神になる資格があると。自分が神になって、SSSに安らぎを与える・・・つまり、成仏させてやると。そして、おもむろにゆりの髪をつかんで、無理やり立ち上がらせる直井。

「ゆり！くそっ、これ以上何を・・・」

「動かないほうが良い」

ザッ

「これは・・・」

「な、によ・・・」

「君は今から成仏するんだ・・・仲村ゆりそして音無結弦、君も知ってるだろう？日向秀樹が成仏しかけていた事を」

「それは・・・」

「生前彼は、自らのミスによりチームが負けた事をひどく悔やみ、その苦しみから逃れるため薦められるがまま薬に溺れた。そして、

心も体もぼろぼろの状態で事故にあい、死んだ・・・だが彼は、あの球技大会で未練を晴らし、消える直前まで行った」

「それが、何だっけ言うのよ・・・」

「貴様も今から成仏するんだ・・・幸せな夢とともに。こんな世界でも幸せな夢が見られるんだ」

「あなたは私の過去を知らない！」

「知らなくても出来るんだ。僕が時間をかけて準備してきたのは、天使の牢獄を作ることだけじゃない。催眠術だ」

「まさか・・・緋村も、こいつらも皆・・・」

「さあ・・・目を閉じるんだ。君は今から幸せな夢を見る・・・」  
(そんな・・・まさか・・・そんな・・・)

ゆつくりと、ゆりの目が閉じていく。歯痒いが、今の音無達では見ているしか出来ない。周りを銃を持ったNPCに囲まれてさえないな  
ければ・・・

ダッ！

「あさはかなり！」

「椎名つち！」

ヒュウン！ カキン、カン！

何処からともなく現れた椎名が、石つぶてでNPCの銃を弾き飛ばした。

「行け、新入り！」

「ああ、すまない！」

直井はまだ、ゆりに何かを囁き続けている。

「っ！止めるおお！！！」

「！？」

「そんな紛いものの記憶で、消すなあああ！！！」

「俺たちの生きてきた人生は本物だ！何一つ嘘の無い人生なんだよ！みんな懸命に生きてきたんだよ！そうやって刻まれてきた記憶なんだ！必死に生きてきた記憶なんだ！どんなに辛かるうが、それが俺たちの人生なんだよ！それを結果だけ上塗りしようだなんて・・・お前の人生も、本物だったはずだろ！！！」

「お前に・・・僕の何がわかるんだ」

そして語られ始めた直井の人生。

誰にも必要とされず、途中からは別人として生きた直井。それでも、そのときから彼の人生に意味は生まれた。別人として、死んだ兄の代わりとして生きはじめた事で、彼の人生に？意味？が生まれた。

そんな彼の人生も、彼の父が病に倒れた事で再び意味を失う。本当に、自分は生きていたのか？兄が死んだときから、兄にすり替わった時から、自分まで死んでしまっていた。本当は、まったく？意味？など無かった、偽りの人生。

そう、ほしかったのは、自分を必要としてくれる声。自分を、兄としてではない、本当の彼を見てくれる、認めてくれる声。

「それでも！お前の人生は本物だったはずだ！苦しんだのも、頑張ったのも・・・認められようともがいていたのも、全部お前だ！違うか！？」

「何を知った風な・・・」

「解るさ・・・ここにはお前も居るんだから・・・」

「なら・・・あんたなら、認めてくれんの？この僕を」

「お前以外の誰を認めるって言うんだよ・・・俺が抱いてるのはお前だ、お前以外に居ない・・・お前だよ！」

その言葉に、一度限り自分を認めてくれた、父の言葉が重なる。

― 渋柿一つで何を偉そうな。だが・・・文人もやりおる―

やっと降り止んだ雨、そして雲の隙間から差す夕日。その夕日に、一筋の涙が光った。

## Episode 9 (後書き)

方向修正せねば、なんかとんでもないところに向かっている気がする。  
・  
・  
・

## Episode 10

翌日―

―校長室―

昨日の狂乱とは打って変わって、校長室には穏やかな空気が流れている。それもその筈、天使の立華は生徒会長を辞任、その代わりであつた直井も何故かSSSに入隊・・・つまり、現状で戦うべき敵も邪魔をしてくる相手もないのだ。この点だけ見れば『天使を倒してこの世界を手に入れる』という目的はかなつた。

「ねえ〜先輩〜ひなつち先輩ってば！もう！藤巻先輩にかけてこよう」

「ぐげえ！？」

哀れ藤巻、寝ている所にユイの新技が炸裂・・・

「まったく、ここは小学校かつての。ガキばっか増えてくな・・・」

「貴様・・・それは僕に対して言っているのか？僕は神だぞ」

「まだいつてんのかよ、あの後大泣きして音無に抱きついてたくせに」

「なんだと？」

「うわっ！？」

「泣くのは貴様だ。さあ、洗濯ハサミの有能さに気付け。そして洗濯ハサミにすら劣る自分の無能さを嘆くが良い」

再び直井の催眠術、逆に日向が膝を突いて大泣きし始めてしまった。

「おい、憂さ晴らしに催眠術を使うな」

「音無さん！違います、初めに向こうから突っかかってきたんです。僕は、出来るだけ穏便に・・・」

「何処が穏便だ。大の男が突っ伏して泣き喚いてるじゃないか」

「来たわね音無君。直井君も、ちよつとこつちに来てくれない？」  
「ゆり？」

「神も仏も、天使も無し」

「あら、ガルデモのみんなじゃない」

「あ、邪魔だった？」

「いいえ、どうしたのかしら？」

「緋村居ない？あいつまたどっか行っちゃってさ」

「教室にも屋上にも、寮にも居なかったんだ」

「それでここに居ないかと思って、来てみたんですけど・・・」

「ここにも居ないわよ。みんな？緋村君見なかった？」

「いんや？しらねえけど」

「私も知りません」

「僕も、椎名さんは？」

「知らんな」

「I know about him」

「何処にいたの？」

「He go to the mountain」

「山？何しに行ったのかしら・・・」

「まあ、また変な事に巻き込まれてないみたいでよかった」

ちらと直井のほうを見ながら、ひさ子が言う。

「・・・彼が帰ってきたら、一言教えてくれないか？」

「なんで？」

「彼には・・・少々手荒なまねをしたからな」

昨晚の時点で、直井が緋村に何をしたのか、そしてその内容と彼の人生の関係についてはわかっていた。余談だが、この時点でひさ子から拳骨一発が入った。

「謝つてすむとは思わないが、一応しておきたい」

「・・・わかった」

「それじゃ直井君と音無君、こっちに」

――山――

Side 主人公

静かだ・・・それで良い。少し、自分と向かい合わなければ・・・

―お前が強ければ―

―お前は私の息子ではない―

―殺したのはお前だ―

「全部、俺の本音だよな」

催眠術によって、掘り起こされたおれ自身の心が、亡霊になって出てきたんだ。

「笑って、か」

どうすればいいんだっけか、笑うためには。俺は、最初『笑う』ことが出来なかった。けれどあいつが、笑い方を教えてくれたんだ。でも・・・そこだけ、何故かその記憶だけ思い出せない。

「まあ、まずは」

スラァ・・・

「己と向き合え、だ。まるで禅問答だな・・・」

―空き教室―

「岩沢、そろそろあがる？」

「ん、ああそうだな」

既に辺りは夕日に包まれ、じわじわと夕闇が広がってきていた。そろそろ夕食の時間だ。

「あたし、もうちょっと新曲の調整しとく」

「そっか、ほどほどにしておけよ。それじゃ！」

「では岩沢さん！ユイ達は先にいってます！」

しばらく経ち、辺りは完全に闇に包まれた。

「そろそろ終わるかな」

岩沢が楽器を片付け始めたとき、教室のドアが静かに開いた。

「あ、緋村か」

「こんな時間まで、随分と熱心だな」

「まあね。どう？調子は」

「体のほうはもうなんともない。気持ちの整理もつけた」

「にしては浮かない顔してるな」

「・・・俺さ、笑えなかったんだよ、最初は。緋村の家に引き取られて、多少は学校で勉強もして・・・でも、自分から笑う事ができなかった」

「そう・・・なんだ」

「あいつに教えてもらったんだけどな、笑い方。思い出せねえんだ」

「今も笑えないの？」

「ああ・・・どうやって笑っていたのか、それすら忘れちゃった。

なあ・・・どうやってたら笑える？」

「・・・」

その問いに対して、楽器を片付けた岩沢は不意に緋村の顔に手を伸ばして

グイッ

「・・・何やってんだ、お前？」

「これでいいんじゃない？」

「・・・は？つか、なに笑ってんだお前は」

「そんな真面目な顔で、笑顔されたらちよつと・・・」

（このやり取り・・・どこかで・・・）

「さ、飯でも食いにいこ。美味しいもんでも食えば、自然と笑えるって」

「・・・ああ、そうだな」

「・・・」

「どうした？」

「うっん。行こうぜ、多分ひさ子達が待ってる」

岩沢には、先程ほんの一瞬だが緋村が笑ったように見えた。

（結局、忘れてなんかいなかったみたいだな）

## Episode 11

数日後――

――校長室――

Side 主人公

緊急だかなんだかで、突然SSSの主要メンバーに招集がかかった。今回は暇だったので、俺もついて行くことにしてみた。

「それで、報告ってなにかしら？」

「今日の食券が不足しているとのことですよ」

「いちいちオペレーションで稼がなくても、たまには奨学金で買えよ・  
・」

「どうするゆりっぺ？ いっちょ、トルネードいつとくか！？」

「いいえ、今日のオペレーションは……『モンスターストーリー  
ム』よ！」

「うわあああああ！？」

「遂にきおつたかあ！！？」

「絶望のcarnival……」

「トルネードしたいな……」

な……モンスター！？この世界は天使や神だけじゃなくて、モンスターなんてものまで存在するのかよ！？

「なんなんだ、その作戦は！？この世界には、モンスターまでいるのか！？」

音無も同じことを考えたらしい。つか、モンスター倒してどうすんだ？・・・食うのか？

「・・・不味そうだな、わざわざモンスター狩らなくても・・・」

「ええ、川の主です」

「川の主？」

あれか！？竜か！？竜なのか！？

「ちょっと歩いていったところに川があるだろ？そこで食料の調達だ」

「・・・日向、それはもしかしくなくても単なる川釣りじゃないのか？」

「そうだけど・・・それがどうかしたか、緋村？」

「・・・」

「あさはかなり・・・」

／（＾ｏ＾）＼　なんてこったい

モンスターとかいう響きに乘せられて、とんでもなくアホな想像をしてしまった・・・あの反応からして、音無もつられたのだろう。かなり残念な表情になっている。しかし釣りか・・・俺、魚駄目なんですけど。

「それじゃ、早速行きましょ？」

「うーす」

「今回は誰が一位になるんだろうな？」

「楽しみだね！」

「俺、パス」

「何でだよ緋村。乗り悪いぜ？」

「いや・・・寿司、あるだろ？あれ食ったとき、盛大に腹壊してな。それから魚は殆ど駄目なんだ」

「あら、残念ね。お寿司はおいしいのに」

「ま、そういうことなら仕方ないか」

「おう、お前らだけで楽しんで来い」

「なあゆりっぺ、次のライブはいつ？」

「うーん・・・しばらくはやらないつもりだけど」

「食券不足してるんだろ？明日はトルネードやろっぜ？」

「・・・いいわ、ここしばらく派手な活動もしてなかったし、明日は盛大にやりましょ！」

「オーケー！それじゃ、あたし達も明日の練習があるから、今日は抜けるよ」

「了解よ」

「岩沢さん、ユイは初めてのモンスターストリームなので、こちらに行かせて貰ってもいいですか？」

「いいよ、その分帰ってきたらしっかりと練習しときな」

「わかりました！」

「待てよ・・・俺このままだと晩飯抜きじゃね？」

「なんか言った？」

「いや・・・何でもない」

食わなくても死にやしねえんだし・・・明日までの辛抱だ。

「よし！今日は一日、練習で使い切るぞ！」

「ああ・・・岩沢さんのスイッチが入っちゃった・・・」

「今日の練習は一段と厳しくなりそうです・・・」

「頑張つてな！俺はここで聞いているわ」

「緋村さんだけずるい・・・」

「あ、そうだ！岩沢さん、緋村さんにも何か弾かせてみましょうよ  
！」

「な！？関根、貴様何を言い出す！？」

「面白いな、やらせてみようぜ？」

「ひさ子、お前まで・・・」

「いいですね、私も賛成です」

「お前ら・・・」

「だってさ、緋村」

「ぐぬぬぬ・・・」

「何からやってみる？ギター？ドラム？」

く・・・これならつりに参加していたほうが良かったかも・・・

「そつだ、いつペンボーカルやらせてみないか？」  
「はあ!？」  
「いいな、もし良かったら明日歌わせよう」

な、な、なんでだああ!？

夕方

―校庭―

Side主人公

「おうふ・・・疲れたぞ・・・」  
「でも、中々上手かったじゃん。ボーカルもしっかりしてたし」  
「・・・歌わんからな、絶対」  
「ははは・・・」

ワイワイ・・・ワイワイ・・・

「何で一般生徒も集まってるんだ？」  
「天使が主を釣り上げちゃって、戦線のみんなだけじゃ食べきれないから、一気に調理して振舞う事にしたんだって」  
「まるで何かの慈善団体だな・・・ん？天使が!？何で？」  
「音無が、もう生徒会長でも天使でもないんだからいいだろ、ってことで一緒に連れて行ったんだってさ」

なんと・・・ま、俺の直感だとあいつも人間ばいしな。戦線に引き入れちまえば・・・まてよ？

「でも・・・敵だった天使、奏ちゃんでしたっけ。彼女が敵じゃなくなったら今、私たちの戦線はどうなるんでしょう？」

そうだよな・・・戦線の意義が達成されちまったら、俺たちはどうなるんだ？でも・・・

「今は腹減ったから、まずはそれを何とかしよう」

「そうだね・・・でもあんた、魚駄目なんじゃ？」

「そこらへんは何とか頼んで、スープだけとかサラダとかでしのぐさ」

戦線 みんなが作ったご飯は、何故か食堂のそれよりも美味しく感じた。みんなで手作りして、いつも以上に賑やかに食事をしていたせいかもしれない。こんな日がこれから続くのか・・・うん、悪くねえ。もし、何時か消える日が来るとしても、こんな毎日を過ごせるならそれもいいかもしれない。

そんな風に考えていた矢先だった。

夜

Side音無

「生ごみって何処だー？」

「緋村ーこっちだ、もってこーい」

「わかったー」

なんとか消費できたな・・・というより、この世界はどうなってるんだよ。主ってマジで怪物だったじゃねえか！まあ、奏とも仲良くなれたし、戦線と一緒に居てくれるって約束もしたから、もうあんな戦いは起きないだろう。

「おい、ゆりっぺは何処にいった？」

「そっつえば見かけねえな」

「どうせどつかで高みの見物だろ。こんな奉仕活動みたいな事に参加する玉かよ・・・つかてめえも手伝え！！」

ドサ・・・

あれ・・・今なにか・・・

「なあ、今なんか音しなかったか？」

「そっつえば・・・！？あそこだ！」

「ゆりっぺー！！」

「つく・・・」

「ゆりっぺ！？誰にやられた！？」

「・・・天使」

「天使！？そんな・・・奏はずっと俺といたぞ！」

「・・・あれよ」

「なっ・・・天使が・・・」

三階建ての職員棟の屋根、そこに月を背景にして、もう一人の？天使？が立っていた。そしてそこから、俺たちのほうへ飛び降りてきた。

ドサッ！

「相変わらず化けもんみてえな体してやがるな・・・」

「くそ・・・これは一体？！」

「みんなで夜遊び？なら・・・お仕置きね」

そういうと天使は、ハンドソニックを出して襲い掛かってきた。

「はっ・・・」

ガキン！キン、キン・・・ガン！

ゆりがナイフで応戦する。

「ねえ、これってどういうこと！？天使はもう無害じゃなかったの！？」

（違う・・・こいつは奏じゃない！奏は無抵抗な俺たちに攻撃してくる事は無かった！）

「きゃああつ！」

「ゆりっぺえ！！？くそっ、俺たちはどうしたらいい？！」

まずはどうにかして動きを止めないと・・・そうだ！緋村がいる！あいつは一度奏に勝ったことがある。あいつがゴミ捨てから戻る、それまで時間を稼げば・・・

「みんな！ゆりと天使を扇状に囲むんだ！」

「ああん！？何で貴様が指示を・・・」

「わかったぜ音無！ほらお前もこっち来い！」

「準備は良いか！？一気に集中砲火する。幾らディストーションで曲げられても良い！緋村が戻るまで時間を稼ぐぞ！」

「その手があつたか！」

「All right！」

「おうよ！」

「ゆり！離れる！」

「くう・・・」

「撃<sup>て</sup>え！！！」

パンパン！パンパンパン！

「くそ・・・やっぱりディストーションが・・・」

「やべえ！そろそろ弾切れだ！」  
「くそ！」

間に合わなかったか・・・

すっ

「！？ 奏！！」  
「土龍閃！」

ドバババ！

二人の間に亀裂が入り、相討ちになりかけていたのをとめた。

「おいおい・・・こりゃあ一体・・・」

「緋村！間に合ったか・・・」

「間に合ったか、じゃねえ！どういうことだ、説明しろ！」

「解らない！とにかく、天使を倒してくれ！」

「どっちをだよ・・・と言いてえが、あきらかにそっちのほうから殺気を感じるな・・・」

「また地面を壊したの・・・何度いえばいいのかしら？」

「さあな・・・立華！こいつ捕まえたら、どういうことか話して貰うぞ」

「よそ見してるなんて余裕ね」  
「なに！？」

ズン！ ガキン！

「相も変わらず・・・速いねえ・・・」

「それはお互い様じゃない？ ハンドソニック・Ver2」

「うおっ！？」

ザシュツ

「緋村！？」

「騒ぐな！ 肩口をやらただけだ、頸動脈には届いてない」

「おいしいわね」

「残念だった・・・なっ！」

緋村が天使を、大きく弾き飛ばす。体勢を整えると、刀を鞘にしま  
って構えた。

「刀を鞘に納めた！？」

「そんなことしたら威力が・・・」

「牙突・弑式！」

「同じ技を、そうそう何度も受けると思っ？」

「上か・・・ならば！ 牙突・参式！」

「デイレイ」

「だよな！ けど・・・」

「これならどう？ ガードスキル・ハーモニクス」

「嘘だろ・・・」

（三人目が、反対側に・・・！）

「やばい、挟まれた!」

「天使が二人居たのは、あのハーモニクスってスキルの所為か!？」  
「このままじゃ緋村君が・・・」

そして、二人の天使が緋村に向かってハンドソニックを突き出した  
とき

「奏!？」

ザクッ!

S i d e 主人公

くそ・・・まあいい、せめて一人でも・・・

「はああ!」

鎌鼬!

「うぐっ・・・」  
ドオン・・・

そら、来い！・・・あれ？

「立華！？」

隣では、立華と天使が相討ちになっていた。

「う・・・」

「しっかりしろ！」

抱えてなんと落下は防ぐ。だが急所をやられてるみたいだ・・・こいつはいつペン死んだな・・・

「奏！？大丈夫か！？」

「二人は倒した！まずは引くぞ！」

「全員撤退！遊佐さん！他のメンバーにもこのことを！」

『了解です』

## Episode 11 (後書き)

感想・ご意見・質問なんでも受け付けております。

## Episode 12

翌朝

―医局（閉鎖中）保健室―

ここは怪我をした生徒たちのための医局棟。保健室ももちろんここにある。今医局棟は、戦線によって制圧・閉鎖され、奏の回復及び作戦会議の場となっていた。

「奏は大丈夫なのか？かなり傷は深いが・・・」

「私たちと同じよ、致命傷でも少し立てば元に戻るわ」

「こいつも人間だろうから・・・直らなかつたら、昨日のあれじやないが異常事態だ」

「・・・」

緋村の何気ない一言に、保健室中が静まり返る。

「あ？どうしたお前ら？」

「おい！？いま奏のことを人間って言ったか！？」

「あ、ああ。そうだが・・・」

「そうなのかゆりっぺ！？」

「ええ、今までのオペレーション結果からして、彼女は人間よ。気付いてなかったの？」

「気付くわけねえだろー！？今までずっと天使って呼んでたし！」

「神は驚かない・・・」

「それにしても、随分足が震えているようですが」

「それよりも・・・なんで同じ奴が二人も居るんだよ。この世界は、そんなわけわかんねえ世界になっちまったのか？」

「昨日見たでしょ。あれはガードスキル・ハーモニクス・・・簡単に言えば、自分の分身を作るスキルよ」

「でも、まるつきり同じ奴ってわけじゃないみたいだぜ」

「ああ、昨日の天使は好戦的だった」

「奏は、自分を守るためのスキルしか使わない。刃にしたってそう  
だ。兆弾させるためだ」

「名前からして『ガード』スキルだからな。とすると、何であいつは好戦的な天使になっちまったんだ？」

「まったく・・・無能の集団だな、貴様らは！もちろん音無さん以外ですが」

「基本アホの集まりですからね！」

「僕が一つの可能性を教えてやるつ。もし分身を作った時に、強い攻撃の念を抱いていたとしたら？」

釣りに行ったメンバーの脳裏に、ある一つの場面が思い浮かぶ。

「・・・！音無君たちが主に食べられそうになったときのことね」

「なるほど・・・そのときの本体の命令に、今も従ってるって訳か」

「でも、奏が強い攻撃の意思を抱くなんて無いはずだ」

「どうでもいいけど、あなた随分この子を庇うのね」

「え、いや・・・かわいそうだろ？」

音無の目には、独房に閉じ込められたときの、彼女の淋しげな背中が映っていた。

「ま、いいけど」

「それで、今の問題って何だっけ？」

大山がずれかけている路線を補正する。

「天使の分身を倒す方法か？」

「馬鹿か貴様は、消す方法だ」

「なんだと・・・うぐう・・・」

「落ち着け野田！それより、その子が意図的に出現させた分身なら、自分の意思で消せるはずだろう。その子が起きるのを、待っているだけでいいのではないか？」

「意図的に消せてたら、今こうしてやられてるか？」

「恐らく無意識での出現ね。だから彼女にも消せなかった」

「おいおい待てよ！あれが消せねえって、あんなのが居続ける世界になっちまうってことかよ！？それってかなりやばくねえか？」

藤巻が泡を食ったように言う。

「だからそれを考えているのだ、黙っている愚民」

「なんだと、クソガキ！？」

「神に逆らうのか？」

「そこ、うるさい！」

「あさはかなり」

「どうする、ゆり？今は見逃されてるみたいだが、明日からは多分、妙な事した瞬間に昨日みたいなことになるぞ」

「・・・少し、時間を頂戴」

「どうやってその時間を稼ぐ？」

「授業に参加して、分身の目をごまかして。でも、絶対先生の話の  
聞いちゃ駄目よ。消えるファクターになりかねないわ。各自何か別  
な事をして、大人しく受けてる振りをしてちょうだい」

「わかった」

「緋村君の怪我は少し大きいから、ここで天使の事を頼むわ」

「ああ・・・なあ、もうこいつは天使じゃないし、生徒会長でもな  
いんだ。名前で呼んでやろうぜ？」

「・・・わかったわ、考えておく」

S i d e 主人公

z z z . . . z z z . . . z z z . . .

「z z z . . . んあ？ふああゝあ・・・よく寝た」

ぐううゝと伸びをしてみる。立華は・・・

「まだ寝てるな・・・」

恐らく、昨日の傷の所為だけじゃないだろうな。今まで、俺が来る

前から続く戦闘。ずっとこいつは孤独で、ついこの間は身に覚えもないミスで、生徒会長を辞めさせられたらしいし・・・本当、神様って理不尽だよな・・・

「でも、こうして見てると、顔色変えず銃弾の嵐に飛び込んでいくような奴には見えないよな」

そんな時だった。

カッン、カッン、カッン・・・

足音・・・

カッン、カッン・・・

「待て、そこで止まって貰おう」

・・・

「一つ聞く・・・神も仏も？」

「天使もなし」

ガラガラ

「何だ岩沢か」

「もうすぐ昼だろ？はい、差し入れ」  
「おーおー、サンキューな」

チャーハンね。頂こう。ふむふむ・・・ん？

「ちよいと聞ぐが・・・こいつはお前の手作りか？」  
「え！？いや・・・そうだけど・・・不味い？」

いや、何故そこであわてる？

「いんや、下手すると学食のより美味しいな」  
「そう？気に入ってくれたならいいけどさ」

もぐもぐ、もぐもぐ・・・

「あんた、この頃良く怪我するよね」  
「生きてた頃に比べたら、こんなもん屁でもないさ」  
「それ、かなり危ない発言だと思う・・・」  
「はははは・・・」

手作りチャーハンを食べながら、立華の様子を見る。よくかわいい女のこのことを『お人形さんみたい』というが、立華を見てるとしっくり来る。

「・・・」

「どした、岩沢？膨れっ面して・・・」

「・・・何でもないよ」

「嘘付け、なんか怒ってるだろ」

「別に・・・それじゃ、もうすぐ授業だから、あたし帰るね」

「ん、ああ・・・」

「じゃ・・・」

カツ、カツ、カツ、カツ・・・

「・・・」

「岩沢、俺の後ろに」

殺気が1・・・2・・・二人か。確実にあの二人だな。

コンコン

「入っても良いかしら？」

「どうぞ・・・で、言わなくても入ってくるだろうが」

「こんにちは。どしたの、そろそろ授業の時間よ」

「どっかの誰かさんに怪我させられてね・・・もう少し休めって、校医のおっちゃんに言われたから、ここで休んでるところだ」

「あら、大変ね」

「どの口が言うかな・・・」

「私を連れて行かせてもらっわ」

「こいつは俺より重傷なんだぜ？もう少しそっとしておいてやれよ」

「私をどうしようとか？私？の勝手よ」

「「ハンドソニック」」

「下がれ岩沢！出来ればゆりたちに連絡を！」

ダッ キン！ ギチギチギチ・・・

「あなたは、こつちを斬ったほうが効くんじゃないかしら？」  
「っ！？てめえ！！」

一人が岩沢に向かっていきやがった！

「クソがつー！」

ガン！

「うつ」

させねえ！絶対にさせねえ！二度と傷つけさせるものか！！

「緋村！？」

ズブッ！

「ぐ、う、がぁぁ・・・」

ぐうう・・・久しぶりだな、この感覚は・・・

「く、そ!」

ブン!      ズシュッ

抜いた・・・な・・・

「がはっ・・・」

「緋村!? 大丈夫!？」

「かなり・・・だいじよばない・・・」

ガシ パリーン!

「窓から外に逃げたか・・・」

「いいわ、緋村君は後でどうにでもできる。彼女を隠しましょう」

「緋村! しつかりしろよ!？」

「わりい・・・いっぺん死ぬわ・・・ゆりたちに、この事を・・・」

「・・・わかった」

「任、せるぞ．．．」

あ．．．もう、駄目だ．．．

## Episode 13

―女子寮前―

「ふう、これでは・・・立華さん、でいいかしら。立華さんにハ  
ーモニクスを使ってもらえば・・・」

「はあ、はあ・・・ゆりっぺー!」

「あら岩沢さん、授業は?」

「それが――で――なんだ・・・」

「なんですって!?!」

（しくった・・・先にあの子を隠されたら、こっちに打つ手が無い  
じゃない・・・!）

「遊佐さん!? 全戦線メンバーに連絡! 急いで天使の目撃情報を集  
めて!!--」

『了解しました』

夕方

―体育館―

夕日に染まった体育館に、戦線主要メンバーが集められている。こ  
のほかにも、もう一つの入り口に他のメンバーも集められている。こ  
れから爆破したギルドへと再び降下するのだ。

「迅速に集められた目撃情報により、天使・・・立華さんの本体は、爆破したギルドに幽閉されている可能性が高いことがわかったわ。となれば、その最深部が一番怪しい。ここから一番遠く、且つトラップが起動したままの危険地帯・・・全員、気を抜かずに行くわよ」

「ここがギルドへの入り口か・・・」

「またここに潜ってたのかよ・・・前はほぼ壊滅状態だったぜ？」

「ふん・・・何を臆しているのだ」

「いや真つ先にやられてたからな、てめーは」

「ゆりっぺ、今回陽動は？」

「あんな凶暴な天使相手じゃ、陽動も5分と持たないわ。だから今回は陽動なし、正面から正々堂々と行くわよ。ガルデモのみんなは、天使を発見した場合に無線で私たちに知らせて」

「わかった」

「いい？作戦は道中に居るであろう天使を排除し、最深部に幽閉されているであろう立華さんを無事保護する事。それじゃ・・・オペレーション・スタート！」

―ギルド連絡通路 B4―

「ここがギルドへの道か・・・」

「元々、ここはダンジョンみたいな場所だったんだ。そこを利用して、僕達のギルドを作ったんだよ」

「ほう・・・」

よく見ると、ハンマーや鉄球が放置してある。これは前回の降下作戦の際、起動してそのままうち捨てられたトラップの残骸である。

「お、前回のトラップはそのまま放置してあるな。ラッキー！」

『ゆりっぺさん』

「なにかしら？」

『ガルデモメンバーが天使を一人発見しました』

「という事は、ここには一人しか居ないって訳ね。案外楽に終わりそうじゃない」

「あの、こんなところで天使に出くわしたら、もらしそなんですよ・・・」

「構わん」

「構ってくださいよ!？」

「!？」

まるでユイの声が聞こえたかのように、前方から天使が現れた。

「ひいひいひい?!」

「構わん」

「だから構ってくださいよ!？」

「早速現れたわね・・・撃て!」

ガチャッ

今回は緋村も、足止め用にM10サブマシンガンを持たされているが

ヒュウウン！

「うお！？」

「くそ、速すぎる！」

通り過ぎざま、手に持つアサルトなどはハンドソニックで切り刻まれた。

「アサルト系全部ぶっ壊されたぞ！？」

「まだハンドガンがある！」

そついいつつゆりが手榴弾で足を止めにかかる。

「ガードスキル・ディストーション」

ドゴオン！

「各個射撃！」

パン、パンパン！

「案外速く蹴りが付きそうね・・・」

「野田！しゃがめ！」

ヒュン

「ぐおっ！？何をする貴様！」

「後ろ見てみる！」

「な、なに？！」

「ええっ？！これ、どういうこと！？」

もう一体の天使が、野田を後ろから切り裂こうとしていた。それを緋村が、逆刃刀で押さえ込んでいる。

「オリジナルか！？」

「いや・・・こいつも分身だ！」

「なんですって！？」

（く・・・そうか、少し考えればわかることだ。緋村君と戦っていたとき、分身からまた分身を作り出していた！もしかすると、まだこれ以上・・・）

「何故もう一体いる！？二体目は学校じゃなかったのか！？」

「要は敵が増えていくという事ですか」

「っ・・・撃て！」

「後ろはどうすんだよ！？」

「まずは目の前の敵よ！」

だがこちらにも、ディストーションにより悉く弾かれている。

「忙しそうね・・・」

「一体目が！」

（勝ち目は、無い・・・！）  
「扉を封鎖する！こつちよ！」

次の通路への扉に走る一行。

「残り十秒！残ったものは置いて行く！」

「10！9！・・・」

「急げ！」

「うわわわ！？」

「緋村、早くしろ！」

「恐らくこの先にも何体が居るだろう・・・ちよつくらここで暴れてやるよ。少しでも多くひきつけられるようにな！お前らはその間に最深部を目指せ！」

「・・・ごめんなさい、後は任せるわ！」

「おう！」

「さて・・・」

「・・・」

ゆつくりと、コンタクトを外す緋村。

「これが無いほうがよく見えるから・・・今回はかりは、全力で

行くぜ!？」

S i d e 主人公

くっ、次から次へと・・・一体何体いやがるんだ!？

「そらっ!」

ドン!

「もういつちょ!」

ゴスっ!

「はぁ・・・キリがねえな・・・」

そろそろ体力が尽きる。一旦引くか・・・

パパン! パパパパン!

「あそこにも・・・」

タタタ・・・

威嚇射撃で分身たちを遠ざけ、暗がりにある小さな窪みに身を隠す。

・・・・・・

「行ったか？」

恐る恐る顔を出すと、倒れている数体を残して分身たちはどこかに移動していた。

「あー疲れた・・・こんなに酷使したのは、久しぶりだぜ」

御剣流は、極々少しずつだが使用者の体にダメージを蓄積させていく。すなわち諸刃の剣でもあり、短時間とはいえ奥義を尽くしての全力の戦いとなれば、かなり体力を持っていられちまう。

「どこだ、ここは・・・滅茶苦茶に戦ってたらへんなところに来ちまったぞ・・・」

お？あそこに一本道が。

「分身たちのトラップじゃありませんように」

抜けたそこには、目の前いっぱい天使が・・・おお、怖い怖い。幸い、真っ直ぐ続く道の先に、殺気は感じられない。

「扉、か・・・」

なんか事務室みたいな部屋（？）の前に出た。ここがギルドか？

コンコン

「おや、珍しいですね。こんな所に来客なんて。どうぞ」

「あれ、お前誰だ？なんだここは、ギルドじゃないのか？」

「あなた方の言う『ギルド』というのは、もう少し奥のほうに有りますよ」

「そうか、邪魔したな」

「待ってください。ここに来客があるのは、先程言ったように大変珍しい事なんです。そこで、あなたにいくつか質問があります。そして・・・選んでもらいたい事があります」

「・・・折角、こんな地下でこそこそ何をしてるのか、と聞かないでおいでやっただのにな」

「まあ、そう言わずに・・・唐突ですが、あなたは这个世界が何のために存在するのかわかりますか？」

「・・・・・・・・」

この世界の意義・・・そう言えば、そんな事考えても見なかった。神なりなんなりが居るのなら、この世界を作った理由があるはずだ。

「では、質問を変えてみましょう。この世界では、死にはしません。既に死んでいるのですから。変わりに消えてしまいますが、何故彼らは消えてしまうのでしょうか？」

くそ、人を面白いものみたいに見やがって・・・

「死人が・・・消える・・・？」

あれ・・・それって

「お分かりになりましたか？この世界の意義が」

「死んだ人間が存在するのは・・・生きていた頃の未練の所為。そして消えるという事は、成仏するという事・・・つまり、この世界は」

「そう・・・彼らが前世の未練を晴らし、新たな生へと一步を踏み出させるために在るのです」

なんだ・・・そうだ、直井が言っていたじゃないか・・・成仏させると。未練を晴らせば消えるのだと。

「ふっ・・・はははは・・・」

くそつたれ・・・ここは結局、俺たちが安心して消えられるように、俺たちに新たな一步を踏み出させるための世界だったんだ・・・抗う必要なんて最初から無かった・・・生きてきた人生が、例えクズみたいな内容だったとしても、ここで過ごすような『楽しい』生活を、また安心して始めることが出来ると・・・生きていく事は素晴らしいんだと、そう、教えてくれる世界だったんだ。

思い起こせば心当たりはごろごろある。ここで過ごした日々は、穏やかで、賑やかで、楽しい思い出・・・いや、二・三例外があるが・・・だった。まるで生きている人間が、青春を謳歌しているかのように。

「なら・・・逆に俺が聞こう。お前はNPCだな？なら、何でこんな所に居る？お世辞にも模範的な生徒が居るような場所じゃないぞ」「私ですか？ええ、わたしはNPCです。人の魂は持ち合わせていない。私はある目的のために、以前ここに居た？人？によって定義されました」

「そいつはどうした？」

「その目的のため、彼もNPCとなりました」

「なんだと！？人がNPCに！？」

「ええ・・・彼の目的。それはこの世界に芽生えた？愛？を、リセットさせる事。ここで愛を・・・未練を晴らした上で、愛を抱き、存在できる人が現れてしまえば、ここは永久の楽園と化す」

「・・・そうか。ここは・・・学校だから卒業でいいか・・・必ず卒業していかねければならない世界。だけど、ここで愛を育み、消える事がなくなれば確かに楽園が出来上がる。だって死なないから」

「そう・・・彼は、愛を信じて消えていった、一人の女性を待ち続

けた。もう一度めぐり合うために」

「そんなの天文学的な確率だろう」

「はい、ですが彼は待ち続けた。そして疲れてしまった、待ち続ける事に。彼は最後に、自分に起きた悲劇が、近い未来にここにやってくるであろう？人？に起きないよう、愛をリセットさせるためのプログラムを組み、私をその起動キーとして定義して、NPCとなった」

マジでか・・・

「それがさっき言ってたNPC化ってやつか？」

「ええ・・・では、ここであなたに一つ、選んでもらいましょう」  
「何を？」

「彼は、この世界を永遠の楽園にしようとはしなかった・・・ですがあなたは今、彼が選ばなかった道を選ぶ場所に居ます」  
「・・・・・・・・・・」

それは、まさか

「ここにある大量の『Angel Player』を使えば、ここを楽園とする事は容易に出来ます」

「永久の・・・楽園・・・・・・・・」

「そうです。いかがですか？その気になれば、神にだってなれますよ？」

「・・・・・・・・ふっ」

「おや？どうしたのです？」

「いいねえ・・・神様が・・・悪くない。でも」

俺の頭に浮かぶのは、岩沢達に比べたら格段に短いであろうが・・・ここであいつらと過ごしてきた、楽しい時間。戦線のメンバーと馬鹿やって、ガルデモのライブを聞いて、立華とちよいちよいぶつかって・・・我ながら、生きてた頃より充実した日々だったと思う。それが永遠に続くなら・・・思わず、そちらに手が伸びそうになる。でも

「ここでは何の変化も無い。確かに死にはしない。愛した奴と一緒に居続ける事は出来る。でも、そんな生活に意味はあるのか？俺たちは・・・死があるからこそ、愛したものをいとしく思い、一瞬一瞬を悔いの無いように過ごしたいと思う。だから」

「このまま、新たな生への道を歩むと？」

「ああ」

「・・・わかりました」

「最後に一つ、頼みがある」

「なんでしよう？」

「そのNPC化って奴だけど・・・待ってくれねえか？俺は決めた。消えるときはみんな一緒に・・・馬鹿やって、楽しくやってきた仲間だからこそ、消えるときには皆で逝きたい」

「わかりました、ここはあなたに任せてみましょう」

「すまないな・・・じゃ」

「はい」

ふ・・・自分でもくさい台詞だと思う。

―消えるときは皆一緒に―

この気持ちは本当だ。例えば次の世界で会えなくとも、人間ですらないかも知れないけれども、俺は、皆で逝きたい。だって気付いたから。ここで過ごした日々が、かけがえの無いものだ。そして、それは次の人生で必ずとはいえないが、手に入れることができるのだと。

「分身が消えてる・・・うまくいったようだ、な・・・」

あら？安心したら急に疲れが・・・

「ね、む、い・・・」

お休み・・・なさい・・・

## Episode 14 (前書き)

注意：今回はユイの消える回のお話ですが、原作の雰囲気ぶち壊し的な仕上がりです。感動でまとめたかっただんですが、作者の力不足ゆえにこうなりました。どうしてこうなった・・・でもいい方は読んでください。また、岩沢のキャラ崩壊もヤバげです・・・

## Episode 14

—翌朝—

Side主人公

「・・・うん？」

ああ・・・ここは寮の俺の部屋か。

「こいつら・・・」

ふと隣を見ると、ガルデモのみんなが二・三枚の毛布にくるまって寝ていた。まったく、男子寮に女子は入れないんじゃないかなかったのか？

「Zzz・・・Zzz・・・ん？あ、緋村起きたんだ・・・はああ・・・」

「おう、心配かけたな」

「ああ日浦さん起きたんでふね・・・」

「ううん・・・まだ食べられますって・・・」

普通逆じゃないか？

「関根、もう起きなつて」

「ふえ？」

「お、やっと起きたのか」

「よ、ひさ子・・・なんか、随分久しぶりな気がするけど・・・」

「だってあんた、二日間眠りっぱなしだったんだよ」

「なんと・・・立華は？」

「・・・」

「それが・・・」

「成る程・・・冷酷な意識と同化して、のっとられちまった訳か」

「うん・・・」

（にや）

「そうか、それなら仕方ない」

殺気は感じない。恐らく音無の企みだな。

「・・・？」

「これからは大人しく過ごすしかないな」

「緋村、何か隠してない？」

「いいや、何も」

「・・・」

「そういえばユイはどうした？」

「天使にギター取られて、追いかけていつてから見えない」

「なんだそれは？」

「さあ」

あいつら・・・何してやがるんだ？

―校庭―

Side主人公

・・・

「殺人ギロチンシュート!!」

「なんか俺を殺したいのかゴールを決めたいのか、ツツコミ所の多いシュートがきやがったあ!!?」

今、俺の目の前でサッカー(?)が行われているが・・・音無、ついでに物陰の天使・・・お前ら一体、何を企んでいる・・・

「おおっ奇跡だ!!」

「「とめる日向あ!!」」

ヒュッ パシン!

・・・今、なんか撃ったな。それがボールに命中し、軌道が曲がって見事にゴール。

「まさか、あいつらユイを・・・」

見た限り、ユイのやりたいことを全力で支援しているように見えるが・・・どうする、俺。このまま見逃すのか？だが・・・

「・・・喉渴いたな、keyコーヒーでも飲んで考えるか」

くそ・・・あいつら何処に行きやがった？

「ん？おお、やっと見つけたぞ」

野球・・・だよな、あれは。ユイの奴、随分多趣味だったんだな。サッカーに野球、歌手と、伝え聞いた話によればレスリング。

「どうすつかな・・・」

「お？緋村じゃねえか。よ、こんなところで何してんだ？」

「ああ日向か。あれ、見てみ」

「何だ？・・・あいつら、あんなところで一体・・・」

「さあな、気になるなら行ってみたらどうだ？」

「何で俺がユイを気にするんだよ」

「いっつもつるんでるじゃないか、お前ら二人は」

「いや、まあそうだが」

こいつにとってユイは・・・どうなんだろうな。俺と同じ思いは、出来ればして欲しくない。あーもう、こんな考え事は苦手だったのに！

そんな風に悩んでいる内に、時間はあっという間に過ぎていった。

その間もあいつらは野球をしていた。どうやらホームランを狙っているらしい。俺はといえば、離れたところから、あいつら二人を見ているしか出来なかった。あいつらが野球を始めてから4日、その日の夕方、遂にその時は来てしまう。

「じゃあ先輩、あたしと結婚してくれますか？」

唐突に放たれたユイの本音。いつも元気で、ふざけ半分に遊びまわっていたあいつの姿は、そこには無かった。

事故にあって、動かなくなっただけ。その所為で、母親には迷惑をか

けてしまった。やりたい事は出来なかった。一番の夢を・・・叶えられなかった。

「それは・・・」

「俺がしてやんよ！」

日向・・・やっぱりお前・・・

「え・・・」

「俺が結婚してやんよ・・・これが、俺の本気だ」

「そんな・・・先輩は、本当のあたしを知らないもん・・・」

「現実が・・・生きてた頃のお前がどんなでも、俺が結婚してやんよ！もしお前が、どんなハンデを背負ってたとしても」

「ユイ歩けないよ？立てないよ？」

「どんなハンデでもつつたろ！！」

「！」

「もし歩けなくても、立てなくても・・・子供が産めなかったとしても！俺はお前と結婚してやんよ！ずっとずっと、傍に居てやんよ」

「くそ・・・俺は・・・」

あいつに、あんな思いはさせたくない・・・でも！ユイは今、手に入れたかった物を、手に入れようとしてるんだ！それを、俺が邪魔する権利なんて・・・

「緋村」

「岩沢・・・」

「こんな事になってるなんてな・・・それで、お前は どうしたいんだ？」

「それは・・・」

「見たところ、あいつが消えるのに納得してないみたいだけど？」

「・・・俺は、此処から消えるとしたら、皆で逝きたい」

「だったら行ってきなよ」

「え？」

「もちろん、逝く時はお前も一緒だぜ？」

「・・・ああ！」

ありがとよ、岩沢。お前のおかげで、一歩踏み出させそうだ。

「ねえ・・・そんな時はさ・・・あたしをいつも、一人でがんばって介護してくれたお母さん、楽にしてあげてね？」

「ああ・・・まかせろ！」

「よかったあ・・・！」

「・・・よう、ちょっと待ってくれ」

「おい、緋村！」

「分かってる、音無。俺は今、とんでもなく馬鹿なことをやってるに違いない。でもよ・・・日向、お前は本当に、これでいいのか？このままユイを逝かせちゃって」

「・・・ああ」

「まだ結婚式も挙げてないのに？」

「ああ・・・って、はあ！？ちょっと待て、お前はいつたい何を！？」

「だってそうだろ？ユイと結婚してやるんなら、しつかり最後までしてやれよ。なあ、ユイ？」

「え、あ・・・はい！」

「おい！くそ・・・」

「先輩・・・駄目なんですか？あたしと式、挙げてくれないんですか？」

瞳を潤ませて、ユイが日向を見上げる。日向君、観念しようか？

「・・・ああもう！挙げるに決まってんだろ！？お前以外との式なんて考えられねえよ！！」

「・・・！！」

「おお、言い切ったね日向殿」

ユイの方は、感極まったという感じで言葉を失っている。それを黙ってみている俺に、静かに音無が話しかけてきた。

「・・・なあ緋村、お前・・・」

「俺と同じ思いをさせなくなかった、それだけだ。知ってるかもしれないけどな、一番大事な人が先に逝くのは、一番辛いんだぜ？」

「そう、だな」

「音無・・・俺はな、消えるときは皆で逝きたいと思う。だってそうだろ？ここまでずっと一緒だったんだ、最後も皆で、笑って逝こ

「うや？」

「だってさ。どうする、音無？」

「岩沢まで・・・そうだな。でも宛てはあるのか？」

「それについてだが、後でお前に話がある。まずは飯でも食おうぜ？腹減っちゃった」

ふと見れば、嬉しそうに腕を組む二人が居た。それを見て音無が呟く。

「・・・たしかに、皆で逝くのが一番かもな」

で、そろそろ離れようか、お二人さん。あまりベツタベタされると、こう・・・なんだ、斬りたくなってくるんだが・・・

「緋村、二人がうらやましいのか？」

「あ、まあ・・・そんな事は無いぞ、良い事じゃないか」

「あたしと、組んでみるか・・・？」

「・・・今なんとおっしゃったかな、岩沢殿」

「緋村、お前も察してやれよ・・・」

どうもそついうのは苦手だね・・・まあ何はともあれ、無事に俺の計画は進みだした。このまま、皆で・・・  
その中に、俺はいるのだろうか？

## Episode 14 (後書き)

感想・ご意見お待ちしています。また、ここからはオリジナルストーリーを組みたいのですが、『高校生活といえばコレ』的なイベントのリクエスト待っていますので、よろしければお願い致します。

m ( ( m

## Episode 15 (前書き)

体調と仕事が一段落したので更新させていただきます。

なんかこの頃迷走気味だなあ・・・

## Episode 15

―男子寮、緋村の自室―

緋村はあの後、音無を部屋に招いて今後について話し合っていた。

「・・・この世界を意のままに、か」

「ああ。そこで俺は楽園への道を拒絶した。戦線の方針からすれば、俺はあいつらを裏切った事になる」

「いや、俺でもそうしていただろうし、お前を責めるような奴らじゃない事はお前が一番よく知ってるだろ」

「それもそうだな。それじゃ、次にこの世界から無事卒業できるための方法を考えようと思う。今、この世界は少しずつ変化している。俺の予測だと・・・音無、お前が原因でな」

「俺、か？」

「そうだ。あいつはこの世界に愛が芽生えてはいけないといった。奴が現れたという事は、その愛が育まれ始めたという事・・・それが実行できるのは、前世に満足してなお、消えていないお前ぐらいなもんだ」

その言葉に軽く頷く音無。

「それで、変わり始めた世界で何が出来る？」

「言い方が悪いが・・・この『偽りの青春』を、心から楽しめると思う」

「・・・すまないが、今までもかなり楽しんでいた気がするぞ・・・」

「確かにそうだが・・・あれだ、消える心配がないって事だ。ユイがここに残った事で、更に消えるためのハードルは高くなっただろう。自分から望まない限り、自動的に逝くなんて事は無いはずだ」

「そうか・・・それを利用して、本当に高校生として生きているような体験をさせて・・・」

「・・・全員で『卒業』する」

「行ける！これならきつと上手くいくぜ！」

「期限は一年って所か」

「ああ・・・そこでだ、ゆりはどうする？」

「そこが問題だよな・・・ま、なる様になるってことで」

「そうするか」

「それじゃ詳しい設定とかは、また明日説明した例の場所で」

「ああ、わかった・・・成功させようぜ、このオペレーション『Enjoy the Pass Youth』を」

自室へと帰る音無を、無言で手を振って送り出した緋村。心なしかその顔は、泣いている様に見えた。

Side主人公

「皆で・・・か」

俺、逝けるかな・・・本当にあいつのことを忘れて、次の人生を歩めるのか？あいつに許しを得ないまま？

・・・・・・・・・・

「違う」

本当は分かっている。あいつが俺を恨んでるはずが無い。ありがとうって、言ってくれたその言葉を、俺は忘れていない。自分で自分が許せていないだけだ。

「違う！」

嘘だ。ここで過ごした生活のお陰で、俺は随分と助けられた。あいつらのお陰で、昔の俺を許すことが出来たんだ。ここであいつらを守れた事で、俺は救われたんだ。

その中で芽生えた感情。それは――

「・・・・岩沢」

最初は声の所為だと思っていた。でも違ったんだ。

その声に惹かれた。すべてを引き込む歌声に。

その姿に惹かれた。舞台上で、夢を必死に叶える続ける姿に。

その思いに惹かれた。自らが目指すものへの、強い思いに。

その表情かおに惹かれた。好きなものへと打ち込む、その真剣な表情に。

怖かった、この思いを忘れる事が。初めて手に入れたこの想いが、消えうせてしまうことが。他人にあれほど言っていたのに、自分では認めようとしなかったこの感情が、日増しに膨らむのを感じて思った。

「忘れたくない・・・」

この思いを、捨てたくない。あの日、あの時、あの場所で、次へ歩むと決めたのに、こうして留まろうとする自分がいる。

もし留まるのならば、それは俺一人で良い。この思いは内に秘めたまま、彼らを見送ろう。それが、弱い俺に出来るせめてもの手向け。彼らが逝く、その日まで。俺は彼らの友でいよう。そしてこれから友でいよう。まためぐり来るであろう、次の『人』の友として、ここで見送り続けよう。

―校長室―

結局、ゆりにはすべて筒抜けだったようで、翌日すぐさま呼び出された。

「それで？昨日の『あれ』を、これからも続ける気なの？どうやら緋村君も、何かしら企んでいる様子だけど」

「それについてだが・・・ゆり、話があるんだ」

「何かしら」

「それは――」

力強く論じる音無。そして時折相槌をいれ、手助けする緋村と無言で聞き入るゆり。この世界で得た友を、生活を、新しい人生でも手に入れられるはずだと語る。

「俺が言ってる事は、今までのお前らを全部否定してるようなものだ。でも！永遠にこの世界で過ごす事にも、俺は意味は無いと思う」  
「・・・・・・・・」

「・・・・この存在意義。それは『俺たちを満足させ、次の生への一歩を踏み出させる』事だと、あいつは言っていた。確かに、生きていた頃の人生なんて認めたくない。だが、それはもう終わってしまった事なんだ。酷な事を言うかもしれないが、今更それを覆す事はできない。だけど、また新しく『始める』ことだって出来るんだ」  
「そうね・・・・いえ、本当は私だって分かってたわ。天使失脚作戦で、打ちひしがれた彼女を見て、彼女が人であることを知った。

Angel Player の存在を知って・・・神はここに居ないってことにも気付いてた。でも認めたくなかった・・・今まで神を倒すために私たちは戦い続けてきたのに、それが全部無駄になるなんて思いたくは無かった」

「・・・・・・・・」

「でも・・・あなた達の言う通りね。いつまでも一箇所に留まっているのは、この戦線には似合わない」

「じゃあゆり・・・!」

「ええ・・・残り一年間、精一杯生きてやりましょう。あの忌々しい神様の思う壺になるのは癪だけどね」

「・・・ありがとう」

「それでみんな、今の話は聞こえてたかしら？」

「え？」

「おう、ばつちりだぜ!」

「あさはかなり・・・」

「ごめんね、緋村君に音無君・・・」

「まったく、お前らもとんだ事を考えるな」

「ですが、私は賛成です」

「俺も」

「僕も、かな」

「俺はゆりっぺの命令にだけ従う・・・」

「あたし達もいいよ」

「音無さんが言うなら喜んで!」

「Let's enjoy!」

戦線メンバーが、開かれた扉から続々と入ってくる。その光景に呆然とする音無と緋村。

「・・・ゆり、謀ったな？」

「あなた達の意思を知ってもらうには、いい機会だと思ったの。まだいつもの幹部メンバーにしか伝えてないけどね」

「みんな・・・本当に、これで良いのか？」

「あなたが言い出したんじゃない。最後まで自信を持ちなさいよ」

「ああ・・・そうだな。みんな、宜しく頼む」

「おいおい、これから遊びまくるってのに、そんな堅い挨拶はなしにしようぜ？」

校長室に戦線の笑い声が満ちる。そんな中一人、緋村が抜け出した事に気付いたのは誰一人としていなかった。

## Episode 15 (後書き)

感想、ご意見、その他もろもろお待ちしております。

## Episode 16 (前書き)

忙しい・・・はずなんですけどね・・・忙しくなるほどこっちを更  
新したくなる・・・現実逃避ですね、わかりm(r)y。

## Episode 16

―地下の部屋―

「それで、今は何月くらいなの？」

ゆりたちの提案で、まず季節にあったイベントを行う事になった。そこでゆりと音無、そして日向と直井（勝手についてきた）を連れて、あのなぞの男に聞きにきたわけだ。

「よく考えたらここ、季節の移り変わりって無いよな」

「たまに雨が降ったりするだけで、大きな天候の変化も無いですし」「たしかに、変わり映えの無い天候だったな」

「でも音無さんに雨なんて似合いませんよ。あ、もちろん暑苦しすぎる炎天もです！」

「少しお待ち下さい・・・ああ、生きている世界の方は分かりませんが、私が定義されてから数えると・・・・・・・・今は丁度8月、夏真っ盛りですね」

「にしては随分涼しいわね・・・」

「あなたが過ごしやすいように設定されていますからね、この世界は。夏は暑すぎると思う人が出るかもしれない、冬は寒がる人が出るかもしれない・・・」

「それもそうだけど・・・どうにかならないかしら？」

「できます。この世界を楽園に出来るだけの力がここに有るんですよ？気温をいじる程度なら何の問題も有りません」

「そうだったわね。それじゃ、お願いできるかしら」

「わかりました」

―空き教室―

side主人公

「で、その結果がこれか・・・」

あ、暑い・・・暑いぞぉ・・・昨日辺りから突然気温が上がりがつた。俺？椅子三つ並べて横になってる。

「緋村先輩って暑い駄目なんですね」

「この程度なら生きてた時と変わらないと思うんだけど」

「だらしねえぞ緋村」

「いや・・・そう言われてもな、ひさ子・・・俺の生きてたところじゃ、これだけ気温が上がる事なんてなかったんだぞ？」

冬でも夏でもあまり変わらなかったからな、気温が。寒いときは1

8、暑くて26だったかな。そして今の気温は・・・

「34・・・暑いぞ・・・」

「意外な弱点だな、今の緋村さんだったらあたしでも勝てそう！」

「おふつ、くすぐるな関根・・・た、体力が持っていける・・・」

」

「ああ・・・しおりん、そろそろやめといたほうが・・・」

「うふふふ・・・ここか！？ここがいいんか！？」

「や、め、ろ」

「・・・関根？そろそろ練習始めるぞ？」

（ゾクッ）

「は、はい！」

（こそこそ）「岩沢さん怒ってない？」

（こそこそ）「みたいですけど・・・なんででしょうっ？」

（こそこそ）「気にしてやるな。ほら、練習始めるぞ」

（こそこそ）「はっ、もしや・・・」

（こそこそ）「え！？どういう事なの、しおりん！？」

「うふふふ・・・」

「岩沢、なんか関根の目があれなんだけど」

「そうか？気のせいだろ」

にしても暑い・・・このままでは溶ける、確実に溶ける・・・

「皆さん、ゆりっぺさんから通達です。全員午後までに水着を買って、校門まで集合するように、だそうです」

「校門に？水着ならプールとか、そういった場所の前じゃないのか？」

「良くわかりませんが、とにかく集合しろといわれました」

「水着って・・・購買に売ってるかな？」

「規定の水着ならあるでしょ」

「それじゃ、買いに行くか」

―売店―

「・・・この売店は、こんなに広がったのか？」

「いや・・・なんだろう、いつの間にかデパートみたいになってる・  
・・・」

水着を買うために、俺たちは売店のある建物へと来たんだが・・・  
でかい。なんか二階建てに進化してる・・・普通学校の売店って、  
プレハブ小屋みたいなんじゃないっけか？

「お、きたか緋村！」

「ああ日向、どうした？」

「どうした？じゃねえよ。ほら、水着はこっちだぜ」  
「わかった」

「俺、むこう行ってくるわ」  
「わかった」

「日向、それに音無もか」  
「よっ」

「ああ……で、これはどういうことなんだ？」

「海に行くらしいぜ」

「海！？この周りは全部森じゃなかったのか？」

「ゆりっぺの命令で、あいつに頼んだんだ」

「ふむ……成る程ね」

多分

――夏なら海よね。ちょっと設定変えて、海を作りなさい――

みたいなノリだったんだろうな。

「さて、俺も適当に……」

そして校門に集合した一行だが、直前になって一悶着起きた。

「……………」

「あはは……………」

「……………」

音無が立華を連れてきたのである。

「貴様！！またそいつを連れてきたのか！！」

「元天使だぞ！？戦線と抗争してた相手なんだぞ！？」

「あさはかなり・・・」

「本当にアホですね！」

「だから、本当は凶暴な天使じゃなかったんだよ！あの時の奏なんだ！！」

「だが曲がりなりにも現生徒会長だぞ！」

「でも同じ人なんだから、一緒に卒業しなきゃいけないんだぜ？」

「日向、お前まで何を言うか！」

「早速浮気ですか、ひなっち先輩！！」

「違うわっ！」

結局、ゆりの判断に任せる事になり

「まあいいんじゃない？もう戦う相手でもないんだから」

「「「ええー！？」」」

「・・・何でもいいからさっさと行こうぜ」

こうして、戦線メンバーを乗せたバスは出発した。

―バス内―

「楽しそうだな、奏」

「うん・・・海に行くのは初めてだから」

「そうなのか・・・待てよ、じゃあお前泳げないんじゃない・・・」

「多分そうだけど」

「それで水着が見当たらないわけだ。ま、あいつらの事だから、見てるだけで楽しいとは思うけど」

「そうね」

「バスで行くとか・・・何処に海を作ったんだよ、あいつは」

「森自体を変えるのはきついから、ちよつと離れた所に作ったんだってさ」

「ふうん・・・」

「さてと、準備しねえとな・・・」

「日向、そのカメラは何だ？」

「しー！大声で言うな緋村！」

「それは俺たちの夢と希望が詰まってるんだぞ！」

「何だ藤巻、お前まで・・・」

「いいか！海といえば水着、水着といえば海！ビーチバレーや泳いでいる姿を、形に残さない手は無い！」

熱く語る日向と、それを冷ややかに見つめる緋村。

「ふん・・・下らん」

「何だよ野田・・・ゆりつぺの水着写真が欲しくないのか？」

グッ

「ふ・・・協力しよう！」

「・・・アホだこいつら」

「くっ・・・お前にはわからねえのか、このロマンが・・・」

「それより藤巻、お前水着は？」

「・・・・・・・・」

「藤巻君はカナヅチなんです」

「悪かったな泳げなくて！」

「誰もそんな事は言っていないぞ」

「藤巻、泳げないお前だからこそこれを渡せるんだ・・・任せるぜ

！」

「おう！」

妙な情熱を燃やす男たちを乗せて、バスは一路海へと向かう。

――海――

遂に海へ到着した。すんだ海水に、海浜特有の強烈な日差しがきらめく。砂浜は真っ白でゴミ一つ無い（彼ら以前に来たものがないので当然ではあるが）。バスから降りると、女子たちはそばの脱衣場へと歩いていった。

「あんたたち、覗いたらどうなるか分かってるわよね？」

「はいはい、分かってるって」

男子は既に制服の下に着ていたの、そのまま服を脱いで海へと走

っていく。

「うおゝ冷たくて気持ちいい」

「よく出来てるな」

「Swim, swim・・・」

「緋村？」

「あa ぶふう!？」

「してやつたり!」

「てめえ・・・日向・・・」

「うおお!? 待て、おち ゴボボボ!」

「お! 魚がいるではないか!」

「フジツボはいるのでしょうか」

「ハルバードではとどかな・・・銚は無いか?」

「藤巻君もこうやって、浮き輪使えばいいんじゃない?」

「いや、水そのものが駄目で・・・」

「うわぁ、きれいな魚だ!」

「人の話を聞け!」

「竹山、お前も泳がないのか?」

「僕の事はクライストとおよび下さい」

「あー・・・はいはい」

そこに女子勢が合流する。

「あゝ気持ちいいな」

「くらえみゆきち！」

「ああっ、やったな」

「立華さん、一緒にビーチバレーしましょ？」

「うん」

「あさはかなり」

「それでは試合開始です」

「くそ・・・緋村ももう少し冗談って奴をだな・・・」

（先輩・・・後ろがから空きですよ！）

「そりゃあ！」

「ごふう！？あばば・・・」

「お熱いことで」

「待て、音、無！たづけ　ゴボア！？」

「ふん、愚民が。せいぜい無様におぼれている」

「ンだと直井！？」

「な、貴様！何をする！！」

「・・・なんだ岩沢、こんなところまで来て作曲か」

「うん・・・今までこんな事が無かった分、新しいフレーズをたくさん思いついちゃってさ」

「そっか・・・」

「ええつと」

「？」

どこかにいったかと思うと、緋村はビーチパラソルを持ってきた。

「ほら、一応日射病とかになるらしいからな」

「悪いな」

「いいって・・・俺はちょっと疲れたから、一緒に寝させてもらうわ」

「りょーかい」

S i d e 緋村

ばさ、ばさ

Z Z Z・・・Z Z Z・・・

ばさ、ばさ とんとん

さつきからなんだ・・・人の体になんかかけたり叩いたり・・・

・・・

「うん？」

「あ、緋村先輩起きました？」

「『起きました？』じゃねえ！何だこれは！」

ユイが乗っかって、砂掛けて固めてを繰り返してやがる。

「おー起きたか緋村」

「ひさ子！それに関根もか！」

「あんまり気持ち良さそうだったからつい・・・」

「つい・・・じゃねえよ！ったく・・・」

く、む・・・そら！

ぼっ

「あー！？折角固めたのに・・・」

「くそ・・・岩沢、見てたんなら止めてくれよ」

「起きるかな、と思っていたらいつの間にかそうなった」

「ちっ・・・海入って砂落としてくるわ」

「はい」

ザッパーン！

「ふう・・・酷い目にあつた」

「おい緋村、こつちで魚捕りしようぜ!」

「何かいるのか?」

「色々いるぞ、ほれ」

渡された道具を使って海底を覗いてみると

「おお、確かにいるな。でも、俺は魚駄目だし」

「そいや、そうだったか。わりいわりい」

「おい」

ん、音無か。

「大山見なかったか?さつきから見当たらないんだ」

「もしかして沈んでるんじゃないか?」

「それは無いと思います。彼は浮き輪を使用してるので」

「だったら沖に流されたとか?」

「どれだけ本格的なんだよ、この海は・・・」

「とにかく、手分けして・・・」

「うわああああ!!!!?」

「っ!?!」

「な、なんだ?!」

「助けてええ!!」

ザバァザバァ・・・

「おい・・・大山の後ろ、何か見えねえか？」

言われなくても・・・あの波の間から見え隠れする黒い三角形は・・・

「もしかして・・・サメか？」

「もしかしくてもサメですね」

「オオウ・・・It's shark!？」

「何処までリアルに作れば気が済むんだよ!？」

「ていうか・・・このままだと俺たちもやばいぞ」

「「「「・・・」」」」

「「「逃げろおお!!」」」

「大山! 逃げ、食われるぞ!!」

「でも・・・もう、疲れて・・・」

おいおいやべえぞ・・・今は逆刃刀も持っていないのに・・・

「藤巻! 銃持つてねえのか!？」

音無が陸の藤巻に問う。

「泳ぐのにわざわざ銃なんて持つてくるかよ！」

「じゃあその長ドスかせ！」

「ああ！？なんで・・・！ 分かった！」

「すまん！ 緋村！」

そう言う事か！

「投げる！」

「おらっ！」

「うおっとと！？」

なんとかキャッチ！

「あんまり自信は無いが・・・」

牙突の要領で・・・！

「行っけええ！」

ヒュッ      ズブ！      バッシャーン！！

見事突き刺さり、動きを止めたはいいが・・・

「「「・・・」」」

「はぁ・・・はぁ・・・ありがとう・・・」

「・・・逃げろお!!!!」

今度こそ俺たちは一目散逃げ出した。何でかって？サメのでかさが規格外なんだよっ!!  
跳ねた姿が、いつだったかの主ぐらいあるぞ!ふざけんな!!

「あ・・・はぁ・・・もう、泳げないや・・・」

「大山あ!諦めるなあ!!」

ああああ!？サメが大口あけて大山を・・・

パン、パンパンパン!!

「おお!？」

「まったく、対視き用の銃器が、こんなところで役立つとはね!」

「椎名さん、大山君をお願い!」

「了解した」

「ふっ！」

「ナイス椎名！」

大きく跳躍した椎名が、半分沈んでいた大山のそばに飛び込み、抱えて泳ぎだす。そうして全員がなんとか浅瀬まで逃れたが、巨大サメはまだうろついている。

「仕方ないわね・・・立華さん、ちょっとお願いできるかしら」

そう言つてゆりが立華に釣竿を渡す。何でもギルドにいる『フィッシュ斉藤』なる男の謹製らしく、あの主もこれで釣り上げたらしい。そして俺には逆刃刀を。

202

「はい、緋村君。立華さんが釣り上げたら、両断してちょうだい」

「わかったわ」

「簡単に言ってくれる・・・」

逆刃刀で両断とか、無理言つたの・・・仕方ない、頭でもぶつたたいて気絶させるか。

「来るわよ！」

「・・・！！！」

ブン！ ザッパーン！！！！

「うわぁ、やっぱりでけえ!!」

「飛天御剣流・・・龍翔!」

ボゴ!

「・・・槌閃!!」

ドカツ! バシャーン!!

「おお、倒しやがったぜ・・・」

「疲れた・・・帰ろうぜ・・・」

「緋村、お前バテ過ぎ」

「暑い・・・暑いんだぁ・・・」

今ので一気に疲れが・・・

「このサメ、どうする?」

「一応食えるらしいぞ、サメ。湯引きなどにすると臭いも薄くなり、  
淡泊で美味らしい」

「それに、サメって言えばフカヒレだろ?」

「そうだな、ひれは全部フカヒレとして食えるぞ」

「それじゃ、軽くさばいて食べちゃいましょ」

「「「りょうかい」」」

## Episode 16 (後書き)

ユニーク2,000突破しました。皆様のご愛顧に感謝しつつ、ここに更新させていただきました。

## Episode 17 (前書き)

久々の更新、お待たせしました。そしていつの間にかお気に入り登録がえらく伸びている・・・恐縮です。皆様の期待に沿えるよう、これからも頑張ります。

## Episode 17

時間とは案外早く流れているもので、既にあの海水浴から一ヶ月が経っていた。

――空き教室――

「こら緋村！またリズムがよれたぞ！」

「緋村さん、もう少し伸ばして・・・」

「今度は歌が適当になってますな！」

「はぁ・・・なんで俺がこんな目に・・・」

「もう少して休憩だから、それまで頑張れ」

「はぁ・・・」

何故緋村が、ガルデモの練習に参加しているのかといえば

――校長室――

「さて・・・いよいよ来たわね・・・」

「何が？」

「A cultural festival」

「文化祭？」

「そうよ！でもただ楽しむじゃ芸がないわ。という事で、各自ま

たチームを作って、文化祭に有志で参加する事。もちろん出店も可。あたしが当日回るから、一番つまらなかったチームには・・・」

「・・・チームには？」

「おなじみの死より恐ろしい罰ゲームね！」

「またか・・・」

「前回は結局、みんな生徒会チームにやられたわけだから罰ゲームはなかったけど・・・」

「かわりに、どんな罰ゲームなのかも解りませんでした」

「さ、わかったらみんな、がんばってちょうだい！」

「あたし達はいつも通り、体育館でライブすればいいよね」

「ああ、そのつもりだ」

「ユイにとっては、初の公式&体育館ライブです！」

「頑張ろうね、みゆきち！」

「うん！」

「がんばれよー、お前ら」

「あれ？緋村さんは何もしないんですか？」

「面倒だから、適当にばっくれてるさ」

「駄目だよ」

「えっ？」

「あんたはあたし達と一緒に今度のライブに出るんだよ。な、岩沢？」

「ああ」

「え？は？いつの間に？」

「釣りの時の練習で」

―何時か緋村も混ぜてライブしたいな―

「って言ったらお前」

―勝手にしやがれ・・・それより俺を解放しろ―

「って、いつてましたぞ!」

「なん、だと・・・」

「さ、行こうぜ!」

「く、くそ・・・」

「逃がしませんよ!」

じわじわとにじり寄ってくる関根とユイに怯む緋村。と、そこに丁度、椎名が通りかかった。緋村にとっては正に天の助け。

「椎名!」

「なんだ?」

「俺をどっかに連れて行ってくれ!」

「何故だ?」

「どうでもいいだろ!・・・また、あのぬいぐるみ作ってやるから!」

「あ、あさはかなりっ!」

数日前、ほつれたぬいぐるみを緋村が治してやった時に、同じようなのを作ってやったのだ。そのぬいぐるみを再び作ってくれるといわれた椎名は、緋村を助けられないわけにはいかなかった。

「あ、こら！逃げるな緋村！」

「椎名っち、この犬のぬいぐるみあげるよ！」

関根がバッグについたぬいぐるみを示す。

「・・・あさはかなり」

「うお！？おい椎名！話が違っぞ！」

「・・・・・・・・」

「はっはっは、残念でしたね緋村さん！」

「おのれええ！！！」

そして冒頭へとつながる。

Side 緋村

くそつたれ・・・なんだって俺がこんな事を・・・

「もう少し明るい顔して歌えよ。客受けが悪くなるだろ」

「変にファンが出来たりするよりよっぽど良い」

「あたし達が困るっての！」

・・・本当は、こんな事に参加していいはずが無い。俺は、他の奴らみたいに楽しむ資格なんて無いんだ・・・

「・・・・・・・・」

「緋村！」

「あ！？なんだ？」

「つたく、もう少し集中しろよ」

「ああ、わりい・・・」

「よし、それじゃもう一回サビから行くぞ」

「オッケー！」

「わかった」

文化祭当日、日向らはコントを行う様子だ。TK、松下、高松らは食品の出店、椎名がぬいぐるみの出店、藤巻と大山は的当てを行っている。そうして夕方五時過ぎ、遂にガルデモのライブが始まろうとしていた。

―体育館―

「準備はいいか？そろそろ幕が上がるぞ」

「はぁー緊張します!」

「あんまり気張りすぎるなよ、ユイ」

「もちろんです!」

「はぁ・・・」

「緋村」

「なんだ?」

「練習の時みたいによればきつと上手くいくから、そんな心配そんな顔すんなって」

「・・・ありがとよ」

>それでは只今より、有志による音楽ライブを開始します。主演は『Girls Dead Monster』!<

~~~~~♪

幕が上がると同時に、岩沢がギターを鳴らす。今回は一曲目から、一番の人気を誇る『Alchemy』だ。

ワアアア!　ワアアア!

「初っ端からAlchemyかよ!」

「今日はのっけからテンション高いな!」

~~~~~♪

「ねえ!あのギター弾いてる人誰!?」

「かつこいいじゃん!」

♪♪♪♪♪

ワアアア！　ワアアアア！

曲はサビに入り、更に会場は盛り上がる。

（緋村！二番からはお前だぞ！）

（わかってるって！）

そして、緋村の歌声が会場に流れ始める。歌詞は、この日のためにアレンジした特別Verだ。といっても、本来の歌詞からはそれ程変わってはいないが。いきなりの歌手変更に、観客が戸惑ったように静まっていく。しかし、緋村とて、伊達にここまで練習させられたわけではない。少しずつ緋村の歌に惹かれた観客たちが歓声を送り始めた。他のメンバーもそれを応援するように激しく楽器を奏で、それが更に観客をあおる。最終的に岩沢と共に歌う部分では、割れんばかりの歓声が聞こえていた。

「ふう・・・みんな！お疲れさん！」

「お疲れ様です！」

「緋村、中々良かったんじゃないか？」

「うるせえ・・・」

「ユイも頑張りました!」  
「そうだな!」

ライブは無事大成功、アンコールで＋二曲を歌い終えた彼女たちは、楽器の片付けに入っていた。

「よし、これであたし達の有志は終わったわけだし、うちあげやるか!」

「賛成です!」

「いいね」

「わかった、緋村も来いよ?」

「ん?ああ・・・」

― 男子寮 ―

Side 緋村

月明かりが照らす中、ベランダに腰掛ける俺。カラン、と手に持ったコップの中の氷が音を立てる。中身はウィスキー、チャアの所からかっぱらってきた。

「肉焼けたぞ」

「こっち野菜だ」

「はしやぎやがって・・・」

校庭から、うちあげの歓声が聞こえてくる。ガルデモだけのうちあげは、いつの間にか戦線全員でのバーベキューパーティに変わっていた。

「・・・今夜は満月か」

季節がついた事で、月の満ち欠けも現れるようになった。律儀な奴だ。

「・・・・・・・・」

ゴク カラン・・・

「イエーイ！のってるかーい！！」  
ワアアア・・・

「この声はユイか・・・元気な事で」

ついこの間消えかけた奴とは到底思えないな・・・よく考えたら、あれからもうかなりの日にちが経ったな。

「あと、何日残ってる・・・？」

わからない・・・しかし、時間が確実に過ぎているのは確かだ。季節から言えば、もう三・四ヶ月しか残っていないだろう。それが過ぎてしまえば・・・

「俺は・・・」

コンコン

「・・・誰だ？」

「よ」

「岩沢か・・・ここは男子寮だ、気軽に入ってくるな」

「堅いこというなって。何で来ないんだ？」

「何に？」

「とぼけるなよ」

顔が怖いぞー笑えー

「気分が乗らなかった・・・それだけさ」

「この頃のお前、なんかおかしいぜ？」

「気のせいだろ」

「・・・まさか、消えるのが怖くなったとか？」

場を和ませようと思っての事らしいが、実はそれ、大当たりだった  
りする。

「うるせーやーい」

「酔ってるのか？」

「悪いかな？」

「悪くないけどさ」

「・・・凶星だったりする」

「え？」

「お前の言うとおりさ・・・消えなくなっちゃまったんだよ、俺は。・・・無くしたくないもんが出来ちまったからな」

「緋村・・・」

「笑えるよな・・・ほんと、大馬鹿野郎だぜ・・・」

そうやって自虐的に微笑む。

「その・・・無くしたくないものってなんだ？」

「さあな」

「はあ・・・」

「当ててみるといい・・・音楽が好きで、夢に向かって一生懸命で、音楽の事となると人が変わったように熱くなって・・・声があっても、綺麗なやつだ」

「・・・」

「お前だよ」

あーあ、言っちゃったよこいつ・・・自分なんですがね。

「馬鹿」

「なんだと?!」

「大馬鹿野郎だよ、ホントに」

「うるせえ・・・」

「それじゃ、あたしはどうなるんだよ」

「は？」

「あたしもさ、好きだよ・・・あんたが」

「・・・」

「でも、あたしは次の人生を歩むって決めた」

「俺は別に、お前に残って欲しいわけじゃなくて・・・」

「あの時約束したろ？一緒に逝こうって」

「もちろん、逝く時はお前も一緒だぜ？」

「・・・ああ!」

「・・・怖いんだ。次の世界にいかたとして、お前に会えないかもしれない。いや、会えない確率の方が高い。それに、この気持ちを忘れていくかもしれない。もっと言えば、人ですらないかも・・・」

「だから馬鹿なんだよ」

「・・・」

「次の世界を、新しい人生を信じさせてくれたのは他でもない。緋村だ。あんたのお陰で、生きてみるのも悪くないって思えた」

「あたしは信じるよ。次の人生でも、必ず会えるって」

「岩、沢・・・」

改めて、思い知らされた。自分の覚悟が、どれだけちっぽけなものだったのか。岩沢達には全然届かない。今までの自分があまりにも

滑稽だ。

「・・・悪かった」

「いいて・・・ほら、行こうぜ！みんなが待ってるぞ！」

「岩沢、ちよつと来てみ」

「なんだ？」

「空」

「ああ・・・今日は満月か、綺麗だな」

「岩沢？」

「な、ん・・・」

「・・・いきなり何するんだよ」

「嫌だったか？」

「・・・別に」

「それはすいませんでした」

「怒ってる訳じゃ・・・」

「よし、これからは許可を取っておくでしょう」

「こいつ・・・」

二人して一通り笑ってから、前から話そうと思っていた事を切り出す。

「・・・最後に一つ、お前に教えておきたい事がある」

「まだ何か隠してたのかよ・・・」

「どうと言うことはない、俺の名前についてさ」

「名前？『緋村 光』じゃないのか？」

「確かにそうだが・・・緋村家に引き取られる前にも、ちゃんと名前があった。この『光』という名前は、赤ん坊の頃に母子共に流行り病でなくした、父さんの本当の息子の名前なんだ」

「そうなのか」

「ああ・・・そして俺は『光』という名前を貰った。でも、お前には俺の本当の名前を知っていてもらいたい」

「・・・うん」

「俺の名前は、？<sup>くれない</sup>紅？に？一？と書いて『<sup>こういち</sup>紅一』なんだ・・・次の世界で、もし会えたら・・・この名前で呼んでほしい」

「必ずって言つたろ？」

「そうだったな」

「よし・・・行こうぜ、紅！」

「え・・・あ、ああ！」

気分は、晴れた

もう迷う必要は無い

今度こそ決めた、一緒に・・・

全員で一緒に、ここを卒業してやる！

## Episode 17 (後書き)

楽曲の名前自体は問題になりにくいとの事でしたが・・・大丈夫だ  
ろうか・・・

## Episode 18

さらに月日は流れ、十月三十日。明日は言わずもがな、ハロウィンである。

―校長室―

「さて・・・明日はハロウィン、オペレーション・サイクロンを発動するわよ！」

「サイクロン？」

「おおおおー!!」

「キター！」

「今年も遂にこの季節だぜえ!!」

「・・・台風がどうかしたのか？」

「生徒たちからお菓子を巻き上げる!!」

「結局それかよ!? お前らやること変わってねえじゃねえか!!」

「楽しめって言ったのはあなたでしょ、音無君。いいじゃない、減るものでもないわけだし」

「お前らに期待した俺が馬鹿だったよ・・・」

「まあ音無、別段今までみたく戦闘には『多分』ならないから、その辺は妥協してやれ」

「あれ、緋村いつのまに・・・」

「まさ・・・岩沢がアンプの新しいのを運んでくれってさ」

「・・・なあ」

「・・・」

「この頃気になってたんだが、お前たまに岩沢を『まさみ』って、呼び捨てにしてないか？」

「サ、サア・・・ナンノコトカナ？」

「…………ま、いいけど」

「ふう…………」

「ガルデモのメンバーにばれたら、きっと血祭だろうな」

「頼むから言うな、いいな？」

「わかつてる」

「明日は朝九時までに、各自仮装して待機しておくこと。あ、くだらない仮装してたら制裁加えるから、そのつもりでいてちょうだい」

「ゆりっぺさん、笑顔でそんなことを言つと悪役のようですよ」

「では解散、仮装に精を出すこと！」

「了解！」「」

Side主人公

ハロウィン、ね……知ってはいたが、参加するのは初めてだな。

「ハロウィンか……ライブもやるんだろ？」

「ああ。そのことも考えた格好しないとな。お前はどんなのにするんだ？」

「別に……ま、明日のお楽しみってことで」

「考えてないのか？ 関根辺りに頼んでおいたらどうだ？」

「あいつの事だし、なんかすごいことになりそうだから遠慮しとく」  
「……………」

ん？急に立ち止まったが・・・

「どした、まさみ？顔色悪いぞ？あ・・・まさか」

「なんか、お前のさっきの一言ですごく不安になってきた・・・」

「ははは・・・きつと大丈夫さ、うん・・・」

「ご愁傷様、とだけ言わせてもらおう。

そして当日。

―男子寮―

Side主人公

はあ・・・何にしようかね。一応昨日チャーのところから適当に搔つ攫ってきたけど。

「吸血鬼・・・これとか楽しそうだな」

マント着て、シルクハットかぶって完成・・・うん、これにしよう。さて、そろそろ行くか。

コンコン

「ん、音無か？」

ガチャ

「「「Trick or Treat!!」」」

えーと？魔女、なんか黒い布と鎌、吸血鬼・・・だな。あ、かぶつた。

「お前ら・・・男子寮だぞ、ここは」

「今日は特別解放日だから、問題無いんだよ」

「そうなんです。今日はハロウィンデーで、授業とかも四時限目で終わりなんですよ」

「だからほら、さっさと菓子出せ」

「どっかのいじめっ子みたいに聞こえるからやめなさい。それに、俺まだ用意してないんだけど」

「えー！？」

「直接ここに来るとは思ってなかったから、準備してねえんだよ・・・あれ、そっぴや岩沢は？」

「ぐふふふ・・・」

「なんだその笑いは」

「なんか、関根が仮装させてから、部屋に籠って出てこない。あたしまで締め出されちゃったよ」

「・・・まあいい。ちょうど向うに用があつたし、俺が迎えに行ってくる」

「それじゃ、お菓子待ってますねえ」

「あーい」

―女子寮―

先に用を済ませた俺は今、岩沢たちの部屋の前に立っている。

「まさみー？あいつらも待ってるぞー」

「・・・・・・・・」

「いい加減にしろよ、関根に頼んだお前が悪い・・・多分」

「・・・・・・・・」

む・・・・・・・・余計に引き籠ったようだ・・・

「どんな格好でも笑わねえから、まずは顔を出せ。外に出るのが嫌なら部屋に入れる」

「・・・・・・・・」

カチッ

「・・・・・・・・入るぞ」

「・・・・・・・・おはよ」

うん、なんで布団に潜り込んでいるのかな？

「ほら、でてい」  
「・・・」

うん、なんでその上に帽子をかぶっているのかな？

「取るぞ」  
「あ・・・」

ピョッ

「・・・え？はあ！？」  
「・・・」

落ち着け俺、目を閉じて深呼吸だ・・・そして目をしっかり開いて・・・うん・・・

「それは・・・生えてるのか？」  
「・・・ああ」

「猫の耳・・・か。何かあった？」

「昨日の夜、関根になんか飲まされて・・・今朝関根がまた飲ませて、気付いたら・・・」

「・・・うん、行くぞ」  
「・・・」

「とにかく関根を捕まえないと・・・でもまあ・・・」

これもこれで・・・いいか。関根、グッジョブ。

「・・・今日、お前も参加な」

「え？・・・はあ！？参加って・・・ライブか？！」

「もちろん」

「マジかよ・・・」

呆然とする俺を尻目に、さっさとギターを担いで出ていこうとする岩沢。女つてのはなんでこう、勘が鋭いのだろう・・・あれ？

「・・・尻尾？」

「えー？あ、本当だ・・・くそ、関根の奴・・・」

「ま、猫娘的なあれで行こうじゃないか」

「はあ・・・」

――空き教室――

やっと緋村たちが練習場所に到着すると、すでにユイも来ており、練習が始まっていた。

「遅いぞ、二人とも」

「あいあい」

「あれ、緋村先輩今日も参加するんですか？」

「参加させられた」

「それよりお菓子！」

「わかってるって・・・あと関根、ちょっとこい」

「なんですか？」

「要件はわかってるな？」

「岩沢さんのあれのこと？」

「当り前だろう。何をした」

「ちよつとこう・・・あれっすよあれ！」

「要はチャイ辺りに作ってもらったんだな？」

「はい！」

「自信満々で答えるなつての。で、どうやったら治るんだ？」

「今日一日で効果は切れる筈だよ」

「そうか」

「だとよ岩沢」

「ああ、わかった」

その後各メンバーに、売店で買ってきた菓子を渡す緋村。と、そこへいつもの麻雀メンバー＋αがやってきた。

「おはようす」

「Good morning！」

「よ、お前らか」

「早速来てやったぜ！」

「あれ？緋村は何の仮装なんだ？」

音無が不思議そうに聞く。それもそのはず、彼はタキシードを着流しているだけで、これと言って仮装しているようでもないのだ。よく見れば、手に包帯を巻いているようだが、それ以外に何も無い。

「えーと・・・松下五段、握手、してくれるか？」

「うむ、いいだろう」

そういつて松下に右手を差し出す緋村。そして、松下が緋村の手を握ると

バサッ

「うえええ?!」

「なんと・・・」

「Oh・・・Unbelievable・・・」

「てめえなにしゃがった!？」

「うわ・・・」

「ひ、緋村さんの手が・・・」

「い、いやああ!？」

包帯が解け、手が消えてしまったのだ。それまるで透明人間、完全に向こう側が見えている。

「落ち着けて、ほら」

緋村が指を鳴らすと、一瞬で手は元通りになった。先ほどの現象は、一体なんだったのか……？

「ちよいとAngel Playerを使って、俺の体を弄らせてもらったのさ。『Clown skill』……とても名付けておくかな」

「Clown……道化、ね。お前にはあまり似合わない言葉だな」

「俺のネーミングセンスに期待しないでくれ」

「驚かせやがって……さてと、菓子も貰ったし他の場所行くか」

「ああ、奏か」

「どうしたの結弦、そんな格好をして」

「今日はハロウィンだろ？戦線の作戦の一環さ」

「そうなの？」

「ああ……お前は何かしないのか？」

「何をしたらいいの？」

「Trick or Treatって言って、お菓子を貰えばいい」

「お菓子より麻婆豆腐がいいわ」

「あ……そうか。それじゃ、俺が買ってやるよ」

「（おそるべし麻婆豆腐！！）（」

「Trick or Treat!」

「今度はゆりか」

「緋村君、何してるのよ？仮装はどうしたの？」

「握手すればわかるさ」

「どれどれ・・・」

バサッ

「どうだ？驚いたか？」

「あら、なかなか面白いじゃない。他には何か無いの？」

「・・・今はこれぐらいしかないが」

「そうなの？もっと思い切って空を飛んでみたりしなさいよ。それじゃ、今日のライブがんばってちょうだい！」

「ああ・・・」

「正直、あそこまで普通の反応されると凹むぜ・・・」

「仕方ないよ、ゆりっぺだもん」

「妙に説得力のある言葉だ」

「さ、練習続けるよ！」

「へーい」

そんなこんなで戦線メンバーは、一日中お菓子を貰ったり強奪したり、いたずらをしたりして過ごしたのであった。

―夜、女子寮、岩沢達の部屋―

月明かりが照らす部屋の中、岩沢は一人で、愛用のアコギの調整をしていた。ひさはすでに、布団にくるまって寝てしまっている。因みに、まだ耳はついたままだ。

「スウー…スウー…」

「さて…あたしもそろそろ寝るかな」

そんな時、突如として窓が叩かれ、何者かの来訪を告げる。岩沢がベランダに出ると、そこには緋村の姿があった。格好は昼のままだ。

「あ…紅」

「夜遅くに済まないな」

「別にいいけど、どうしたの？」

「Trick or Treat？」

「え？」

「よく考えたら、お前からお菓子貰ってないなーと思ってよ」

「…どっちかって言うと、いたずらをしに来たんじゃないか？」

「」名答・・・」

そついうと緋村は、何時ぞやの夜のように岩沢を抱える。俗にいう『お姫様抱っこ』だ。

「ちょ、ちよつと!？」

「C l o w n   s k i l l   l e v i t a t i o n (空中浮揚)」

緋村がスキルの名を呼ぶと、岩沢と共に体が浮き上がった。そのま  
ま空へと登っていく二人。

「え・・・すご・・・」

「お褒めに預かり光栄だよ」

ふと見上げれば、夜空には満点の星と大きな月。

「綺麗だな、やっぱり」

「お前の方が・・・って、言ってほしかったりするのか?」

「さあな・・・」

「それじゃ本番を」

「え?んむ・・・」

「・・・」

「・・・許可取ってからじゃなかったっけ？」

「今回ののは『いたずら』だからいいんだよ　さて・・・このままお持ち帰りという手もあるな」

「それはやばいって！」

「実をいうと酔っぱらっているの、スイッチが入ると止まらなかつたりする」

「どうしてそこまで飲んだんだよ?!」

「ひさ子やチャーと、大飲み競争してた」

「馬鹿！アホ！」

「そんなこと言うと、余計にいじめたくなるね」

「ぐ・・・」

「ははは・・・冗談だ。最後に残ってる理性を総動員して、お前を部屋まで送り届けよう」

「しっかりしてくれよ・・・？」

ゆらり、ゆらりと揺れながら、ゆったりと静かに飛行して、再び二人はベランダに降り立った。そつ、と抱えていた岩沢をおろし、ベランダの手すりに足をかけようとする緋村。

「あ、ちよつとまてよ」

「どうした？何か・・・」

「・・・たまにはあたしも、『いたずら』してみたくてな」

「素直に部屋に帰すんじゃないかった。今からでも攫ってしまおうか？」

「でももう部屋に入っちゃったし、鍵をかければさすがに入れないでしょ？」

「まったく・・・それじゃ、お休み」

「お休み、紅」

こうして、天上学園の夜は静かに更けていく……かと思われた。

「いゝわゝさゝわゝ？」

「ひ、ひさ子！？」

「どこに行ってたんだー！？それと、さっきのは一体なんだったのかなー？！」

「え、いや、その……」

「よおゝ緋村ゝ」

「ん？なんだお前ら、どうやって俺の部屋に？」

「鍵がかかってなかったから、勝手に上がらせてもらったぜ」

藤巻、珍しく竹山、TK、松下、高松の五人が、いつの間にか緋村の部屋に陣取っている。

「まあいいや、酒飲むか？」

「おう！」

「すみませんね」

「頂こう」

再び緋村の部屋で酒盛りが始まった。途中からTKが卓を持ち出し、各々のつまみをかけた麻雀大会も始まる。そこへ、帰ってきた音無と日向を藤巻が呼び寄せた。

「来たぞー」

「上がるぞ、緋村」

「おう、上げられ」

「で、藤巻・・・ビッグニュースってなんだ？」

「・・・・・・・・」

一筋の汗が、緋村の頬を伝う。藤巻がこちらを見てニヤニヤしているのは、はたして気のせいだろうか？

（嫌な予感しかない・・・）

「おう！聞いて驚け見て驚け！頼むぜ竹山！」

「クライストとお呼び下さい！」

カチッ

竹山がパソコンのキーを叩くと、突然部屋の電源が落ちる。そして、目の前の壁に映し出されたのは――

「ぶっ！？」

緋村が口に含んでいた焼酎を吹き出す。同時に日向が驚嘆の声を上げ、音無が『遂にばれたか・・・』というような顔で、手に持った泡盛のグラスをかたむけた。

「おいおいおい！これってまさか！？」

「しくじったな、緋村」

「貴様らぁ！！いつの間にこんなものを！！」

「いや、てめえの部屋に酒がよくあるのは解ってたから、こいつらと一緒に麻雀がてら飲みに来たわけよ」

「その時、ふと私が窓から外を見上げると」

「ちようどお前が女子寮方面へ、空を歩いているのが見えたというわけだ」

「Night Walker」

「そこで、竹山こいつに頼んで女子寮の監視カメラをハックして、撮影させてもらったわけだ」

「・・・竹山、そのパソコンごと切断されなくなったら、それを置いて横に退け」

「無駄だぜ！もうバックアップも作っておいたしな！」

「・・・・・・」

今の彼を一言で表すなら『顔面蒼白』：これに尽きる

「そんなこの世の終わりみたいな顔すんなよ。どうせ俺たちは死んでるんだからな！」

「うるせえっ・・・大体、音無と日向だって、同じようなことしてんじゃねえのかぁ！？」

緋村、完全酔っぱらいモード発動

「ちょ、待て緋村！？お前なんてことを・・・」

「何い！？てめえらも出来てやがったのか！？」

「そうだぞ、音無は天使と、日向はユイと、あんなことやこんなことを・・・」

「そうだったのか・・・見損なっただぜてめえら！！」

「「緋村！お前よくも！」」

「やかましい！お前らも道連れだあつ！！」

静かだった夜は一転、一部の者により賑やかになる。月と星だけが、その光景を静かに眺めていた。

## Episode 19 (前書き)

今回はネタandぐだぐだ進行(多分)、ご注意下さい。

## Episode 19

―The・裏会議―

「さて・・・諸君、大問題が発生した」

「珍しくしおりんが真面目だ・・・」

「いきなりネタバレしないでよくそれに、あたしはいつだって真面目さあ！」

「遊ぶことに、だろ？」

「もうひさ子さんまで・・・ま、いいや。本題に入りましょっか」

「ああ・・・岩沢を誑かしたあの野郎に、どうやって制裁を加えるか――だ」

「なんですとお！？いつの間にあの刀馬鹿は岩沢さんを！？」

「ちよいちよい兆しは見えてたんだ・・・あたしが迂闊だった」

「いえいえ、ひさ子先輩は悪くねえっすよ！悪いのは全部あの刀馬鹿であつて、もちろん岩沢さんにもひさ子先輩にも一片の非もないです！」

「そこでみなさん、こちらをご覧ください！」

「お前、それってまさか・・・」

「ふふふ・・・そう！『例のアレ』です！この原液を飲ませてみたいと思います」

「げ、原液を使っちゃうの！？さすがにやばいんじゃない！？」

「何をおっしゃる入江殿！これぐらいしてやらないと、こつちの気が収まらないってもんすよ！！」

「確かにな・・・でもチャーに、適当に作ったから原液は使っなくて言われてなかったっけ？」

「多分効果が切れないとか、そういったあたりじゃないっすか？逆にいい薬になりますよ、あの人には」

「よし、今度無理やりにも飲ませるぞ」

「つくしゅ」

「風邪か？紅」

「ここじゃ病氣しないんだろ？」

「そう言えばそうだった」

――空き教室前――

そろゝ

「・・・・・・・・」

ガルデモの練習部屋を覗き込んでいるこの男、別にファンや変質者の類ではない。腰に下げた日本刀――そう、緋村である。

（・・・・あいつらは、居ないな）

「ういーす」

「ああ、さつきから誰か見てると思ったたらお前か」

「休憩か？」

「うん、飲み物買ってくるってさ」

「ふう・・・久しぶりにゆっくり話せるぜ」

今までは何かと言って邪魔が入り、今回わざわざひさ子たちがいない時間を選んだのも、彼女たちに邪魔されないようにである。

「なんで俺だけ責められるのだから・・・」

「そこらへんはあきらめなよ」

「・・・はあ」

すると、突然肩に手がおかれる。

「よお緋村、ため息ばつかだと幸せが逃げるっていうぜ？」

「・・・や、やあひさ子」

カクカクとした動きで振り向いたそこには、飲み物を補充して帰ってきた他のメンバーがいた。満面の笑みを浮かべたひさ子が何かと怖い・・・

「戻ったのか・・・ちょっと緋村任せな」

「任せておいてくれ」

（ま、まさみい！？俺を一人にするな！）

面倒に巻き込まれないように、一人逃げ出してしまった岩沢。取り残された緋村にひさ子たちの魔手が伸びる。

「なあ、のど乾いてるよな？」

「ああ気にするな、自分で買って・・・」

「観念せえやゴラァ！」

「飲むよな、これ？」

「・・・はい、飲みます・・・」

ぐつと、謎の液体が入った瓶を押しつけられる緋村。得意の俊足で逃げ出そうにも、出入り口はユイと関根にがちりと塞がれている。

（・・・南無三！）

グッ　　ぐく、ぐく、ぐく・・・

「・・・」

「よぉーし、よく飲めたな・・・関根、カメラ」

「何をしようというのかね？」

「いやーちよつとなあー」

「ぐふふふ・・・」

「関根まで変な笑いかも・・・」

シュウウ・・・

「ええ!？」

「そ、そ、そんなあ!？」

「ひ、緋村さんがあ……」

果たして、緋村の身に何が……

10分後――

――空き教室――

「ただいま……あれ、どうしたんだその猫」

ふにゃ

「かわいいじゃん」

そういつて、岩沢が猫を抱え上げる。

「あ!？岩沢、その猫は……」

「どうしたんだ、そんなに慌てて」

「えっと・・・なんと言えば良いのか・・・とにかく下ろせ、な？」  
「なんでだ？」

「にや！にやあ！！」

「ほら！そいつも嫌がつてるし！」

「そこまで言うなら・・・」

下ろされた猫は、一目散に部屋に隅へと逃げて縮こまる。

「そう言えば緋村は？」

「・・・りよ、寮に帰っちゃいました！」

「そうか、せっかく新曲出来たのにな。あいつ用の歌詞まで考えたのに」

「ざ、残念っすね・・・」

そんな彼女たちを横目に見ながら、少しずつ、本当に少しずつ窓へと忍び寄る猫。

がしっ

「何処に行こうってんだ？」

ふにゃ・・・

哀れ、一瞬のうちに再び岩沢に捕まる。挙げ句猫つかみにされ、まったく動きが取れない。

「ここら辺で猫見るなんて初めてだな」  
「そ、そうだな・・・」

膝の上に乗せて、優しく撫でてやるとゴロゴロと喉を鳴らし始めた。

「く、くそ・・・これじゃ逆効果じゃねえか・・・」  
「どうしますひさ子さん!？」  
「とにかく引き離さないと・・・」  
「でもどうやってやるんです?」  
「いっそのことどさくさにまぎれて、窓に向かって蹴り飛ばしちゃいましょうよ」  
「それはさすがに、あいつがもとに戻ったときが怖い」  
「ぐむむ・・・」

もうお分かりだと思うが、この猫、緋村である。先程の薬は、ハロウィンの時に岩沢が飲まされた薬の原液。ひさ子たちは、濃度が効果の持続時間だと考えていたのだが、緋村に原液を飲ませたら本当に猫になってしまった。

S i d e 緋村

うん・・・猫の生活って結構いいかもしれない・・・・・・じゃなくって！いかんいかん・・・精神まで猫になってしまっていたようだ。このままではやばい・・・主に俺の命が（もう死んでるけど）

ふにゃ・・・ （はて・・・どうしたものか・・・）

「い、岩沢さん！」

「なんだ？」

「私にも貸してください！」

「ああ、いいぜ」

にゃ！ （ナイス入江！そのまま俺を外に・・・）

「あー、こーどにひっかかったー」

・・・ （うん、見事に投げ捨ててくれたね）

出るには出られたが、まずい。これは非常にまずい、二階から真っ逆さまとか・・・猫だから何とかなるか？

「・・・ウーーーーーッ！！」

がしっ！

ぐにゃあ！？ （だれだか知らんがナイスキャッチ、そして苦し

い・・・)

誰だ、投げ出された猫をここまでして助けようと言う物好きは・・・

にや・・・ (・・・)

「あ、あさはかなりっ!」

椎名あ!お前かあ!?やばい、最も厄介な奴に掴まった!

「さて、校長室へむかおう」

な、なにっ!?!俺を抱えたまま戦線のメンバーに会いに行く気か?  
!やめろっ、離せ!あいつらにばれたらいろんな意味でやばいっ!!

にや、にやああ!!

「くら、そんなに暴れるな」

うにやああああ・・・ (神よおお!慈悲を、慈悲を与えよおお  
!!--!)

―夜、男子寮・緋村の部屋―

「ぐ、む……」

ベランダに一匹の猫が降り立つ。もちろん緋村である。何とか人語が話せるまでになった様だ。

「えらい目にあつた……立華には捨てられかけるし、ゆりには射撃の的の代わりにされるし、藤巻と野田には斬られかけるし……」

開いている窓から中に入る。今朝閉め忘れていたのだが、今回はかりは助かったとしかいえない。そのままベッドに向かうと、布団の中で丸くなって寝てしまった。

コンコン

むくつ、と緋村が起き上がる。

「はて・・・今なにか・・・」

コンコン

「紅？刀、忘れてたぞ。おい」

緋村、戦慄。昼の様子からして、これでまた岩沢に見つかれば十中八九お持ち帰りされてしまうのは明らかだ。

（どこか・・・どこかに隠れないと・・・）  
「入るぞ」

あの一軒以来、緋村の部屋は酒蔵のように扱われているため、普段鍵はかけていない。そのため、岩沢は遠慮なく部屋に入ってきた。

「・・・」

「あれ、あいついないのか・・・あ、お前は朝の」

「・・・」

「何でここに・・・窓が開いてるじゃんか、無用心だな。ま、かぎ

かけてない時点で用心も何も無いんだけど」

脱出路まで塞がれてしまった。正に八方塞り。

「あいつが帰ってくるまで待つか」

どうやら、お持ち帰りの刑は心配しなくても良い様だ。そうやって一安心して、油断したのがいけなかったようだ。不意に抱き上げられる緋村、思わず声がこぼれる。

「おわっ!？」

「・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・もしかしなくても紅か？」

「・・・・・・・・」

「関根達の仕業か・・・あたしに飲ませたのと同じ薬を使ったんだな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・下ろしてくれ」

「・・・・・・・・ヤダ」

「なっ・・・・・・・・」

「もう少し遊ばせろ」

「人で遊ぶな!」

「いいじゃないか、いつもはこんな事出来ないんだし」

「当たり前だ!」

かくして緋村にとって、今迄で一番長い夜が幕を上げたのであった

## Episode 19 (後書き)

感想、ご意見、ご指摘など待っています。

## Episode 20

12月25日

―空き教室―

言わずと知れたクリスマス、今日も今日とてライブ日和だ。

「なぐんでまた俺が参加せにやなんのだ・・・」

「お前入れた方が、ライブが盛り上がるからに決まってるだろ？」

というわけで今回も強制参加の緋村。断ろうとしたら、前回の写真をばらまくと脅されたとかなんとか。本人曰く、岩沢が持っている分力ずくで取り返せないので、余計に性質が悪いそう。

「うーっす。ひさ子に緋村、麻雀やらねえか？」

「あ、俺やる！！岩沢、そろそろ休憩だからいいだろ？」

「ああ、別にいいぜ」

「それじゃ、あたしもちょっとやってくるかな」

「わかった。それじゃ、ちょっと早いけど練習はこれで終わり。あとは各自で調整しといてくれ」

「はい」

― 緋村の部屋 ―

「これが通れば・・・」

「ロン」

「最後までいわせやがれ！！」

「勝負とは、時に非情なものなのだよ」

「つかお前、ここんところの仕返しだる絶対」

「何か言ったか、貧乏人」

ただ今緋村の一人勝ち。ひさ子すら上回る強運が、今このときの緋村にはあった。先ほどもう５連勝もしている。

「く・・・ちよつと勝てるからって調子に乗るなよ。次こそ絶対」

「アカン、それ負けフラグや」

「くそ・・・」

結局緋村が勝ち逃げ。その後、藤巻その他がひさ子に泣かされたのは言つまでもない。

それはさておき、クリスマスライブ。服は定番のサンタコスである。珍しく緋村までコスプレしていたのは、やはりあの写真のせいだろうか。この後、逆襲のひさ子によって、今回のコスプレ画像をネタに再びゆすられることになるのだが、緋村はまだ何も知らない。いや、知らぬが仏というべきか・・・

――緋村の部屋――

「あー疲れた……」

部屋に戻るなり、電気も点けずにベッドへ倒れこむ緋村。

「……寒いな」

現在の気温、約6℃。生きていたころの温暖な気候に慣れている緋村にとっては、これはかなりきつい温度である。先ほどまでライブをしていたので、体の方は温まっているが、それも時間の問題。

「なんだっけ……まさみ達がなんか言ってた……そうだ、炬燵だ。戦線本部にあったっけ。よし、とって来よう」

と、重い足を動かして、校長室へ向かう。その途中で岩沢に出会った。

「ん？紅か？どうしたんだ、そろそろ消灯時間だぞ」

「ちよつと炬燵を強奪してこようかと」

「炬燵？」

「寒いからな」

「ふーん．．．あ、忘れるところだった」

「何を？」

「ちよつとな．．．部屋のかぎ、開けとけよ」

「あ、おい．．．行っちゃったよ。さっき消灯の時間だって言うてたくせに．．．」

「と言うわけで、まさみを待つこと30分。いつになったら来るんだ．．．」

うつらうつらと船を漕ぎ始める緋村。と、そこへようやく岩沢が到着する。手には何やら袋を持っていた。寒かったらしく、慌てて炬燵へもぐりこむ。

「遅い．．．」

「悪かったな紅、ひさ子を巻くのに手間取った」

「巻いてきたのかよ．．．」

「はい、これ」

「なんだ？」

「今日はクリスマスだろ？」

「ああ・・・どれどれ」

岩沢の持ってきた袋を開けると、中から出てきたのはケーキであった。

「自作か？」

「ああ」

「お前、結構レパートリーが豊富なんだな」

「生きてた頃はいろんなバイトやってたからな。一人で暮らせるように料理関係のバイトを多めにしてたんだ」

「ふうん・・・それじゃ早速、と行きたいが皿とナイフ、フォークがない」

「袋の中にあるだろ」

「おお、あつたあつた・・・皿が二つ？」

「あたしも食ったら悪いか？」

「いや・・・確かに俺一人で食うには少々でかいとは思ってたが」

「ほら、早くきりわけろよ」

「へいへい・・・」

丁寧に二等分していく緋村。まるで定規で線が引いてあるように切り分けていく。

「上手いな」

「お前と同じ、生前のスキルというやつさ」

「そうか・・・」

「あとな、悪いが俺はプレゼントを用意してないんだ・・・」

「なんだよ、軽く期待してたんだぜ？」

「悪い・・・」

「仕方ないな・・・じゃ、もう一回猫に」

「それだけはやめてくれ、な!？」

「それじゃ・・・あれだ。その・・・ケーキを、食べさせてくれ

(小声)」

「・・・それはあれか、あの・・・あーん、ってやつか？」

「そ、そうだよ!嫌だったら強制的に猫な!」

「・・・こつちこいよ」

「え？」

「炬燵で向かい合ったままとか難しいにもほどがある・・・嫌じやなかったら俺の膝にでも座れ」

「あ、ああ・・・」

「ほら、いいか？」

「いいよ」

「でもま、俺が貰ったんだから、一口目は俺が頂く」

ぱくっ

「どうだ？」

「ちよつと甘過ぎる様な気がしないでもないが、普通に旨いぞ」

「そつか、それなら良い」

「ほれ、口開ける」

「「あー・・・ん」」

「・・・確かに、ちょっと甘かったかもな」

「気にする程の事でもないさ」

「そうか？」

「二口目はいらんかね？」

「くれ」

そうやって二人で食べていると、あっという間にケーキは無くなっ  
てしまった。

「ふう、ご馳走さん」

「お粗末さまで。さて、と・・・それじゃ、そろそろあたしは・・・  
・紅？」

「・・・」

「あー、えーと・・・離してくれないか？そろそろ帰らないと・・・

」

「卒業式まで、あと少しだな」

「・・・ああ」

「・・・もう少し、こうさせてくれ。この暖かさを、覚えていられ  
るように。絶対、忘れないように」

「うん・・・」

・・・

「・・・」

「もう一度聞く、本当にそれだけなんだな？」

「これ以上の何を期待してるんだよ・・・」

「期待するわけがあるか！てめえがおかしな事してないか確認してるだけだよ！」

「お前らに弱みを握られてる俺がするわけないだろ！やりたくても出来ねえよ！！」

「ほう・・・」

「あ」

「それは、隙あらばとって食ってやろうという意味かな？」

「ひさ子さん、これはやはり・・・」

「ああ、もう少しOHANASHIしようじゃないか、なあ緋村？」

「いや、先ほどのあれは言葉の綾というものでして・・・え？なにそれ？！ちょ、まで！な！？あ、やめ・・・」

「うおおあああああああ！？」

緋村の身に何が起きたのかは皆様のご想像にお任せします。

それでは、緋村紅一の冥福を祈りまして、黙っ・・・

「勝手に殺すなあ!!」

いやもう死んでますから。

「じゃ、じゃあ……勝手に成仏させるなあ!!」

はい、お疲れ様でした。次回をお楽しみに!

「までこら!有耶無耶でおわら……ひさ子!?!お前まだ……  
た、助けてくれえ……!」

## Episode 21 (前書き)

はい、作者です。更新が遅れてすみません・・・では、どうぞ

## Episode 21

―深夜、男子寮・緋村の部屋―

「Z Z Z…Z Z Z…うぬう…」

ぬう…まさみ、アンコール…いや、アルコールじゃ  
ねえって…

「Z Z Z…Z Z Z…」

パン！パパン！！

ガバッ

「銃声！？」

突然の銃声に跳ね起きた俺、続いて何人かの怒鳴り声が耳に入ってくる。こんな夜中になんなんだ…

―！？

―！？

パパン！

「下か・・・っ!？」

ただならぬ様子を察して、階下へと意識を集中させるが・・・なんだ、この気配は!？おかしい。これはNPCでも、ましてや生きている者——もとい、人の魂を持っている奴の気配ではない。もっとおぞましいナニカ・・・

「とにかく出るしかねえ!」

ガチャッ!

「緋村!」

「音無か!？俺も今出ようと思ってたところだ!」

「ああ!行こう!」

「野田っ・・・と日向か!？」

「俺は・・・」

「どうした野田!？」

「俺は今、何を斬ったのだ・・・?」

「何を、って・・・」

「待て!・・・来るぞ!!!」

ズアッ

「おいおい・・・何なんだよ、こいつは・・・」

「遠慮するなよ・・・気配からして少なくとも、NPCでもここに  
来た新入りでもない！もっとヤバイやつだ！！」

影——そうとしか言えない。しかし、体は気体の様にモヤモヤと  
しており、形は異形、口などはなく手と目しかない。それが二体、  
地上からこの三階へと伸び上ってきた。

「お前ら、どけっ！」

双龍閃！！

「な！？」

一体目は消せた。しかし、二体目はそのまま吹き飛んで壁に激突。  
いくら鞘とはいえ、全力でやった俺の双龍閃を食らって消えねえの  
かよ・・・

「掃射っ！」

ダダダッ！！

バシユン・・・

「「「・・・・・・・・」」」

音無の掛け声で銃を一斉掃射する。それでようやく影を消すことができた。

「消えた・・・のか・・・？」

「少なくとも、この近辺にはもういない」

「ふう・・・」

「おい日向、あれはなんだ？！」

「知らねえよ！俺たちだって長い事この世界にいるけど、あんな化けもんみたいな奴見たことねえって！！」

「音無も日向も落ち着け。まずはほかの奴らに連絡を取ってみよう」

ツツー

『緋村さん』

「遊佐か？」

『そちら、何者かに襲われませんでしたか？』

「来たぜ・・・数は三、なんつーか・・・こう・・・」

『影、ですか？』

「ああ」

『了解しました。すみませんが他の皆さん達に、できる限り早く集まるように通達してもらえませんか？』

「わかった・・・なあ」

『はい？』

「女子寮もやられたのか？」

『ええ。奏さんとゆりっぺさんが撃退しました。被害は0です』

「そうか・・・ありがとよ  
『では』」

「ゆりっぺ達もか!？」

「なに!？ゆりっぺが!？」

「だから落ち着けて・・・立華とゆりが撃退、被害0だとよ  
「そうか・・・」

「それと、明日はできる限り早く校長室に集まってくれだ」と

「わかった・・・それじゃ、今日の所は部屋に戻って休むか」

「ああ・・・しつかしまあ、なんだったんだろうな・・・」

「相手がなんだろうと、ゆりっぺの邪魔をするなら斬るだけだ」  
「じゃ、お休み」

――翌朝、校長室――

「みんな集まったわね？ミーティング始めるわよ」

「昨晚、謎の勢力からの襲撃を受けた。敵の正体は不明、まんまで  
なんだけど『影』と仮称するわ」

「それ以外に言いようがなかったな、あれは」

「撃破方法としては、全身に銃弾を浴びせて霧散させるか、野田君  
や緋村君のような刃物で切り裂くほかない模様」

「数は？男子寮に3、女子寮に2現れたようですが」

「その事なんだけど、これ一度で終わると思えないわ。恐らく再

び襲撃を仕掛けてくるはずよ。撃破に際しては、単独での戦闘は非常に危険・・・少なくとも、二人一組もしくは三人一組で行動すること」

「そういえばさ・・・あいつらにやられたらどうなるんだ？」

日向の一言に、校長室が静まりかえる。

「そこなのよねえ・・・相手の目的が解らない以上、何故襲つてくるのかもわからない。こちらとしては後手に回らざるを得ないのよ」  
「ふん・・・愚民共め、そんなこともわからんのか。もちろん音無さんは華麗なる貴族ですが！」

「・・・何か、可能性があるのか？」

「おおお、椎名が喋った・・・」

「やっぱりすごく大事な事なんだね、これって」

「一つ、ごく僅かだが可能性がある」

「なんなんだ、それは？」

「思い出してください。今、この世界は変革して行っています。その原因は音無さんです。そして、そのような事になった時に、発動するようになっていたプログラムがあったはずです」

「・・・っ！地下にいたあいつの！」

「人をNPC化させるっていう、あのプログラムか！」

「そうだ。緋村・・・お前はその男と約束したらしいが、今この通り、謎の敵勢力に襲撃を受けている」

「しかし、なんで今更？」

「そこなんですよ。今になって、突然約束を破るようなまねをする理由がわからないんです。だから、確立としては低い部類に入ると思います」

「その事です」

普段、ずっと自分のPCをいじり続け、めったに発言することのなかった竹山が突然立ち上がった。

「クライストとお呼び下さい」

「誰に言ってるんだ、竹山？」

「だからクライストと・・・」

「どうでもいいから、さつさと用件を話さない」

「・・・これを。今朝起動したら、こんなメールが届いていました。差出人は不明です。僕の技術をもってしても、結局『Unknown』としか出ませんでした」

竹やm

「だからクライストと！」

・・・たk

「だから！」

やかましい！

・・・ゴホン。クラブふんげふん、竹山がPCのキーをたたくと、

いつものディスプレイに竹山のPCのデスクトップが表示された。  
そのままkey-mailへと進む。

「これがそのメールです」

「こいつは・・・まさかあいつからか？」

【無題】

『すまnai            tAいむrIMIttO    じげnshiki』

「仮名と英の混じった歪な文・・・かなり切羽詰まっていたんでし  
ようね」

「この『じげnshiki』ってのは多分『時限式』だろうな」

「つまり・・・もともあのプログラムには、発動までのタイムリ  
ミットがあつたわけか」

「何でそんなめんどくせえ真似してんだ？話を聞いた限りじゃ、そ  
いつに起動を任せてたんだろ？」

「確かに、藤巻の言うことももっともだ」

「・・・いや、もしかすると」

「どうした緋村？」

「よく考えてみる。あんなギルドの奥底に隠すような、慎重で用心  
深い奴だぜ？もしもの時のことを考えて、リミットを付けていても  
おかしくはない」

全員が一気に不安そうな顔つきになる。

「そのもしもの時というのは？」

「一番に考えられるのはシステムのバグだ。その人物があいつを起動キーと定義したとはいえ、所詮システムはシステム、思わぬところでバグる可能性は十二分にある」

「そうか・・・NPCの独立思考の事ね。限りなく普通の人間と同じように設定されているから、もしかすると指示に逆らってしまいかもしれない・・・つまり、緋村君にそのNPCが『この世界を楽園にする気はないか』って聞いたように」

「そうだ。そいつの考えでは、本来なら『愛』が生まれ、ある程度育てばすぐにでも起動してリセットさせるはずだった。だが『バグ』が発生した」

「その『バグ』の事を考えて、そいつは『愛』がこの世界に生まれ、ある程度維持が続くようなら自動的に起動するようにしてたわけか」

「なんだよそれえ・・・用意周到過ぎんだろ!？」

あきれ果てた様な声を上げる日向。他のメンバーも、皆一様に暗い顔をしている。そこへ、遊佐の無線を通して緊急通信が入った。

「ゆりっぺさん」

「オツケイ・・・こちらゆり、どうした？」

『ガルデモが、影の襲撃を受けています!! 只今護衛班が戦闘中です!!』

「なんですって!？」

「・・・くそっ!!」

弾かれたように緋村が部屋を飛び出す。険しい顔つきのゆりに、日

向が声をかける。

「どうするゆりっぺ!?!」

「……………」

『数は少なくとも10!至急応援を!』

「今緋村君が向かったわ…………もう、この世界は待ってくれないみたいね」

「ゆりっぺ……………」

「全戦線メンバー、もちろん地下のギルドにも通達!!これを本戦線最後のオペレーションとする!!敵勢力を完全撃破!だれ一人欠けることなく、この世界を卒業するわよ!」

「よきたあ!最後にドカンと一発やってやるぜ!」

「僕も……僕も頑張るよ!最後なんだから、神様が驚くぐらい頑張って見せる!」

「山籠もりで絞りに絞ったこの肉<sup>からだ</sup>体…………ようやく使う時が来たかあ!!--」

「Knock in on heaven's door……!」

「オペレーション・Run Away This world……スタート!」

少年少女たちの、最後の戦いが始まる――

## Episode 21 (後書き)

なんか、超展開気味だなあ・・・

よろしければ「ここもつとこうしてくれ」などのご指摘で構いませんので、感想を頂けないでしょうか？

よろしく願いいたしますm(\_\_\_\_\_)m

## Episode 22 (前書き)

どうも、作者です。

またもや更新遅れてしまい、申し訳ありません。

感想、有難うございました。

それでは、どうぞ！

## Episode 22

護衛班の五人が、ガルデモの練習用空き教室の前で複数の影と戦闘を行っている。数は少なくとも10以上はいるだろう。こちらの装備はハンドガンのみ・・・しかも、残された弾薬も底をつきつつあった。

「くっそ・・・何なんだよこいつら!？」

「応援はまだか!？」

「今くる!もう少し持ちこたえろ!」

「つつたつて、さっき弾の補充で本部に帰った奴らもいるし・・・」

「そう長くは・・・うわっ!？」

バリイン!!

護衛班のすぐ隣の窓ガラスが叩き割られ、そこからも影が侵入してきた。さらに形勢が不利になっていく。

「教室に立てこもるぞ!」

「わ、わかった!」

慌てて教室内に撤退する護衛班。それを追うように影が殺到するが、それらの目の前でぴしゃりと戸は閉じられた。そんなことは気にせず、体ごとぶつかって扉を破ろうとする影たち。

「どうなってる!？」

「ひさ子さん・・・やばいです。数も多いし、力も半端ない。それに対して、こっちはもう弾がないです・・・」

「んなこと言ってねえでお前も抑えろ!!」

「すまん!今行く!」

ドンドン!と、幾度もたたかれ、今にも壊れてしまいそうな戸を、護衛班総出で抑え込んでいる。しかし、破られるのも時間の問題だろう。

「マジでやべえな・・・」

「みゆきち・・・」

「しおりん・・・」

「・・・大丈夫さ、もう本部には連絡したんだろ? 応援も来るらしいし、それよりも前に緋村が飛んでくるだろうし」

「でも、連絡入れたのもついさっきだぜ・・・?」

「ひなつち先輩・・・」

「・・・」

「く、そ!」

「もう・・・だめだあ!」

「扉が、もたねえ!」

ドオン!

「うわっ」

「「きやああ!?!」」

ズルリ……

「くそ……来るならきな!!」

ついに扉が破られ、二体の影が侵入してきた。ひさ子がほかの四人を庇うように前に立ち、手近にあったイスをそれらに投げつける。しかし、銃弾ですらなかなか致命傷にはならないこの化け物相手に、椅子はあまりにも貧弱な装備であった。逆にぶつかった椅子が粉碎されるありさまである。

「く……」

「あう……」

「助けて、だれか……」

元々大きな影がさらに膨れ上がり、先頭にいたひさ子を見えない口で呑み込むように覆い被さった……

様に見えた。

そこに、一陣の風が吹き抜ける。

バシユン！！

「か、影が・・・」

「全部・・・全部消えた！」

「はあ、はあ、はあ・・・」

「紅！」

「よう・・・今回ばかりは、間に合ったか・・・」

「大丈夫か！？随分息切れしてるっぽいけど・・・」

「ああ・・・これは、お前らの所まで、全力で走ってきた結果だ・・・ふう・・・」

「そうか、ならいいんだ」

「その途中で20体ぐらい消してきたけどな」

「いや、ちよつとまで。確実にそれが原因だろ・・・」

と、そこへ応援部隊その2の藤巻、日向らが駆けつける。

「ぜえ、ぜえ……緋村、お前速すぎ……」

「ひなうち先輩！来てくれたんですか！？」

「当たり前だろ……にしても、ぜえ、ぜえ……」

「ひ、さ子！？大丈夫、夫か……？」

「息整えてからにしろよ藤巻……せつかくの台詞が台無しだろうが……」

護衛班が日向らに駆け寄る。もちろん、銃の弾を補充するためだ。

「日向、弾薬は？」

「おう、これだ。お前らはガルデモ連れて、校長室に引っ込んでろ」

「そっちはどうすんだ？」

ひさ子の当然の問いに、藤巻が威勢よく答える。

「このまま校庭に行つて、ド派手に暴れてくらあ！」

「わかった……ひさ子さん、岩沢さん。それに入江さんたちも、行きますよ」

「大丈夫か、紅？」

「誰に対して物言つてんだよ……俺は『飛天御剣流最後にして最強の使い手』だぜ？」

「いつの間に『最強』が付いたんだ？」

「決まってるだろ？」

「お前を守る、そう決めた時からだ」

「ほら、わかったら走れ！おいて行かれちまうぞ？」

「・・・わかった」

「じゃ、卒業式でまた会おうぜ！」

「約束だからな？」

「おう！」

校庭、そこはすでに黒い海と化していた。

全てを埋め尽くすかのように広がる黒。それは時折形を変えながら、そろそろと蠢いている。盛り上がり、横に広がり、ふわふわと揺らめいて、只々目的へと突き進む。

それらの只中、まるで絶海の孤島のように、影たちが遠巻きにする箇所があった。ある者は二兆拳銃を乱射し、ある者はアサルトライフルで影を蹴散らし、そしてまたある者は自らの手に握った得物で切り裂き、粉碎していく。また、自らの体そのものを武器として戦っている者もいた。

ダダン！      ダダダッ！

「神は負けない・・・！」

ダン！      ダダン！

「Hye！ Come on！」

「ふっ！はあっ！どうよ！！」

「すげえな！松下五段！」

「ああ！今なら百人組手も夢ではないっ！」

「それは空手だろ・・・」

ザシュッ

「はあああっ！！！！」

ぶんぶんと、独楽のようにハルバードを振り回し、辺りの影を根こそぎ切り裂いていく野田。

ドサッ！

「うをわっ！？おい野田！俺を巻き込む気か！」

「ふん、計算の内だ・・・」

「端折れよ！その計算のうちから！」

「おりゃあっ！！」

バシユン・・・

ズアッ！

「うお！？」

ダン、ダン、ダン！

ツッー

「大丈夫、藤巻君！？」

「おう、大山か！助かったぜ！」

「陰陽歩法・・・飛天御剣流、龍舞閃！」

影に囲まれつつあった藤巻の目の前に、緋村が飛びこんでくる。そして予測不能な静と動の動きを駆使し、そこに的確に斬撃を当てはめ、軒並み影を切り刻んでいく緋村。

「よお、緋村。そっちの調子はどうだ？」

「ここに来るまでの粗方倒したが・・・とんでもないモンを見ちまった」

「緋村ー！」

そこへ音無たちが駆けつけてくる。

「キリがないな・・・」

「だろうよ・・・こいつら、元はNPCだ」

「な、なんだと!？」

「ふざけんなよ・・・この生徒数は約2000人だぞ!？」

「ああ・・・しかも、ごく稀にだが本物の影からも出てくるところを見た。これは大元を叩かねえと倒しきる事なんざ無理だぞ・・・」

「つまり・・・」

「Guild」

指をパチリと鳴らしながら、TKが呟く。

「・・・だが、こいつらを放っておくわけにもいかないぞ?」

「椎名の言うとおりだ・・・だから」

緋村がおもむろに言葉をきる。

「だから？」

「音無、そっちはお前に任せるぞ」

「緋村………っ！？おいお前！？」

音無が叫んだ時には、すでに緋村は影の大群に突っ込んでいった。

たった、一人で。

「ちよっ、緋村！？おい音無！俺たちも行くぞ！」

「……いや、俺たちはギルドに向かう。ゆり達にも連絡を頼む」

「はあ！？」

「それはつまり、緋村さんをここに置いて行くということですか」

「ふざけんなよ！？あいつを見殺しにする気か！？」

「………」

ぎりっ、っと音無が歯をかみしめる。

「……ふん、あの男ならやれるだろう」

「……あさはかなり」

「そ、そうだぜ！あいつならきつとやれるだろう！？」

「いいのかよ、それで！なあ音無！？」

「俺はあいつに『任された』んだ。半端な人数を置いて行けば、逆にあいつの足手纏いになる」

「そ、それは……そうだけどよ……」

「愚民め、もういいからそこで待っている。僕と音無さんで片を付

けてきてやる」

「なにい!？」

「・・・・行こう!少しでも早く止める事が出来れば、それがあいつのためにもなるんだ!」

S i d e 緋村

「あーくそ、戻ったら二、三発殴られるのを覚悟しとかねえとな・  
・でもなあ、あれぐらいしとかねえと、あいつら絶対ついてくるだ  
ろうしなあ・・・・」

苦笑しながら、最後にちらりと見た音無の顔を思い出す。はつきりと『馬鹿野郎!』と書いてあった。他の奴らも然り、だろうな。

「さあて・・・」

ずるり・・・ ずるずる・・・

「ベタな台詞だが・・・ここから先は、簡単には通さねえぜ?」

そういつて、前方に固まる影の集団を睨みつける。

ずあっ!

五体ほど、俺に向かって飛び出してきた。

「てめえらは化けもんだから・・・加減はしてやらねえぞ?」

「牙突・弑式!」

その五体を一気に貫き、切り裂いて消滅させる。直後に、背後から影が急襲してくる。今度はそれを、零式で吹き飛ばす。

「牙突・零式!」

ドゴオン!

「おうおう、よく飛ぶねえ」

吹き飛ばされた一体は、後ろに居た二、三体も巻き込む形で霧散する。

「ん、囲まれたか……」

……… ドッ！

「おおと……」

大きく上空に飛び上がって、回避する俺。

「それで、空中の無防備な俺を仕留めるってわけか？」

ズズッ！

「甘い……」

逆刃刀を背中に背負うように構え、眼下に迫る数体へと、斜めに全力で振り下ろす

「飛天御剣流・紅の形——くれない——龍暴閃！」

龍暴閃——大きく上段に構え、上空からありったけの力を込めて振り下ろす事で、凄まじい破壊力を生み出す。超高速で振り下ろすので、同時に真空の刃も発生し、離れた範囲まで深い爪痕を残す。まるで龍が暴れまわったかのような一撃、故に龍暴閃。これは俺が考え出した「紅の形」のうちの一つ。

発明と言え、さっき使った龍舞閃も俺が考えた形だ。

この龍暴閃、生きてた頃はあまりの威力で、発明したはいいが使う機会がまったく言っていていいほどなかった。

「けど、こいつら相手になら思う存分やれるな」

足元の影を一掃し、悠々と着地する俺。

「さあ、次はどいつだ？」

—ギルド連絡通路—

ギルドの深奥へと続く扉の手前で、ゆりは足止めを喰らっていた。扉付近は校庭に引けを取らない程の影の大群。それに対して、現在のゆりの装備はハンドガン一丁・・・戦力差は歴然であった。

「くそっ・・・さすが敵の大元、数が多い・・・」

（残ってるのはハンドガンのみ・・・無理だわ。突っ切る事はおろか、一斉に攻めてこられたら・・・）

「ゆりっぺえ!!」

「ゆり!」

「音無君!・・・もう、遅いじゃない」

「俺もいるぞゆりっぺ!」

「つかゆりっぺ、もうここにきてたんだな」

「当たり前じゃない。原因を断たなければ、無限にこいつらが現れることぐらい想像に難くないわよ?」

そういつて、顎で影を示すゆり。

「結弦達の言ってる部屋まで、あとの位?」

「立華さん・・・」

「奏でいいわ。もう貴方達の敵の役目は終わったから」

「そうね・・・奏ちゃん、でいいかしら?」

「ええ」

「ゆり、今緋村が校庭で、しかもたった一人で戦ってるんだ。少しでも早く奥に進みたい」

「なんですって!? 緋村君が・・・でも、あれだけの数を相手にしていたら・・・」

「ここにいいもんがあるぜ」

そついつて、藤巻が松下の持つ木箱を示す。

「うむ、さつきチャー達に渡されたのだ」

「これ、手榴弾じゃない！ナイスよ！」

嬉々として受け取るゆり。同時にサブマシンガンも受け取る。

「よし・・・適当に蹴散らして、次の通路へ進むわよ！」

「了解！」

「3、2、1・・・ドッゴオン！！・・・GO！！」

ゆりの投げた手榴弾が、扉付近の影をほとんど吹き飛ばす。そのままゆりの声を合図に、他の影が扉を隠す前に飛び込んでいく音無たち。近寄りつつある影も順次撃破していく。

（待つてる緋村・・・とつとこの馬鹿げた戦い、終わらせてやるからよ！）

―校庭―

S i d e 緋村

「はあっ、はあっ・・・まだか、音無・・・!？」

ズズッ

「くっ・・・おりゃあ!」

バシユン・・・

あれから・・・30分か？通常で20分もあれば、楽にギルドまで潜れる。影がいることを考慮しても、あの人数ならそろそろ到着してるはずだが・・・

「きつついなあ、おい・・・マジでキリが無え・・・・・・・・」

体力的にそろそろ限界だぞ・・・それに、さつきから手応えがおかしい。逆刃刀の限界も近づいてやがる・・・

（音無おいつの事だ・・・必要以上に急いでるに違いない。さて、もうしばらくの辛ば・・・）

「ぐああっ！？ば、かな・・・・・・・・」

？何か？が、俺に覆い被さった。同時に強烈な不快感と、表しがたい気持ちの悪さを感じる。この状況ではまず一つしかない・・・影だ。

（ありえん・・・・・・・・ここまで接近されたなら、いくらなんでも気配で気づいたはず・・・・・・・・）

「ぐっ・・・・・・・・！？くそ、そういう・・・・・・・・ことが・・・」

ふと足元を見ると、まるで生物の様に脈打っているのが見えた。そう、俺の『影』から奴は出てきたのだ。

・・・・それにしても・・・なんだ、これは。

まるで他人が自分の中に入ってくるような・・・

それまでの俺が消えていくような・・・

「気色、悪いんだよ!!」

土龍閃で地面を叩き割ると、影は俺の体から弾きだされた。

「う、意識が・・・」

不快感が抜けきらず、思わず膝をついてしまう。逆刃刀を杖にして、やっと立ち上がった。同時に、一番聞きたくなかった音が逆刃刀から漏れる。

ピシッ

「・・・そうか、お前も限界か」

遂に、逆刃刀にヒビが入った。さっきの土龍閃の所為だろう。もう牙突だろうが龍翔閃だろうが、精々あと一発が限度だろう。それを最後に、逆刃刀は折れる・・・

「・・・なら」

そうっと、労わるように刀を鞘にしまっ。

「最後まで、大技でかざらねえとな」

「飛天御剣流・・・」

影たちは俺が諦めたと思ったのか、一斉に躍りかかってきた。

そうだ

もっと寄ってこい

全員叩き斬ってやる！

「・・・奥義・天翔龍閃！」  
あまかけりゅうのひらめき

パ  
キ  
・  
・  
・  
・  
ン  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

## Episode 23

Side 岩沢

校庭目指して、全力で走る。すでに日は傾いていて、夕日<sup>タタ</sup>があたしを照らしていた。

「はあっはあっ……あの馬鹿野郎……」

――校長室――

『こちら戦闘班、原因だったであろう機器を破壊。これでもう大丈夫よ』

「マジかゆりっぺ!」

「うあゝ……やっと終わった……」

「だってよ岩沢!」

「ああ……あとは、卒業式だな」

「・・・ですね」

「いよいよだね！ちよつと、寂しい気もするけど・・・きつと向うでも会えるよ、あたし達なら！」

「そうですね！岩沢さん、次も絶対バンドやりますよね！」

「ああ、もちろん」

「あ、そう言えば・・・緋村先輩は」

ツツー

『俺だ』

「ん？音無か、お疲れさん」

『ああ・・・それはいいんだが、そこに緋村いるか？』

「いや、居ないけど・・・」

「どうした？紅・・・緋村が」

「もう気にしないでいいぜ、岩沢。あと少しでこの世界ともおさらばなんだし」

「・・・紅がどうかしたのか？」

『岩沢・・・いや、なんでも』

「音無、正直に言ってくれ。あいつに何かあったのか？」

『・・・実は』

「一人で・・・？」

『・・・すまない』

「・・・」

「えっと、ああ・・・それで音無、あいつは何処にいるんだ？」

『さっきから無線で連絡を取ろうとしてるんだが・・・一向に返

答がない。もしかしてと思ってそつちにも連絡を入れてみたんだが・

・・・」

「・・・あいつは何処で戦ってた？」

『校庭だ』

ダッ！

「あ、岩沢！？」

「岩沢さん！」

「音無先輩」

『ユイか、なんだ？』

「緋村先輩は、どれくらい一人で？」

『・・・俺たちが分かれてからだと、約40分か』

「大丈夫、ですね？」

「あ、あの緋村がそう簡単にやられるわけないじゃん！そんな心配する必要なんて言ってみゆきち！」

『・・・』

「「「・・・」」」

「とにかく、あたし達も探しに行くぞ！」

―校庭―

S i d e 岩沢

「ここだっ・・・」

やっと校庭についた。まだNPCは戻ってきていないようで、赤く照らし出された校庭には人っ子一人見当たらない――紅の姿もあまりに眩しいので、思わず手で顔を覆ってしまう。

「紅!!どこだ!？」

くそ・・・どこにいるんだよ・・・!

「え?・・・あれ、なんだ?」

その校庭に中央あたり、夕日に照らされて二つの物が輝いている。紅がいた校庭で輝くもの・・・逆刃刀!

「あそこに・・・っ!」

走る

走る

その輝きに向かって

そこに彼がいると信じて

心の片隅にある絶望を振り払って

ただ、走る

でも、現実是非情で

そこに、あったのは――

「そん、な……」

脱力して、膝をついたあたしの前にあるのは――真っ二つに折れた、逆刃刀。

「嘘だろ……？なあ、紅……ハロウィンの時みたいに、透明になって隠れてんだろ？」

「出てきてくれよ……紅っ……」

―校長室―

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

戦いが終わった後の校長室。しかし、そこには重い空気が満ち満ちていた。誰一人として勝利の余韻に浸っている訳でもなく、卒業に思いを馳せて、自分の思考に沈んでいる訳でもない。

「・・・・・・・・それで、緋村君は？」

「まだ見つかっていません。現状で彼の痕跡は、岩沢さんが持ち帰った、この折れた刀だけです」

「そう・・・チャー？これ、修理しておいてくれない？」

「うむ、わかった」

そのままチャーは、ギルドへと降りていく。残されたのは、やはり淀んだような重い空気。

「・・・俺の所為「それを言っても始まらないわ」・・・すまん」  
「どうする？あいつを置いたまま逝く訳にもいかねえし・・・」

「・・・どうしようもないわね。いったん解散、緋村君の搜索も止めするよう伝えて」

「了解です」

「みんな、お疲れ様。今日はおしまいにして、彼についての本格的な会議は明日にするわ。各自、体を休めてちょうだい」

「・・・うーっす」

「了解です」

「・・・肉うどんでも食べるか」

「アイツは帰ってくるさ・・・Certainly come back」

「あさはかなり・・・」

「岩沢の様子はどうか？」

「部屋でずっとギター弄ってるらしい・・・相当堪えてるみたいだな」

「そうか・・・」

「・・・まあ、音無、そう気にするなって！この世界から消えちまった訳じゃねえんだ。きつと帰ってくるさ！」

「・・・ああ」

翌朝

―女子寮―

「う、ん……岩沢？起きてるか？」

「ああ、おはよ」

「……寝たか？」

「寝たよ」

「嘘つけ、ほとんど寝てねえだろ」

「……敵わないな、ひさ子には」

緋村が見つからないまま、翌日の朝。岩沢はずっと緋村がどうなったのか考えていた。

（NPCになるって……結局どういうことなんだ？）

NPC化——文字通り捉えるのだとすれば、他の生徒宜しく、規則正しい学園生活を永遠に此处で送っていくだけの存在になってしまふということだ。

しかし

その際、彼の魂はどうなるのだろうか？

（ずっと、ここに縛り付けられたままなのか……？そんなの、あんまりじゃねえか……）

自分の無力を痛感しながら、校長室へと重い足を動かす岩沢であっ

た。

S i d e ?

「くそっ・・・寝過ごしちゃった」

やつべえ・・・いつもならこんなことは無いんだが・・・

「あと3分・・・間に合うか!？」

学校までの道を、全速力で走り抜ける。おっと、前方に女子を二名発見。ぶつからないようにしねえと・・・

「つか、よくあんなにゆっくり歩いてられるな・・・遅刻したら先生うるせえのに・・・」

よく見れば正規の制服じゃねえな・・・ああ、SSSか。それに、

肩に背負ったギターとあの赤髪……その隣は短く束ねた髪に  
これまたギター……まさか

「……………」

ちらっ

「……？あつ……」

「失礼しました」

やっぱりそうだ。この学園で熱狂的な人気を誇る『ガルドモ』のヴ  
ォーカル、『岩沢まさみ』さんとリードギターのひさ子さんじゃね  
えか……

「時間あつたら話とかしてたんだけどなあ……」

くそ……何故だ目覚まし、何故今日に限って鳴らなかった……

「・・・今は」

「紅、だよな・・・」

「ああ・・・多分、間違いない」

でも、と二人は思う。

彼が着ている服、それは正規の男子用制服。

N P Cと同じ服。

「これが、N P C化って奴か・・・」

「・・・紅！」

「待てよ、岩沢！」

「・・・わかってる。あいつは多分、あたし達とのことを覚えてない」

「さっきの反応からして、そうだろうな」

「まずはゆりっぺ達に報告だな」

―校長室―

「緋村君を見つけた！？どこにいたの?!」

「今朝ここに来る途中ですれ違った。どの教室に入っていったかはわからない」

「そう・・・様子はどうだった?」

「多分、あたしたちの事は忘れてると思う」

「そう・・・正確には、私たちと過ごした時間を、かしら・・・」  
「どうということなんだ?」

日向が不思議そうにつぶやく。

「今までの事を思い出してみて。NPCは、私たちが起こした抗争についてはまったくもって無関心だったわ。でも、私たち個人の事は知っていた」

「つまり、名前程度なら覚えているというわけですね」

「そういうこと」

「・・・あとは、どうやって元に戻すかだな」

「そうね・・・」

緋村の存在と、その状況は分かった。残るは最後の難関――ど  
うやって「人」に戻すか・・・

「どうにかして、私たちとの記憶を思い出させることが出来れば、  
何とかかなると思うのだけれど・・・」

「・・・みんな、何か案はないかしら？」

「叩けばいいのではないか？」

「単純すぎるだろ・・・」

「・・・いえ、案外いけるかも」

「そうだろう、ゆりっぺ！」

「ふん、まぐれに決まっているだろう。図に乗るな」

「貴様！？」

「それでゆり、叩くってどうやるんだ？」

「これよ」

そういつてゆりが示したのは、チャーが修理した逆刃刀だった。校長の机の上に安置されている。

「緋村君は生粋の剣士・・・しかも、あれだけ自分の剣に誇りを持っていた。だったら、無理やりにも剣を取らせて、ちよつと戦えば・・・」

「飛天御剣流をきっかけに、生前とここに来てからの記憶を思い出すってわけか」

「おし、善は急げだ。早速行くぜ！」

「おう！」

「今までの借りを返してやる！」

「なんか、私怨で出て行った奴がいなかったか？」

「元に戻ればそれでよし」

「ひでえ・・・」

― A棟 二階の教室 ―

男子勢が手当たり次第に教室を見て回ったところ、A棟二階の一教室に彼はいた。周りに何人かの男子生徒がおり、何やら盛り上がっているようだ。

「おい！次のガルデモのライブ何時か分かったぜ！」

「ほんとかよ！」

「どうせまたガセなんだろう？」

「今回はマジなんだよ！」

「うるせえぞお前ら、騒ぐならどっか行け」

「そんなこと言っちゃって」

「いいのか、ばらしても？」

「は？」

「お前がガルデモの隠れファン」

「オーケイ、ちよつと黙ってる」

「あれ・・・だよな」

「でしょうね」

「・・・」

「緋村！」

「あ？野田君じゃなか、どうした？」

「の、野田君！？」

「野田君だつてよ」

「うわぁ・・・」

「信じられんな・・・やはり俺たちと過ごしてきた記憶だけが消えているらしい」

「とにかくだ！これを持って！」

そう言つて、野田は緋村に逆刃刀を突きつける。

「は！？そんな物騒なもんどつから持ってきたんだよ！？」

「貴様の物だろうが！！」

「いや知らねえし！」

「だから貴様の物だろう！！」

このままでは無限ループである。そのことをいち早く察知した日向が、松下とTKを連れて拉致にかかる。

「まあまあ、ちょっと待てよ野田。こんな所でやりあつわけにもいかねえだろ？」

「ぐ・・・」

「つーわけで松下五段とTK？よろしく頼むわ」

「では、こいつは借りていくぞ」

「It's rental！」

「え、ちょ、なにg」

ドスッ

「ぐえっ!？」

「さらば!」

残されたのは呆然とする男子生徒達。

「「「・・・」」」

「・・・まるで嵐だな」

「それ以外にどう表せばいいのか・・・」  
「緋村、お前何やらかしたんだよ・・・」

――屋上――

ドサッ

「いてっ!？」

無造作に投げ出された緋村が、屋上の地面にぶつかり短い悲鳴を上

げる。そこへさらに、棒状の物が投げつけられた。もちろん逆刃刀だ。

「なんなんだよ、一体!？」

「さあ、剣をとれ緋村!!」

「ええ!？」

緋村が立ち上がると同時に、ハルバードを構える野田。突然の出来事に、緋村はまだ状況を把握することができない。

「じよ、冗談だよ・・・な？」

「来ないのなら・・・こちらから行くぞ!!」

「マジで!？」

咄嗟に剣を抜き、振り下ろされたハルバードを受け止める。辺りには金属同士がぶつかり合う、澄んだ高い音が響いた。

「なんだこの剣・・・刃が逆に・・・」

「思い出したか!？」

「アホ、この程度で思い出してたら苦労しねえって」

「誰がアホだ!!」

「お前だよ」

「何の話をしてるんだよ、あんたらは・・・くっ・・・」

緋村が苦しそうにうめく。

「おい緋村」

「なんだよ・・・っと！」

何とか野田を押し返した緋村

「貴様の覚悟は！その程度だったのか！？」

「だから・・・何の話だって、言ってるだろ！！」

ヒュッ      ドゴォ！

「ぐあっ！？」

「これは・・・龍槌閃、というやつですか？」

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「まだ、思い出さんのか・・・」

「だから・・・」

「貴様は！あの時一人で飛び出したことを！その時の覚悟を！忘れたというのか！？」

野田につられて、他のメンバーたちも怒鳴りだす。

「そうだぜ緋村！俺たちと麻雀やったる！？」

「お前、ガルデモのみんなを守るって言ってたじゃねえか！」

「・・・俺が、ガルデモを？」

「そうだ！ガルデモを、岩沢を護るって！」

「岩沢さん・・・？」

「お前と稽古をしたことを、俺は覚えているぞ」

「Danceを教えてやったぜ？」

「・・・訳わかんねえよ」

「なんなんだよ、くそ・・・」

各々に言葉をかけられると同時に、緋村の中で断片的に記憶が再生される。

それは、NPCの緋村にとっては在り得ないはずの記憶。

人としての緋村の、強き意志。

（こんな事、在るはずがねえ・・・俺は今まで・・・今まで？）

「俺、は・・・」

「そうだ！思い出せ、緋村！」

「「緋村（君！さん！）」」「」

「うるせえ・・・！黙れよ、この・・・っ！」

・・・」

「!?!?!」

その場に戦慄が走る。一同が振り向いたそこに居たのは――

「岩沢……さん……」  
「……………」

♪

♪  
♪  
♪

「何でこんな所で……」  
「……………」

岩沢一人で、宝物にしている愛用のアコースティックギターを静かに奏で始める。

My song――岩沢の人生の歌、そしてこれまでの全てをかけた歌。

「おい、行くぞ」  
「は!?!」  
「みんな、ここは一旦下がるぜ」  
「おう」

「OK」

その場に残されたのは、二人だけ――

くくくく

「何で……」

くくくくくくくく

(そのアコギは……)

あの日、岩沢と緋村が出会った切っ掛け……このアコースティックギターを取り返した場面から、走馬灯のように次々と、緋村の中を駆け巡る。

『ほら』

『え？あ……』

『よかったら、もう少し歌ってくれ』

『うん、いいけど……』

『だから、我が『死んだ世界戦線』通称『SSS』に入隊してって  
言ってるの』

『ちょっと、緋村？もう少ししっかりしてくれ・・・』  
『・・・あいあい』

『私は天使じゃないわ』

『名前があるのか？』

『奏、立華奏』

『あ、そうだ！岩沢さん、緋村さんにも何か弾かせてみましょうよ  
！』

『な！？関根、貴様何を言い出す！？』

『面白いな、やらせてみようぜ？』

『ひさ子、お前まで・・・』

『いいですね、私も賛成です』

『お前ら・・・』

『まあ、そう言わずに・・・唐突ですが、あなたはこの世界が何の  
ために存在するのかわかりますか？』

『では、質問を変えてみましょう。この世界では、死にはしません。既に死んでいるのですから。変わりに消えてしまいますが、何故彼らは消えてしまうのでしょうか?』

『俺たちは・・・死があるからこそ、愛したものをいとしく思い、一瞬一瞬を悔いの無いように過ごしたいと思う。だから』

『このまま、新たな生への道を歩むと?』

『ああ』

『消えるときはみんな一緒に・・・』

『もしかして・・・サメか?』

『もしかしくてもサメですね』

『オオウ・・・It's shark!?』

『何処までリアルに作れば気が済むんだよ!?』

『ていうか・・・このままだと俺たちもやばいぞ』

『『『『』』』』』

『『『逃げろおおお!~!』』』

『ベタな台詞だが・・・こっから先は、簡単には通さねえぜ?』

）  
）  
）  
♪

「・・・」

「・・・紅、約束したよな。卒業式でまた会おうって」

「・・・」

「なのに何やってんだよ・・・また約束破る気か？」

「・・・」

「なあ・・・答えろよ・・・紅」

「・・・悪い」

「え・・・」

「またな、岩沢・・・歌、有難う」

## Episode Final

― 体育館 ―

朝、体育館には数十個のパイプ椅子が等間隔で並べられていた。そして、ステージの壁には――

『死んだ世界戦線 卒業式』

そう、大きく書かれた額縁と、本来なら国旗がかけられるべき位置には、戦線の大きな紋章がかけられていた。

時を遡る事十数時間前――

― 校長室 ―

緋村を人に戻すための、最後の策であつた岩沢の歌でさえ、彼をこちら側に戻すことはできなかった。とそんな、途方に暮れるゆり達に、岩沢から驚愕の言葉がかけられる。

「緋村君を置いて逝く！？本気なの岩沢さん！？」

「ああ」

「い、いいのかよ！？あいつの魂は、ずっとここに縛り付けられたままになっちまうかもしれねえんだぞ！？」

すぐさま日向が食って掛かる。加熱する日向とは対照的に、冷静な音無が岩沢に尋ねる。

「・・・岩沢、本当にそれでいいんだな？」

「大丈夫だ・・・きっと、あいつはもう吹っ切れてるから」

「え？」

「さ、準備しに行こうぜ」

「・・・岩沢さん」

「あたしはあいつに、生きる事の楽しさを、もう一度生きてみようっていう希望を教えられたんだ」

「あたしは、あいつを信じてる」

「そう・・・それじゃ、遊佐さん？」

「はい、既に回線は開いてあります」

「有難う・・・コホン」

『只今より生徒の呼び出しを行います・・・事前連絡のあった生徒は、今すぐ体育館に集合してください・・・繰り返し、事前連絡のあった生徒は、今すぐ体育館に集合してください』

全校放送で、各地のSSSメンバーに呼びかけるゆり。

「さあ、我が戦線に相応しい、立派な会場を作り上げるわよ！」

場所は再び体育館。窓から照らされた朝日が、体育館内を明るく照らし出していた。開会式は午後二時から・・・それまで、各自思い思いに過ごすが許可されていた。

それだというのに、一つの影が中へと入ってくる。

たった一人、他には誰もいないこの体育館の静寂を、その一人の足音が乱していた。

「・・・・・・」

背格好からして男のようだ。朝日が逆光になり、全容は掴めない。

まるで、誰かに見られるのを恐れているかのように、忙しく辺りを見回している。

「なにやってんだ、俺・・・こんな所に来てどうすんだよ・・・」

男が呟く。その呟きは、誰に聞きたがめられることもなく、朝日の中に消えていった。そして、しばらく無言で立ち尽くしていた男も、滲むようにして朝日の中に消えた。あとに残されたのは、すべてを迎え入れる準備が整った舞台と、変わる事の無い静寂のみであった。

――空き教室――

緋村を除く、陽動班・・・ガルデモの全員が、いつもの教室で演奏していた。これを機に、しばらく全員で演奏することなどないのだから。今流れているのは、ガルデモの演奏曲の中でも人気の高い曲『CROW SONG』。

・・・~~~~~♪

「・・・さ、次はどれにする」

「Alchemyがいいです!」

「じゃ、それにしようか」

「・・・」

「どうした、入江？」

「あ、えっと・・・最後もやっぱり、緋村さんとやりたかったなあ、  
って・・・」

「・・・」

「ああ・・・えっと、すみません！」

「謝らなくなっついていいさ・・・絶対向うで会える。その時にまた、  
あいつを混ぜて演ろうぜ！」

「は、はい！」

「そうだね！」

「今度はずっと一緒だ！」

―屋上―

「・・・」

「結弦？」

「ああ・・・奏か」

「どうしたの？」

「いや・・・」

言葉を詰まらせる音無。

「緋村君のこと？」

「・・・ああ」

「気にしてるの？」

「・・・やっぱり、あの時残るべきだったんだよな」

「・・・そうかしら」

「え？」

「彼は、あなたのことを信じて飛び出した。なら、あなたも彼のことを信じてあげるべきじゃない？」

「・・・そうだな。有難う、奏。なんか吹っ切れたよ、俺も」

晴れ晴れとした顔で、音無が礼を言う。一拍おいて、立華が口を開いた

「私からも言わせて」

「ん？なんだ？」

「・・・ありががとう」

「え？」

「私がここに迷い込んだのは、ある人にお礼が言いたかったからなの」

「・・・」

「そう、あなたに」

「な、なんでだ？」

そうして、話された立華の過去。

生まれつき心臓に持っていた病のせいで、ろくに外にも出られず、友人も少なかった。

そんな折、一人の青年の死体が運び込まれ、その心臓は移植手術のために摘出された。

その心臓は、立華へと受け継がれ――

「今もここで、脈打っている」

「でも、なんで俺だって」

「看護師さんから聞いたの・・・その人は、夕日のように優しい髪の色をした人だったって」

「・・・でも、それだけで」

「最初にあなたに会ったとき、私が何をしたか覚えてる？」

「えっと・・・俺が死なないことを証明してくれ、って言って、お前が俺を」

「刺した」

「その一刺しで解った・・・あなたに心臓がないことが。そして、あなたの人生を聞いて確信した」

「そう、だったのか・・・」

「もう一回、いい？」

「・・・ああ」

遠慮がちに、音無の体に腕を回す立華。

「・・・私に命をくれて、青春をくれて、有難う」

「こちらこそ・・・会いに来てくれて、有難う」

そっいつて、音無も立華を抱きしめた。

ガラガラッと、大きく体育館の扉が開かれる。同時に戦線メンバーが入ってきた。みな、どこか晴れ晴れとした表情をしている。

「うおー、いよいよだなあ」

「なんか緊張するね・・・」

「さくつと終わらせちまおうぜ」

「ふん・・・俺は何処までもゆりっぺについていくだけだ」

「先輩・・・」

「なんだよユイ、んな辛気くさい顔すんなって!」

「・・・はい!」

「やっと、だな」

「ええ・・・貴方達が、ううん、結弦達が手伝ってくれたおかげよ」  
「そうか・・・そうだな」

「大丈夫か、岩沢？」

「大丈夫だって・・・それより」

「ん？」

「なんですか？」

「向うでも、絶対バンドやろうぜ？」

「もちろんさ！」

「こちらこそ！」

「あ、あたしでよかったら、また一緒に演らせてください！」

なんともはや、賑やかになるものである。

『ほら、みんな！聞こえる？』

ゆりが、マイク片手に呼びかける。

「オッケーだー！」

「いつでも始められるぞー！」

音無と日向の声に合わせて、おう！だのイエーイ！だの歓声が飛び



歌い終わってしばらく後、呆然としていた多くのメンバーの内でも早く回復したのは野田であった。

「誰だ！このふざけた歌詞をつけたのはっ！？」

「これはこれで、中々秀逸な歌詞だと思うのですが」

「マジかよ高松……」

「あは、あははは……」

「あさはかなり」

『作詞、作曲はすべて奏ちゃんよ』

「貴様あ！！やはり我らを馬鹿にしているなっ！？」

ささっ、と音無の影に隠れる立華。現在は、『Angel Play』の必要性もなくなったので登録を抹消し、完全に見た目通りの華奢な女子に戻ったのだ。さすがにその状態で、野田のハルバードと正面切って向かい合う勇氣はなかったらしい。

「まあまあ……なんていうか、奏の思いが詰まってて良いじゃないか」

「またそうやって貴様は……もういいっ！」

ゆりが何も言わない手前、自身も反発しにくかったのか不機嫌そうに椅子に座る野田。

『さ、次は……卒業証書授与』

「誰が渡すんだ？」

「俺だっ！」

いつの間にかステージ上にスタンバイしていた日向が、隠れていた机の影から、威勢よく立ち上がる。その頭にはダ○ソーなどでよく見かけるハゲ頭のかつら、更に丸メガネがかけられていた。

『・・・・・・・・・・』

「仕方ねえだろお！！ジャンケンで負けちまったんだから！！」

『悪いけど、主要メンバー以外の証書は作れなかったから、各班ごとでまとめるわね』

「それじゃ、まずは生徒会長からだ」

『生徒会長、立華奏』

「はい！」

立華が、元気よく返事をする。実は立華、生前に卒業式を行ったことがなかったらしい。そのため、今回の式にたいする思いは人一倍強かった。

「次、中村ゆり！」

『え？あたし？』

「当たり前だろ、この戦線リーダーはゆりだからな」

「あ、えつと・・・じゃあ」

「お疲れさん」

「・・・有難う」

「さあさあ、次行こうぜ！」

続々と、戦線メンバーの名前が呼び上げられていく。戦闘班から始まり、護衛班、ギルドメンバー・・・そして遂に、陽動班の順番がやってくる。ガルデモを代表して、岩沢が受け取りに行く。

『陽動班、Girls Dead Monster 岩沢まさみ』  
「はい」

「・・・歌、あつちでもがんばれよ？」  
「わかってる」

『・・・陽動班、緋村紅一』

・・・・・・

「つたく、あの馬鹿は・・・」  
「一応、あたしが貰って・・・」

「待ったあ！！！」

ドン！と、何時ぞやの夜のように大きく扉が開かれる。そこには、肩で息をする一人の？NPC？がいた。

しかし

「悪い悪い……？制服？が見当たらなくてな」

そう言いながらNPCの詰襟を脱ぎ捨て、バツと肩にかけていたもう一枚の服を羽織る。その左肩には、紛れもない『SSS』のメンバーであることを証明するワッペン。腰に下げるは日本刀——もとい、『逆刃刀』。

その姿から導かれる人物は、ただ一人。

『……まったく、もう一回だけ呼んであげるから、今度こそ返事しなさいよ！』

『陽動班、緋村紅一！』

「はい！」

『ほら、遅れてるんだから走る走る！』

「厳しいねえ……」

ゆりに叱られながら、走ってステージを目指す緋村。階段を一段飛ばしで駆け上がり、日向と向かい合う。

「……卒業式に遅刻とか、どれだけお前は馬鹿なんだよ」

「ああ、悪かった」

「それと」

「ん？」

「その・・・？あの時？力になってやれなくて悪かったな」

「・・・ぷっ」

「何で笑うんだよ！」

「いや、律儀だなあとと思って・・・飛び出したのは俺で、本当なら俺が謝らねえといけねえ立場なのに」

「るせえ・・・」

「・・・紅」

名を呼ばれて、振り向く。そこには、彼の帰還を誰よりも待ち焦がれていた、岩沢がいた。

「よう・・・まさみ、待たせたな」

「・・・馬鹿野郎、あたしが、あたし達がどれだけっ！」

「ああ、解ってる」

それ以上言わず、緋村が岩沢を抱きしめた。

「・・・待たせて、本当に悪かった」

「・・・ああ」

「よう、お二人さん、見せつけてくれるねえ」

「やかましい」

『ほら、自慢はそこまでにとっとと舞台から降りなさい！またあの悪趣味な影が出たらどうする気よ！』

「へいへい」

次は、戦線——卒業生を代表して、音無のスピーチ。

いきなり死んだと告げられた自分

意味も解らないまま、戦わせられた日々

各々の、あまりにも理不尽に満ちた人生・・・認められない過去

そんな、過ぎ去ってしまった日々を、できないと知りつつも覆そうと戦った

だが、最後には解りあえた

自分の人生を認め、信頼できる友を得、次の人生への一步を今、踏み出そうとしている

「・・・・・・ともに日々を過ごした仲間の顔を忘れてしまっても、魂に刻んだ仲間の絆は忘れません！みんなと過ごせて・・・本当に良かったです！！有難うございました！」

「卒業生代表！音無結弦！」

パチパチパチ・・・

『全員起立！仰げば尊し斉唱！』

・・・・・・  
♪

$$\begin{array}{ccccccc} \lrcorner & \lrcorner & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \lrcorner \\ & & (1) & 1 & (n) & n & \lrcorner \end{array}$$

「遅いぞ貴様ら!!」

「なにい!？」

「てめえが速かっただけだろ！！」

「やっぱりすんなりとは終わらないんだね・・・」

「あさはかなり」

「あたし達は良かったよね」

「多分問題ない」

「せーのっ！」

歌い終わると同時に、どこかで誰かが嘖き出した。それをきっかけに、メンバー全員へと笑いが伝染する。

ふう・・・さて！

『閉式の辞……これを持ちまして、死んだ世界戦線及びその卒業式を終了します』

『『お疲れ様でした!!』』

『卒業生、退場!』

「私たちは一足先に」

「もう、行かせてもらいます」

「皆さん、今までどうも」

『有難う御座いました!』

「あなた達・・・」

瞬間、主要メンバーを除く全員が『逝った』

皆、満面の笑みを浮かべて

皆、次の人生への希望を抱いて

逝った

「・・・さあ、記念写真撮るわよ!」

「マジで!?!」

「ほら! 急ぎなさい!」

気が付けば既に夕方で、紅い夕陽が戦線を照らしていた。

「その階段よ」

既に設置してあったカメラの電源を入れながら、ゆりが校庭に降りる階段を指し示す。

「あたしはそこに座るわ」  
「なら俺はここだ」

ハルバードを担ぎながら、その隣にドカツと野田が座る。その反対側には、静かに立華が座り、釣られるように音無も座る。

「音無さん！」  
「お、おう……」

更につられる形で直井もその隣に座り、音無の腕に抱きつく。顔を引き攣らせる音無のもう一方の手に、すうっと、もう一つの温かさが重なる。驚いて隣を見れば、夕日の所為か、ほんの少し頬を染めた立華がいた。

「じゃあ俺はここだな」  
「あたしも」

そんな音無たちの後ろに、日向とユイが陣取る。

「それじゃ僕らはここかな」

「んじゃここだ」

「私はここに」

「では私はここで」

「僕はここに」

続いて大山、藤巻、遊佐、高松、竹山が階段に座り、最後に椎名が、お気に入りぬいぐるみを抱えて、手すりにもたれかかる。

「・・・それっ」

「うわっ!？」

緋村が隙をついて、岩沢を抱き上げる。そのまま日向らの後ろに座り

「俺たちはここな」

すぐさまひさ子の制裁が加えられる。

「調子に乗るな緋村!」

「ぐえっ!?!締まる締まる・・・」

「メてんだよ!」

「じゃ、あたし達はここ！」

「だね！」

「Don't stop dancing！」

「うむ！」

遂に、全員が階段に収まった。それを見届けて、ゆりがタイマーをセツトする。

「準備は良いわね？じゃあみんな……」

「次の世界でも、また会いましょう！」

『おう（はい）！！』

パシャッ

シャッターがきられる

既にそこには誰の姿もなく

残されたのは、たった一枚の写真

そこに映っているのは、最高の仲間たち――

## Episode Final（後書き）

どうも、作者のc1owです。

次話にて、本作品「Angel Beats! -Tha sec  
ond life-」は完結いたします。

ここまでお付き合いいただいた読者の皆様、本当に有難う御座いました。

つきまして、作者のページにて簡単なアンケートを作成いたしました。

もしよろしければ、ご協力頂ければ幸いです。

それではこれにて

## Epilogue

とある街、夕暮れ時の道を歩いている二人の少女がいた。この辺りでは？有名？な高校の制服を着ている。どのようにに有名かと言うと・・・まあ、それはまたの機会に。

### 閑話休題

少女たちの肩にはギターのケース、どうやら二人はバンド仲間のようだ。

「・・・・・・・・」

「岩沢？どうしたんだ、急に立ち止まって」

「え？あ、ごめん」

岩沢と呼ばれた少女は、赤と言うよりは紅と言う方が良く、深みのある短い髪の少女。何やら夕陽を見て、思うところがあったらしい。

「ひさ子」

「なんだ？」

「あたし達ってさ・・・本当に、メンバーは5人だけだったっけ？」

「・・・多分」

ひさ子と呼ばれた少女が、自身なさげに答える。こちらは明るい茶色の髪を、後ろで纏めた少女で、どこことなくさばさばとした姉貴的

な雰囲気のある少女だ。

「夕日を見terるとさ・・・なんか、凄く不安になるんだ。大事なものを無くしかけてるみたいで」

「それって、？あっち？の事で思い出せてない部分が関係してるってことか？」

「そんな感じだ」

ひさが口にした？あっち？——それは『死後の世界』。

彼女らは常人と違い、いわゆる『前世』の後に辿りついた、『死後の世界』での出来事を少なからず覚えてる。

だからと言って、彼女らが異常である訳ではないのだが。

しかし、大半の人間は前世の——限られた人間はさらに死後の——記憶を忘れてしまう。彼女らもその影響を受け、ところどころに記憶の欠陥が生じているのだ。

岩沢は、その部分が今の自分の気持ちの原因ではないかと考えている。忘れていた部分を思い出すためには、それに関係した『きっかけ』があればいいのだが、その『きっかけ』は全く見当たらなかった。

「・・・帰るか」

「ああ・・・ま、そのうち思い出さるうぜー！」

「だいいけどな」

彼女にとっての忘れてしまった部分——それは、なぜか無性に愛おしく、取り戻したい記憶であった。しかし、思い出すための糸口は何処にもなかった。

——  
今までは

「あれ？学生か？珍しいな、こんな時間にここを通る生徒なんて、めったに見ないんだけど」

岩沢達の前方20m程度。そこへ路地から、一人の少年が歩き出てきた。身長は170前後、背中には何か棒のようなものを背負っていた。そのまま、岩沢達と同じ方向へと歩いていく。そのすぐ先は坂になっており、段々と少年の体は小さくなっていった。

「そっだな……ん？」

「あ……」

——  
あたしは、あの背中を覚えている——



夕日に照らされた道を、数人の男子生徒が雑談をしながら歩いている。この生徒たちの制服も、有名高校の制服であった。主にスポーツを中心として、全国規模で名の売れている高校だ。

数は五人。雰囲気としては、いつもの常連メンバーと言ったところか。しかし、その会話の中心にいとみられる少年は、表情が完全に上の空であった。

「・・・い！聞いてんのか？紅一！」

「んあ！？」

「んあ！？じゃねえよ、何してんだよ」

「ああ、悪い悪い」

「こいつ、夕日がきれいな日にはいつもこうなんだ」

「見とれてるのか？見かけによらずロマンチス」

「オーケイ、俺の竹刀を食らいたくなかったらそこまでにしとけ」

紅一と呼ばれた少年が、背中に背負った竹刀に手をかける。

「Yes sir！」

彼の友人たちは皆知っている。彼の竹刀は物凄く痛いのだ（実体験済み）。

なんでも寝起きドツキリを喰らわせた結果、全員が部屋を逃げ出す前に瞬殺された。様子を見に来た紅一の母親が部屋に入ると、そこ

にはいつも通りの快眠を貪る彼と、周りに倒れ伏した友人たちの骸があつたという・・・

唯一違っていたのは、彼の手に竹刀が握られていたこと。

「勝手に殺すなよ！」

「誰に言ってるんだ？」

「え？作sy」

「言わせねえよ！」

スパアン！

「ぐふっ！？」

因みに素手である。

「つてえ・・・なんと理不尽な、聞いてきたのはそっちだろうに・・・」

## 閑話休題

少年たちは帰宅途中であつた。皆、部活動には参加していない。いや、正確には紅一は剣道部に所属しているのだが、諸事情によって大会にも参加せず、半分幽霊部員化しているのだ。

「それじゃ、俺はここらへんで」

「あれ？お前の家つてもう少し先の道だろ？」

「ちよつとこつちに用があるんだよ」

「俺たちも行く！」

「できれば一人がいいんだがなあ」

「・・・よし！帰るぞお前ら！」

一番付き合いの長い二人が、好奇心旺盛なもう一人を抑え込んで連れて行く。もう一人は、『いつもの事だな』と言った風に笑っているが、紅一についていく気はないらしい。

「え、ちよ、引つ張るな！もしアイツに彼女とかが出来てたら・・・」

「・・・そこは、友人として応援すべき」

「じゃな、紅！」

「ああ、またな」

後半は、三人がかりで抱え上げられながら連行されていった。

「さて、と」

目的を果たすため、紅一は歩き出す。

彼の自宅に帰るためには、もう一本向うの道を逆方向に曲がらなければならぬ。つまり、この道をゆくということは、かなり遠回り

をしてしまうことになる。

そうまでして、彼がこの道を選んだのはそれなりの訳があった。

（あのギター……誰が弾いてるんだろうな。どっかで聞いたことがあるんだが……）

先々日の夜、彼は夜にこちら辺一帯をランニングしていた。別に深夜徘徊していたわけではない。眠れない夜は、こうやって一汗かいてシャワーを浴びると、彼はよく眠れるようになるのである。

（今日は……あっちの方に行ってみるか。あまり行った事も無いし）

それが先程の道から続く、隣町方面である。彼の家は隣町との境界に比較的近かったのだが、学校への通学路は、小、中は全く、高も先ほどの道のみ、隣町の方角へ続いている物がなかったのだ。故に、彼は隣町についてほとんど知らない。

いつものコースを回ろうと、一瞬立ち寄ったその道を見てから湧い

た好奇心は、なかなか収まらず

(少しぐらい遅くなろうと問題ない・・・まだ零時は回ってないし)

結局、急遽新ルートを辿ることにしたのだ。そんな彼が、半分道に迷いながら走っていると

・・・~~~~~♪

「・・・？ギター、か？」

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪

時間帯を気にしてか、かなり控えめなギターの音色が聞こえてきた。それを聞いた彼の頭に浮かんだ感想は

(・・・懐かしい)

生まれて十七年間、音楽にはあまり関心がなかった彼が、そんな感想を抱くことは無いはずだ。なのに、彼はその音色を懐かしいと感じた。

「・・・もしかして、これと関係があるのか？」

そっと、彼は御守を取り出す。それは彼が自作した巾着袋。その中に入っていたのは・・・

（本当に、知らないうちに持っていたギターのピック・・・）

そう、ただのピック。だが、彼はこれを見ると、どうしようもない焦燥感と愛おしさを感じるのだ。

彼には、他人とは違う個所があった。

前世と、死後の世界の記憶を一部分覚えているのである。だが、それはかなり朧気で、顔が思い出せても名前までは思い出せない事が多かった。

しかし、このピックだけは覚えている。

これのお蔭で、自分は大事なものを取り戻せた。

そしてこれは、その大事な人が使っていた・・・

「人？」

初めて、自分の回想に『人』と言う思想が出てきた。普通に考えれば、それは道具なのだから使用する『人』が居たはずだというのに。

気付けば、既にギターの音色は消えていた。

それに気づいた途端、どうしようもなく心細くなり、なぜか涙すら浮かんだ。

（・・・会いに行こう。明日でも明後日でも、何時でもいい。とにかく、会いたい・・・）

そして今日、彼は行動に出た。知らない通りで、しかも夜だったのが正確な場所は解らない。しかし彼の中には、必ず見つけ出す、いや、見つけ出して会わなければならない、と言う、妙な使命感が生まれていた。

路地を抜け、広い通りに出る。

「確かこの坂を下りて・・・あの道を・・・」

その時だった。坂を中程までに降りた彼の耳に、二人組と思われる足音が聞こえてきた。別段気にはしない。なにせ、ここは結構大きな通りなのだ。帰宅途中の生徒等が居てもおかしくはない。

彼はそのまま歩き続けた。

S i d e 岩 沢

その背中を、数瞬見つめてから走り出す。

知っている、あたしは彼を知っている。

「岩沢！？どうしたんだよいきなり！」

「知ってる・・・」

「は？」

「あたしはあいつを覚えてる・・・」

「あの、坂の所にいる奴か？」

「ああ」

「・・・ギター、貸せよ」

「え？」

「そのままじゃ走りずらいだろ？ほら」

「・・・ありがとう」

「んじゃ、さっさと行ってきな！」

「ああ！」

坂の手前まで来ると、既に彼は中ほどまで降りていた。

背中には、多分竹刀を背負っている。

・・・そうだ

？あいつ？は、よくそうやって剣を担いでいることが多かった。こっちの方が取り回しが効くとか言って、腰にはめったに差さなかった。

「紅！」

ビクツと、？あいつ？が振り向く。夕日の所為でよく見えないらしく、手で夕日を遮ろうとしている。そんな動作が、何時かのあたしに似ていて・・・

「・・・あ」

声を聴いた瞬間、確信した。

あいつだ

間違いない

そうわかった途端、またあたしは走っていた。走って、彼に向けて飛び込んで

「うおっと・・・危ねえな」

「・・・紅」

「・・・久しぶり、岩沢」

「ああ・・・今度の約束は、ちゃんと守れたみたいだな」

「当り前だ・・・何が何でも、お前に会うつつもりだったよ・・・あの時から、ずっと」

「ああ・・・」

S i d e 紅一

「紅！」

不意に響いた少女の声。それを聴いた途端、体に電気が走ったようだった。

俺はこの声を知っている。

そう・・・遠い昔から、俺はこの声を聞いていた。護りたいと思った。一度は叶わなかったが、二度目は守りきる事が出来た。

この声の、持ち主を。

生まれる前から愛していた、その少女を。

振り向くと夕日が直接目に入り、直視することはできなかった。手を翳して、懸命に坂の上にいる筈の少女を探す・・・までも無く、その少女は目に入った。

「・・・あ」

やはり・・・

彼女だ。俺は約束を守れたんだ。

彼女に、岩沢まさみに出会えたんだ。

ふと前を見ると、彼女がこちらに向けて飛び込んでくる。

「うおっと・・・危ねえな」

「・・・紅」

「・・・久しぶり、岩沢」

「ああ・・・今度の約束は、ちゃんと守れたみたいだな」

「当たり前だ・・・何が何でも、お前に会うつもりだったよ・・・あの時から、ずっと」

「ああ・・・」

そのまま俺は、彼女にキスをした。出会えたことを記念して、二度

と離ればなれにならない様に祈りながら・・・

一陣の風が吹き抜ける。俺たちはその風と共に、再び一歩踏み出した。

Epilogue (後書き)

はい、作者です。

ついに、今回の話をもちまして完結いたしました！

これまでご愛読してくださりました読者の皆様、本当にありがとうございます！
御座いました！

もしかすると、このお話には続きがあるかも・・・です。

その時は、また宜しくお願い致します！

それでは、またどこかで・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4865u/>

Angel Beats! ?The second life-

2011年9月15日11時23分発行